



地域を教室に「やりたいを見つける、試す、深める」
～多様なつながりとホンモノ体験から自己形成が図れる学校～



令和6年度文部科学省
新時代に対応した高等学校改革推進事業
(普通科改革支援事業)
実施報告書



滋賀県立守山北高等学校

新学科「みらい共創科」のスタートにあたり

滋賀県立守山北高等学校
校 長 杉 原 真 也

10年後、20年後の未来社会を見据えると、人口減少や少子高齢化、DXなどの技術革新を基盤とした社会構造の変化に、グローバル化や地球環境問題などの一層の進行も予想され、これまでの社会や制度の延長線上では対応できない段階になることが予想されます。こうした情勢への適応だけでなく、自ら未来を切り拓く、多様な人々との協働の中で主体的に答えを見出しながら、時代の変化にたくましく向き合い、持続可能な社会づくりに参画する人づくりを図ることが求められています。

本校は創立当初より、地域に根差した高校を目指し、輝く未来に英知と理想を求めつつ、自立の心を育み、「はつらつ」「すこやか」「たくましく」を創設の教えとし、校歌に歌い継いでおります。卒業生は、各界において力量を発揮し活躍しており、2004年（平成16年）からは「ほらここに人を想う心がある」の言葉をスローガンに学校づくりを推進してまいりました。生徒は、こうした伝統や教えを受け継ぎ、多様性を尊重し自他を大切にすることを育み、未来に向かって自らが課題解決をする気概をもって学び続けてくれているものと期待しています。

令和5年度からは文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革事業（普通科改革支援事業）」の指定をいただき、これまでの地域社会と共にある学校としての取組をさらに発展させるべく、「地域をフィールドとした学び」と「ウェルビーイング」を柱に、多様性を尊重し、他者と協働しながら、よりよい地域の未来を創造することをコンセプトに、令和7年度新学科「みらい共創科」の開設に向け準備を進めてまいりました。

学校設定科目「みらい共創」と総合的な探究の時間の探究活動、各教科における地域連携の授業を軸に、「地域とつながる授業」を展開し、これまで以上に生徒の学びの主体性を高め、生徒個々のキャリア教育の推進につなげていくことを主眼としています。「地域とつながる授業」は、単なる知識の修得ではなく、地域資源を活用した学びを通じて、主体的に課題を発見し、解決を模索する力や、コミュニケーション能力や多様な価値観を尊重しつつ、他者と協働する力を育成することにあります。

今年度、新学科の先行授業をさまざま実施する中で、生徒たちにとって、地域での活動や探究活動にははかりしれない学びの機会があり、学校の中だけの学習では得ることのできない力を育むこと、生徒たち自身が自分の成長を認識できていると思います。また教員は地域での学びや探究活動によって、教室とは違う一面や成長する生徒の姿を目の当たりにし、地域協働や探究活動が、普通科の学びの形を変えていく自然な流れにあることを実感しているところです。

最後になりましたが、本事業の推進にあたり、ご指導ご支援を賜っております文部科学省、滋賀県教育委員会、運営指導委員の皆様をはじめ、各大学、企業、地域の皆様方等、多くの方々に心より感謝申し上げます。“新生守山北高校”を思い描きながら、地域協働や探究活動に不慣れな教職員の行き先を明るく導いてくれたコーディネーターの上田隼也さん、田口真太郎さん、また高校側の無理なお願いも聞き、熱心にかかわっていただいた守山市をはじめ地域の皆さん、さらに日ごろの多くの業務をこなす中、新学科に向けた校内会議、研修等に協力してくれている本校教職員に敬意を表し、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

令和6年度 文部科学省
「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」実施報告書

目次

○新学科「みらい共創科」のスタートにあたり	1
○目次	2
第1章 本校の概要	
1-1 所在地	3
1-2 設置学科および在籍生徒数	3
1-3 スクール・ミッション	3
1-4 スクール・ポリシー	3
第2章 令和6年度研究開発の概要	
2-1 事業の実施計画の概要	4
2-2 事業の実施日程	21
2-3 事業の実施概要	22
(1) カリキュラムの検討内容	22
(2) 管理機関による事業の実施体制や管理方法	39
(3) 高等学校における事業の実施体制や管理方法	40
(4) 運営指導委員会の体制および取組	44
(5) コンソーシアムの体制および取組	46
(6) コーディネーターの配置および活動内容	47
(7) 新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況	52
(8) 管理機関における事業全体の成果検証、評価	63
(9) 管理機関による支援体制	63
(10) 成果普及のための取組	64
(11) 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組	65
(12) 他の事業との関係	66
第3章 研究開発の内容	
3-1 運営指導委員会	67
3-2 教科主任会議	74
3-3 学校運営協議会	75
3-4 先進校視察	76
3-5 カリキュラム検討のための先行授業の実施	78
3-6 守山北高校研究成果報告会	95
第4章 参考資料	
4-1 キャリアデザインイメージ図	96
4-2 学校改革プラン	97

第1章 本校の概要

1-1 所在地

〒524-0004 滋賀県守山市笠原町 1263

1-2 設置学科および在籍生徒数（令和6年5月1日現在）

	1年	2年	3年	計
普通科	125	130	135	390

1-3 スクール・ミッション

- ① 未来を拓く心豊かでたくましい人づくりのため、生徒の自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等の生きる力を育成する学校
- ② 地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校
- ③ 地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校

1-4 スクール・ポリシー



滋賀県立守山北高等学校 スクール・ポリシー



スクール・ミッション ～目指す学校像～

- ① 未来を拓く心豊かでたくましい人づくりのため、生徒の自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等の生きる力を育成する学校
- ② 地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校
- ③ 地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校

このような生徒を待っています (アドミッション・ポリシー)

- ① 高校生活に目標を持ち、学習意欲の旺盛な生徒を募集します。
- ② 部活動や生徒会活動に積極的に取り組み、学校や地域の活性化に貢献できる生徒を募集します。
- ③ 地域課題に関心があり解決に向けての取り組みや地域との協働活動に意欲的な生徒を募集します。
- ④ 互いの個性を認め合い、相手の立場に立って物事を考えられる生徒を募集します。

このような教育活動を行います (カリキュラム・ポリシー)

- ① 地域をフィールドとした体験的な学びと地域課題をテーマに、SDGsの視点から探究学習に取り組めます。
- ② キャリア教育の充実と多彩なカリキュラム、学びのDX等により学力向上に取り組めます。
- ③ 主権者教育や読書活動などにより、思いやりの心、規範意識などの社会性を育てる教育活動に取り組めます。
- ④ 生徒一人ひとりを大切に、個に応じた支援に取り組めます。

このような生徒を育てます (グラデュエーション・ポリシー)

- ① 「人を想う心」を大切に、多様性を尊重する生徒を育成します。
- ② 自尊感情を育み、自らの個性や能力を存分に発揮することができる生徒を育成します。
- ③ 起業家精神にあふれ、地域の課題解決に向け、自ら考え行動する生徒を育成します。
- ④ 豊かなコミュニケーション能力を備え、他者と協働しながら地域の未来を創造する生徒を育成します。

令和5年3月策定

第2章 令和6年度研究開発の概要

2-1 事業の実施計画の概要（事業申請時のもの）

■実施計画書（所属等は令和6年5月現在）

2-1-1 事業の概要

（1）学際領域学科又は地域社会学科等を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 (ふりがな)	学科の種類	設置（予定） 年度	決定
公立	滋賀県立守山北高等学校 (もりやまきた)	地域社会学科	令和7年度	○

（2）学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	40人	学年制	みらい共創科

（3）当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

守山北高等学校では、滋賀県教育研究事業「高等学校における地域との連携による主権者教育の充実事業」の指定を受け、選挙権年齢、成年年齢の引き下げを契機に、主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に、地域社会の様々な課題を自らの問題として主体的に捉え、解決しようとする態度の育成を通して、高等学校における主権者教育の充実を目指す教育の研究を行ってきた。また、「未来の担い手を育むキャリア教育形成支援事業」の指定も受け、自己を振り返り、変容を確認する取組を進めることにより、自らのキャリア形成を見通す力を向上させ、インターンシップをはじめ、課題対応能力やチャレンジ精神、創造性などを育む取組を推進することで、自分の将来を展望したくましく生き抜く態度や能力を身につける教育の研究に取り組んできた。

具体的には、アクティブワーキングとして、興味関心ある学問や職業について、専門家や先輩起業家の講演を聞いたり、SDGsの17の目標の一つを選択して地域課題と結びつけ、福祉施設などの関係機関へフィールドワークに出かけるなど、NPO法人と連携して、グループ探究や発表などを実施し、地域の課題や魅力に着目した実践的な学びを推進する素地が培われてきたところである。

守山市は大阪や京都へのベッドタウンであり、人口推計では2040年まで増加基調であり、「起業家の集まるまち守山」を地方創生の取組目標の1つとしている。守山北高等学校周辺地域は、琵琶湖や野洲川等の豊かな自然、農業地域、琵琶湖周辺の観光地域、福祉施設、スポーツ施設、商業施設、文化歴史資源等、地域教材の宝庫であり、大学や企業等の協力を得ながら、様々な切り口の探究学習に取り組むことが可能であり、アントレプレナーシップ教育との相乗効果で、新たな価値の創造に繋がる教育効果が期待できる。小中高の連携によるキャリア形成と地元の起業家や経済団体等の協力によるアントレプレナーシップ教育を軸とした主権者教育を展開することで、生徒に起業家精神を養成することが可能となる。

守山市および滋賀県で育まれてきた生活基盤や「三方よし（＝ウェルビーイングにつながるもの）」の文化的土壌を受け、この地域社会に根差したウェルビーイングの視点を大切にしながら、他者と関わり、地元の小中学校や福祉施設、NPO等と協働した教育活動を展開することで、自己肯定感や多様性を尊重する姿勢が育まれ、生徒自身がインクルーシブな地域社会のあり方を構想し、地域の人々とありたい未来社会の姿を共有することに繋がるとともに共生社会の実現への

歩みに取り組む新学科の設置を予定している。その主な教育内容は、学校設定教科「みらい共創」を軸に、次のような科目内容を考えている。

「みらい共創Ⅰ」では、多様な人たちとの共創に必要なソーシャルスキルと、SDGs や MLGs（琵琶湖版 SDGs）といった社会的な課題やウェルビーイングの基礎知識を習得し、自身や他者、地域社会も幸せになる視点の拡張を目指す。また、地域や企業等と連携して、提案された課題に対してグループによる探究活動を通して企画提案を考察し、アントレプレナーシップの理解を深める。

「みらい共創Ⅱ」では、1 年次での学びをもとに、実践型インターンシップ（もりきた版デュアルシステム）に取り組み、現場での課題発見とその解決策について、インターンシップ先の担当者から指導・助言を受けながら取りまとめ、全校生徒への成果発表を行う。あわせて、ウェルビーイングの視点から企業や業界、地域社会が抱える課題に対して、高校生である自分自身にできることや解決策を考えるマイプロジェクトを企画する。

「みらい共創Ⅲ」では、2 年次までに探究した地域課題等の解決策を地域社会の未来の姿に具体化する取組を主な内容とする。2 年次に企画したマイプロジェクトを、自身の卒業後の希望進路を見据えてまとめ上げ、その成果物と検討の過程を成果発表会で披露する。文化祭では、企業等の協力を得て起業の視点による企画実践を行う。学外コンテストへの参加や体験入学等を活用して、学びの成果を広く発信する。また、地元自治体や自治会等と協働したタウンミーティングを開催し、地域課題の解決に繋がる政策提言等を行うなど、これまでの学びの成果を地域社会に還元することを目標とする。あわせて、後輩へのアドバイザーとなる活動を通して、守山北高等学校での地域探究の学びの一層の充実を図っていく。

2-1-2 事業の目的等

（1）学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科等を設置する必要性

本県の状況として、県全体の中学校卒業生数は、令和 4 年度は 13,781 人とピーク時から 33.6 %の減少、令和 16 年度には 12,152 人と、さらに 11.8%の減少が見込まれる。このような人口減少や急速な社会情勢の変化に対応した魅力と活力ある高等学校づくりが必要となっていることから、令和 2 年度に滋賀県立高等学校在り方検討委員会を設置し、議論を積み重ね、概ね 10 から 15 年先を見据えて、新しい時代を切り拓く人づくりのための「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」（以下「基本方針」とする。）を、令和 4 年 3 月に策定した。

この基本方針では、生徒が社会から学び地域と連携・協働した学校づくり、そして普通科の特色化を進めることとしており、県立全日制高等学校 44 校中 29 校を占める普通科について、学際領域に関する学科、地域社会が抱える課題の解決に向けた学びに関する学科等の設置を、高校の魅力化・改革の取組の方向性の一つとして示した。そして教育課程や少人数指導の工夫、外部人材の活用を図ることはもちろん、行政機関や地域住民、産業界、大学等との連携・協働を推進するためのコーディネーターの配置やコンソーシアムの構築、学校運営協議会の設置等の取組が重要であるとした。

さらに令和 4 年度には、各県立高等学校のスクール・ミッションを再定義するとともに、基本方針に基づき、各県立高等学校の魅力化の方向性を示す「滋賀の県立高等学校魅力化プラン（以下「魅力化プラン」とする。）」を策定した。守山北高等学校についてはスクール・ミッションを、①地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校、②地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校としている。また魅力化プランでは、地域や社会の将来を担う人材の育成を視野に入れ、地域を教育資源とした体験的な学びや、地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な学びに重点的に取り組む地域連携重

点校に位置づけ、特に新学科設置にむけて取組を推進する。

守山市は大阪や京都へのベッドタウンであり、人口推計では2040年まで増加基調であり、「起業家の集まるまち守山」を地方創生の取組目標の1つとしている。市内には、守山北高等学校のほかに県立中高一貫教育校、私立大学の系列附属高校があり、近隣地域には職業系総合学科高校、農業高校、美術科併置や体育科併置普通科高校、スポーツ強豪校、協働学習の教育課程に特色ある普通科高校と多様な特色ある高校が存在する。その中で守山北高等学校は、学びの特色のない普通科高校の印象が強く、その上公共交通機関の利便性も悪いことが中学生にとって魅力を感じられない高等学校となってしまうところがある。しかし高等学校周辺地域は、琵琶湖や野洲川等の豊かな自然、農業地域、琵琶湖周辺の観光地域、福祉施設、スポーツ施設、商業施設、文化歴史資源等、地域教材の宝庫であり、大学や企業等の協力を得ながら、様々な切り口の探究学習に取り組むことが可能であり、守山市が掲げるアントレプレナーシップとの相乗効果で、新たな価値の創造に繋がる教育効果が期待できる。小中高の連携によるキャリア形成と地元の起業家や経済団体等の協力によるアントレプレナーシップ教育を軸とした主権者教育を展開することで、生徒に起業家精神を養成することが可能となると考えている。また令和4年度には豊かな自然環境を活用し、次世代を担う環境リーダーの育成やアントレプレナーシップ教育など守山北高等学校の魅力ある学校づくりに向けて、市が連携して取り組みたいとの要望が出され、市から地域連携の強い要請があったところである。

こうした高校教育改革方針、県、守山市の施策など学校を取り巻く状況を踏まえ、地域社会の課題や魅力に着目し実践的な学びを展開し、地域の発展・成長に寄与する人材の育成を図る必要があり、守山北高等学校に「みらい共創科」を設置する。

（２）学際領域学科又は地域社会学科等における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科等における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

守山北高等学校のスクール・ミッションは、①地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校、②地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校である。そのことから、地域社会に関する新学科の名称を「みらい共創科」とし、目指す生徒像を、「多様性を尊重し、他者と協働しながらよりよい地域の未来を創造する人物」とする。

他者と協働しながら課題解決に取り組む方法の実践において、多様性を尊重しながら自他を大切に作る姿勢や共感力を身につけることを目指し、またそれらは起業家精神およびキャリア形成に繋がるものであり、予測不可能と言われる社会において、困難を乗り越え、自らの答を見いだしながら未来を切り拓く力を身につけ、主体性やチャレンジ力を備えた地域の未来を創造する人材の育成を目指すものである。

新学科では、地域をフィールドとする協働的な学びを展開することにより、予測困難な社会において、生徒が地域社会の人々と未来のありたい姿を共有し、新たな価値を創造することができる力を身につけることを目指す。そのために、オンラインにより個に応じた学びを深化させるとともに地域をフィールドとした本物体験で地域課題や地域の未来の姿を探究する取組を展開する。

取組を推進するにあたっては、地域社会に根差したウェルビーイングの視点から、地域課題を探究し地域の未来の姿を構想することを大切にする。守山北高等学校の立地する守山市は「豊かな田園都市守山」のまちづくりを推進しており、ウェルビーイングの視点からの教育活動は、市民一人ひとりの幸せを実現しようとする地元自治体と未来社会を共創することに繋がる。また、ウェルビーイングの考え方は、近江商人が遺した「三方よし」すなわち、自分・相手・社会の幸せという理念とも共通する。誰もが「幸せでありたい」という想いを持つ一方で幸せの在り方は

一様ではない中で、人は人と関わり合いながらよき自分、よき相手、よき社会を実現していくという「三方よし」の理念は、幸せの実現へ示唆を与えている。このように、守山市および滋賀県で育まれてきた生活基盤や文化的土壌は、新学科の取組の目標を実現するために必要十分なものと言える。加えて、地域に根差したウェルビーイングの視点を大切にしながら、他者と関わり、地元の小中学校や福祉施設、NPO等と協働した教育活動（フィールドワーク）を展開することにより、自己肯定感や多様性を尊重する姿勢が育まれ、生徒自身がインクルーシブな地域社会のあり方を構想し、地域の人々とありたい未来社会の姿を共有することに繋がるとともに共生社会の実現への歩みを加速させることにもなる。

さらに、「起業家の集まるまち守山」を地方創生の取組目標とする守山市との連携により、小中高の連携によるキャリア形成と地元の起業家や経済団体等の協力によるアントレプレナーシップ教育を軸とした主権者教育を展開することで、生徒に起業家精神を養成することを目標とする。守山北高等学校周辺地域は、琵琶湖や野洲川等の豊かな自然、農業地域、琵琶湖周辺の観光地域、福祉施設、スポーツ施設、商業施設、文化歴史資源等、地域教材の宝庫であり、大学や企業等の協力を得ながら、様々な切り口の探究学習に取り組むことが可能であり、アントレプレナーシップ教育との相乗効果で、新たな価値の創造に繋がる教育効果が期待できる。これらの取組の推進にあたっては、学びのDXを推進し、本物体験に加えICTを活用した対話的・協働的で深い学びにも挑戦する。現地フィールドワークに加えオンラインを活用した探究活動、Webを通じた探究成果発表等を展開することで、一層幅広い視野から地域課題や地域社会の未来の姿を検証することに繋がることを期待している。また、市内の小中学生や地域住民等に開放する取組を通じた地域の「学びのDXの拠点」となる。

2-1-3 実施体制

（１）管理機関における実施体制や事業の管理方法

本県教育委員会事務局における実施体制については、高校教育課魅力ある高校づくり推進室が事務局を担当し、室長1名、参事（校長級）1名、主担当として主査（副校長・教頭級）1名、主任主事1名をその任に充てる。

担当者と校長間で取組状況やコンソーシアムの構築・管理運営について随時情報を共有するとともに、月1回以上は守山北高等学校に出向き、コーディネーター等も交えながら取組を推進していくうえでの諸課題の解決に向けた協議を行う。また、コーディネーターの活動状況については、毎月活動報告書を高校教育課魅力ある高校づくり推進室へ提出してもらい、業務実態を把握・管理する。あわせて高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者が、生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動にも立ち会い、成果や改善点を校長やプロジェクトリーダー、コーディネーター等と協議を行いながら進め、事業管理を行っていく。

また、県の「魅力化プラン」において地域連携重点校に指定した普通科高校（13校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を定期的に開催することを予定しており、この連絡会議において、各高校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認することとしている。この連絡会議の場で、守山北高等学校からの諸提案を行い、関係各組織に積極的な協働・協力を要請し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、地域連携にかかる課題の共有と成果の普及を行っていく。

「地域連携重点魅力化連絡会議」は年1回開催（令和5年度の連絡会議は、令和6年1月23日に開催）し、本県の地域連携重点校について、守山北高等学校からの提案等により、諸課題等の情報共有を行うとともに、他の高等学校の進捗状況を確認しながら、守山北高等学校の改善点等を把握することとしている。働き方改革の観点から、オンラインによる開催も積極的に取り入れ、安定的で計画的な会の開催に努める。

「地域連携重点魅力化連絡会議」は滋賀県教育委員会事務局高校教育課魅力ある高校づくり推

進室が管理し、魅力ある高校づくり推進室長を事務局長に据え、参事（校長級）および業務を専属で担当する主査（副校長・教頭級）、指導主事を配置する。

この「地域連携重点魅力化連絡会議」に加え、守山北高等学校については、年3回、運営指導委員会を開催することで、コンソーシアムの構築や管理運営を含めた事業の進捗状況や成果について、その都度確認し、適宜事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てる。運営指導委員会は外部有識者で構成するものとし、事業の目的に鑑み、以下の構成で委員委嘱を行う。

- ・委員 学識経験者（滋賀大学教育学部教授）：評価や学校経営、改革について指導
- ・委員 学識経験者（立命館大学経済学部准教授）：滋賀県「学校を核とした地域力強化プラン」に係る推進協議会委員でもあり、地域協働について指導
- ・委員 守山市長：地元行政の立場から、地域連携・地域人材育成について指導
- ・委員 民間企業（株式会社日本政策金融公庫 大津支店支店長）：高校生ビジネスプラン・グランプリを主催しており、アントレプレナーシップの育成について指導・助言
- ・委員 民間企業（NPO法人碧いびわ湖）：環境教育の専門家として指導

運営指導委員会は、県教育委員会事務局高校教育課魅力ある高校づくり推進室が管理し、魅力ある高校づくり推進室参事（校長級）が事務局長となり、業務を専属で担当する主査（副校長・教頭級）、主任主事をその任に充てる。

（２）管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

県内における中学生の生徒数減少にともない県立高等学校の小規模化が見込まれることから、管理機関では、令和4年度から県予算において独自に普通科の高等学校を対象とした「県立高等学校魅力化推進事業」を実施している。この事業において、地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置による普通科の魅力化を進めるにあたり、コーディネート人材の必要性がより確かになってきたところである。

コーディネート人材に期待する、評価する考え方は3点ある。1点目として、高校から地域に働きかけるコーディネート機能として、生徒を指導するというより、授業において地域との関わり、機会を作ったり、地域行事の情報提供や人を紹介したりするなど、地域に興味を持つきっかけづくりを求めたい。2点目は、県立学校が位置する地域におけるコーディネート機能（地域住民との関係を築きながら地域と高校をつなぐ）を求める。高校と地域住民の接点づくり、高校生と地域の協働活動を仕掛けたり、住民主体の活動に伴走したりすることで、地域の変化の流れを促進することも期待する。3点目としては、地域連携の流れを持続可能なものにするため、属人的な活動で終わらせるのではなく、協働体制（コンソーシアム）を構築・充実させ、事業指定終了後も持続可能な協働体制構築のコーディネート機能を期待する。その評価は、校長との面談を含めたコーディネート人材の自己評価、コーディネート人材も企画にかかわる学校設定教科の実施に向けた試行的な各種授業・行事での生徒アンケートの結果や、運営指導委員による事業内容全体を含めた教育課程の検証、事業の進捗状況等にかかわり評価を行う。また事業全体としても、年2回実施の学校評価（自己評価や学校関係者評価）において行い、複数の視点で評価していく。

令和4年度末に公表した「魅力化プラン」の中で、本県の普通科高校29校のうち、地域連携重点により魅力化を図ることを推進する13校で「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和5年度から開催する。その中で、守山北高等学校による地域社会に関する学科の設置に向けた具体的な提案を期待するほか、普通科改革の推進のための必要条件を探る中で事業全体の成果・検証を行う。併せて守山北高等学校では、年3回、運営指導委員会を開催し、事業の進捗状況や成果を確認し、適宜、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てることとしている。

さらに、管理機関は、守山北高等学校の協力を得て、卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向

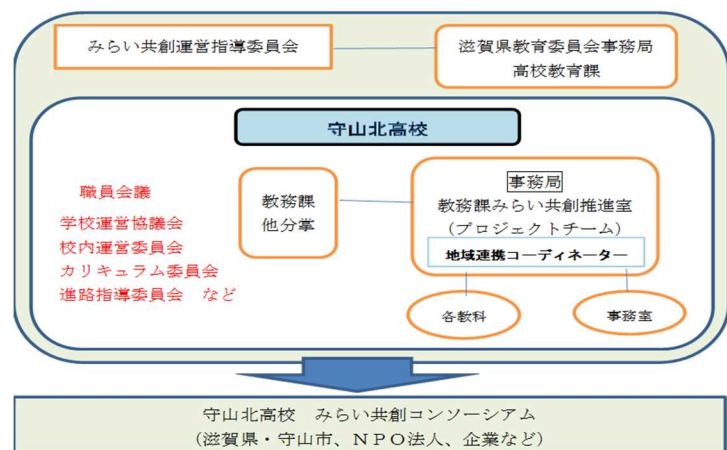
け、卒業時にメーリングリストを作成するとともに、SNS（Facebook や LINE）、学校のホームページなど、複数のソーシャルメディア等を介して、ニュースレター形式で、事業のその後の取組や学校の近況について定期的・継続的に情報を配信したい。それにより、卒業後も生徒とのつながりを維持したうえで、Google Form 等を活用したオンライン・アンケート調査を4年後・7年後に実施し、進学・就職状況や、地域との関わり、地域の社会課題に対する意識の変容、高校時代の学びの有用性等を調査・研究し評価も行う。集計・分析した調査結果は、国の事業終了後も、守山北高等学校や県教育委員会において、本事業の成果の検証および「魅力化プラン」の地域連携重点の事業成果のための基礎資料として役立てることとしている。

また、スクール・ミッション、スクール・ポリシーの観点からも事業全体を成果検証し、評価していく。特に、高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、行政機関の施策への反映やコンソーシアムや報告会でのコメント等で社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としての観点で評価したい。さらに、県教育委員会で実施する中学校等卒業予定者進路希望調査の結果も注視し、守山市内4中学校やそれ以外の中学校から守山北高等学校への志望者数の変化を分析しながら、本事業の地域への広報や魅力、成果について、守山市教育委員会とも協力し分析・検証していくこととしている。

（3）学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校における事業の管理方法

校長は、校務分掌の1つとして、教務課内にみらい共創推進室を設置する。プロジェクトリーダー（専任）および担当教員（教務課兼務）、コーディネーターを配置、協働してカリキュラム開発やコンソーシアム構築の原案作成にあたり、みらい共創科設置の事務局となる。カリキュラムに関すること、進路指導に関すること、学校全体の教育活動に関すること等、内容と必要に応じて、カリキュラム委員会、進路指導委員会、校内運営委員会などの協議を行い、最終的には職員会議で全体報告をして取組を進めている。

校長と教頭は、みらい共創推進室との定期的な会議を実施し、事業全体の企画立案や、地域や大学と連携した新学科のカリキュラム検討状況、地域の各種主体と連携した授業や活動などの企画について報告を受け、事業全体を管理していく。また Microsoft Teams を活用することで、管理職・教員・コーディネーターの日頃のやり取りを可視化し、お互いの状況把握が常時可能な状況をつくる。



みらい共創推進室を中心に、育成する資質・能力を、職員会議の中で学校全体として明確・共有化を図りながら、学校運営協議会やコンソーシアム等を通じて地域とも共有化を図り、カリキュラム開発を計画していく。そして担当教員・コーディネーターが連絡・調整を図りながらカリキュラム全体の有機的なつながりを意識した教育実践を展開する。その実践に対し、生徒の活動への総体的な評価活動、地域住民やコンソーシアムへの意識・評価に関する調査（アンケート）を実施する。その評価活動や調査結果を年3回の運営指導委員会や、コンソーシアム代表者会議、職員会議に諮り、みらい共創推進室を中心に、全教員で生徒と地域の実態を踏まえた教育実践として改善・充実を図る協議を行うことで、PDCAサイクルを展開していく。そのうえで1年間の成果を管理機関が行う「地域連携重点魅力化連絡会議」において、守山北高等学校からの提案

等を行い、地域連携に対する諸課題等の情報共有を行うとともに、守山北高等学校の改善点等に関する助言も得たいと考えている。

令和6年度当初は、学校と地域の関係構築・事業推進を大事にしながら本事業に関するコンソーシアム構築・メンバー調整を行い、各主体との調整や立ち上げ、その運営を実施していく。

また、高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者と校長で取組状況を共有するとともに、月1回以上は、取組を推進していくうえでの諸課題の解決に向けた協議を行うほか、高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者が、生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動に立ち合い、成果や改善点を校長やプロジェクトリーダーなどと協議を行う。

（４）管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

地域社会学科に関わる研究開発の実績としては、令和3年度からマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を彦根工業高校において実施している。彦根工業高等学校は、「ものづくりはひとづくり」をモットーとした創立100年以上の歴史ある学校である。高校がある彦根市には高等教育機関として、滋賀県立大学工学部・環境科学部や滋賀大学データサイエンス学部等がある。伝統技術等のビッグデータ分析などICT・デジタル教育で連携を図りながら、社会的課題を新たなチャンスにとらえ、高付加価値を持つ産業へと創出できる“人財”を多様な主体の共創により育成するシステムを構想し、研究推進に取り組んでいる。

絶えず革新し続ける最先端技術と滋賀の風土が培ってきた伝統産業等の技と心を生かし、地域産業界と彦根工業高校が一体・同期化し、郷土愛にあふれた人財育成によって地域を活性化させ、地域産業の未来像の実現を資するものである。

また、令和元年から実施された文部科学省事業である「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」に3校が申請を行ったところ、令和元年度からグローバル型アソシエイト校に高島高等学校、令和2年度からプロフェッショナル型アソシエイト校に大津高等学校が認定された。

高島高等学校は、地域の特性に応じながら同時にグローバルな視点ももって社会課題の研究を行う、フィールドワークを含む「高島学」での探究的な学びを実施している。また大津高等学校は地域の課題を家庭科の視点から捉え、地域と連携・協働しながら、地域理解を深化させ、職業観を醸成しながら、地域をどのように活性化し、地域に貢献していくべきかに取り組んでいる。両校の事業指定は終了したが研究成果をいかし、地域連携を推進する取組を継続していくとともに、県内高等学校へも情報発信を行う。

さらに、滋賀県独自の研究指定事業として、3つの研究事業を実施している。

「県立高等学校魅力化推進事業」では、モデル校に地域連携のためのコーディネーターを配置し、現在および将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びの推進と、ICTによる学校間連携授業に取り組んだ。

「高等学校における地域との連携による主権者教育の充実事業」では、研究推進校に守山北高等学校を指定し、選挙権年齢、成年年齢の引き下げを契機に、主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に、地域社会の様々な課題を自らの問題として主体的に捉え、解決しようとする態度の育成を通して、高等学校における主権者教育の充実に取り組んだ。

「未来の担い手を育むキャリア教育形成支援事業」では、守山北高等学校をはじめ、17校を指定して、自己を振り返り、変容を確認する取組をすすめることにより、自らのキャリア形成を見通す力を向上させ、インターンシップをはじめとして、課題対応能力やチャレンジ精神、創造性などを育む取組を進めることで、自分の将来を展望し、たくましく生き抜く態度や能力を身につけさせる教育の研究に取り組んだ。

本県では、県立高等学校と地域社会との連携は重要であるにとらえ、守山北高等学校をはじめ

複数の学校に対し、県独自の地域連携事業をはじめ、学校運営協議会設置を推進し、コミュニティ・スクールを拡大してきた。現在、守山北高等学校はコミュニティ・スクールとして地域連携を深めているが、「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を受けることにより、学校と地域の関係性をさらに深め、学校と地域の連携・協働による教育活動の推進の先導性を高めることで、本県高校教育の更なる充実を図りたい。

（５）運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
滋賀大学教育学部 教授	大野 裕己	評価、学校経営、改革の視点で指導助言
立命館大学産業社会学部 教授	柏木 智子	学校と地域との連携、探究学習について指導助言
守山市 市長	森中 高史	市長。行政のトップとして、地域連携、地域人材育成を指導助言
株式会社日本政策金融公庫 大津支店長	桶土井 雅章	大津支店長。企業家精神、ビジネスプランについて指導助言
NPO法人碧いびわ湖 常務理事	根木山 恒平	滋賀県の環境教育を推進する専門家として指導助言

（６）運営指導委員会が取り組む内容

運営指導委員会には県教育委員会から参事・主査・主任主事も入り、大学・企業・関係機関等の専門家と意見交換を図りながら、事業の成果と評価を行う。新学科の目的である、地域を通して学び、将来社会人として地域や社会で活躍・貢献できる力を伸ばす教育について、教育課程の検証、事業の進捗状況等について指導助言を行う。また地域や関係機関のコンソーシアムに働きかけ、学校とコンソーシアムを有機的につなげる役割や、さらに高校教員やコンソーシアムの参加主体に向けた、新学科の理解向上に向けた研修を推進することで、高校と地域のスムーズな連携実現を目指す。

2-1-4 学際領域学科又は地域社会学科等における取組

（１）学際領域学科又は地域社会学科等におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容

琵琶湖に近い立地、豊かな自然環境や歴史環境等の地域資源を活かした本物体験による地域をフィールドとした探究的な学びと、小中高の連携によるキャリア形成や行政・地元企業等と連携したインターンシップ、地域人材の協力によるアントレプレナーシップ教育を軸とした主権者教育（地域人材の育成）を新学科における教育内容の柱とし、学びの方法・手法として、学びのDXを推進し、新しい学びの姿を構築する。1人1台端末を活用する各教科の学習では、個別最適な学びを実現するための補足的・発展的な学習等の学習活動や情報モラルに関する学習に取り組み、またICT機器等を活用した観察・実験・実習の機会を増やす。

また、探究学習の推進にあたっては、大学や企業等の協力を得ながら、生徒自身が、ICTを活用した調査研究に取り組める環境の整備を進め、本物体験とオンラインによる対話的・協働的で深い学びの実現を目指す。例えば、対面では都合がつかない講師とも、一斉的な全体講義だけでなく、グループによるディスカッションを行い、探究の視点の広がりや深まりを期待する。また対面においても、オンラインにおいても、講師には1回の講義ではなく、複数回にまたがる指導も考えている。講師が社会人であれば生徒に対面で指導する時間をとりにくい状況も考えられ、

オンラインを有効に活用したいと考えている。さらに教科学習以外でも、オンラインの活用により、芸術やスポーツの専門性のある教員や生徒が地域の中学校等とともに活動したり、地域や大学等の専門家による指導を受けたりする活動を展開する。この活動は、生徒や地域住民で創り上げるスポーツ・文化活動への発展が期待でき、地域との協働活動の展開や地域の活性化に繋がるものとなる。

教育内容の中心となる地域課題とその解決策を探究する学習は、ウェルビーイングの視点から、地域社会の人々と未来のありたい姿を共有し、新たな価値の創造に繋がるものとなるように取組を推進する。全校的な「総合的な探究の時間」では、守山市を中心とした地域理解と地域・社会課題の解決に向けた探究活動等に取り組み、キャリア形成と地域社会への当事者意識の醸成を目指す。また、学校設定教科「みらい共創」においては、各学年に系統的に学校設定科目を配置し、「総合的な探究の時間」との相乗効果で探究学習が展開できるように配慮する。具体的な学校設定科目としては、1年次に「共創」の基礎理解やソーシャルスキル、グラフィックレコーディング・プレゼンテーション等のスキルの習得をねらいとする「みらい共創Ⅰ（2単位）」、2年次にインターンシップを軸とした地域や企業等との連携プロジェクトを展開する「みらい共創Ⅱ（3単位）」、3年次にはウェルビーイングの視点をもとに、2年次までに探究した地域課題等の解決策を地域社会の未来の姿に具体化する「みらい共創Ⅲ（2単位）」を設定する。各科目における教育内容やそのねらい、評価等については、大学講師のカリキュラム・アドバイザーや革新的な教育活動講師の指導・助言も受けながら研究を進めていく。「みらい共創Ⅰ」「みらい共創Ⅱ」の中で、コンソーシアムの関係団体には、生徒の探究学習の進め方や課題の設定、具体的なフィールドワーク等での指導で協力をいただくことを、「みらい共創Ⅲ」では、コンソーシアム関係者や地域住民、中学生等と地域の未来像などについて懇談を行い、生徒の提案についての評価にかかわっていただくことを想定している。

ウェルビーイングの視点からの探究学習は、一人ひとりの幸せを実現しようと「豊かな田園都市守山」のまちづくりを推進する守山市の構想とも一致し、守山市との協働関係を一層深めることで、学校と地域との未来共創に繋がり、まちづくりにも寄与する取組となる。さらに、一人ひとりの幸せを大切にするウェルビーイングの視点は、生徒が、フィールドワークやオンラインによる他者との関わりを通じて、自己肯定感や多様性を尊重する姿勢を育むことに繋がり、インクルーシブな社会の姿を地域の人々と共有し、学校と地域の未来共創に発展する取組となる。

（２）コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

すでに連携・協力いただいている関係機関もあり、運営指導委員会委員の助言も得ながら、コンソーシアムの体制作りを行う。地域や関係機関それぞれが主体的にできることや意見を出し合う場として、コンソーシアムを構築する。

みらい共創推進室が中心となりコンソーシアムとやり取りを行う。コンソーシアム構成員は、地域に根差したウェルビーイングの観点から県立大学地域共生センターをはじめ、大学や福祉・農業・まちづくり団体・機関等を、アントレプレナーシップ・キャリア教育として、商工関係団体・施設、地元起業家等を構成員に迎え入れる。

本事業におけるコーディネーターは、まずは高校から地域に働きかけるコーディネート機能として、授業において地域との関わりや機会を作ったり、地域行事の情報提供や人を紹介したりするなど、地域に興味を持つきっかけづくりを進める。そのうえで学校が位置する地域におけるコーディネート機能（地域住民との関係を築きながら地域と高校をつなぐ）を発揮し、高校と地域住民の接点づくり、高校生と地域の協働活動を仕掛けたり、住民主体の活動に伴走したりすることで、地域の変化の流れを促進することを期待する。さらに地域連携の流れを持続可能なものにするため、学校と有機的につながった協働体制（コンソーシアム）を構築していく。

地域や社会の将来を担う人材の育成として、行政機関、地域住民、産業界、大学等と連携・協働したフィールドワークによる調査研究や企業コラボ学習、インターンシップなどによる地域課題解決にむけた学習を推進するコンソーシアムとしたい。学校運営協議会や総合的な探究の時間における生徒フィールドワークの協力者から、さらに生徒の課題研究テーマに応じて、新規開拓も行う。結果として高校を核とした有機的なつながりとする事で、地域活性の一端を担うことを視野に入れる。高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としたいことから、コンソーシアムの構成員からも、高校生の取組に対する社会的評価も期待している。

(3) コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
滋賀県立大学	上田 洋平	地域共生センター（地域文化学）
龍谷大学農学部	調整中	食料農業システム学科 食の経済
びわこ成蹊スポーツ大学	調整中	総合型地域スポーツクラブの研究
守山市商工会議所	調整中	1300 件超の参加事業所からの事例
公益社団法人守山青年会議所	調整中	若手実業家と未来を共創
守山市総合政策部企画政策課	中島 義訓	課長 まちづくり推進
守山市教育委員会学校教育課	調整中	小中高連携によるキャリア教育推進
守山市立守山北中学校	高田 毅	
守山市立河西小学校 他	調整中	
株式会社みらいもりやま 21	調整中	市街地活性化事業、空き店舗対策
笠原地区自治会	確認中	学校所在の地元自治会
社会福祉法人慈恵会	調整中	学校所在の地元社会福祉団体
DAVID LAYER(株)COLOR	伴野 友彦	守山市で起業（新庄スーツ）、OB
株式会社 CITTA	青木 千草	守山市で起業（ヴィーガン喫茶、ヨガ教室、CITTA手帳など）
ピエリ守山	調整中	地元ショッピングモール等の企業
JA ファーマーズマーケット	調整中	地元の特産品、農産物販売等企業
滋賀県商工観光労働部 他	調整中	行政機関

(4) 配置するコーディネーターの属性や役割

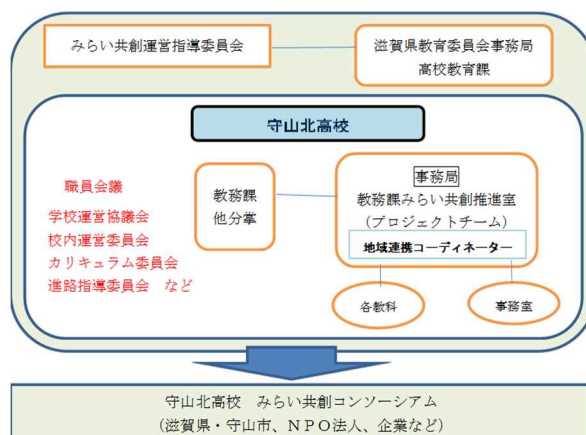
所属	氏名
インパクトラボ	上田 隼也 （代表理事）
成安造形大学 未来社会デザイン共創機構	田口 真太郎（助教）

▼当該者の主な実績

上田氏は、立命館大学生命科学部卒業後、2019 年一般社団法人インパクトラボを創業。学校法人立命館で、SDGs 推進本部イノベーション・オーガナイザーとして、社会起業家支援プラットフォーム立ち上げに参画。さらに、立命館守山中学校・高等学校にて総合的な探究の時間の授業を担当。田口氏は、滋賀県立大学大学院環境科学研究科修了後、近江八幡市の㈱まっせでタウンマネージャーとしてまちづくりに従事。文化的景観や伝建地区、無形文化財の活用を統括。2015 年からは地方創生事業で若者を対象としたまちづくり支援に取り組み、高校生や大学生の地域探究学習をサポート。

▼コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

2人のコーディネーターであわせて月8日、守山北高等学校で勤務し、教務課内に設置するみらい共創推進室に所属し、プロジェクトリーダーおよび担当教員と協働してカリキュラム開発やコンソーシアム構築にあたる。上田氏の学校法人で社会起業家支援に参画、総合的な探究の時間の授業を担当した実績から、教育や起業について、田口氏の近江八幡市の㈱まっせでタウンマネージャーとしてまちづくりに従事、地方創生事業で若者を対象としたまちづくり支援の取組で高校生や大学生の地域探究学習をサポートした実績から、行政やまちづくり視点での活動を期待している。両者の強みを生かして、高校教育、アントレプレナーシップ、地域共創という新学科の目標を達成したい。



また、コーディネーターは、県教育委員会高校教育課魅力ある高校づくり推進室や守山北高校プロジェクトリーダーと協働し、主に事業全体の企画立案やコーディネートを行う。

担当教員と連携しながら、地域や大学と連携した新学科のカリキュラム検討に関連して、地域の各種主体と連携した授業や活動等を企画・実施する。本事業にかかわる行政や民間事業者、地域組織など多様な主体との調整や事業促進を、対面や電話、オンラインでのやり取りで行う。また、実施事業を学校ウェブサイトやSNSなどを活用した情報発信を行い、学校と地域の関係構築も行う。高校と地域住民の接点を作り、高校生と地域の協働活動を仕掛けたり、住民主体の活動に伴走したりすることで、地域の変化の流れを促進する役割も担う。

令和6年度当初は、学校と地域の関係構築との事業の推進、次に本事業に関するコンソーシアム構築に向け、各主体との調整や立ち上げに関わり、運営を支援していく。

（5）学際領域学科又は地域社会学科等の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

県教育委員会では、急速な社会情勢の変化に対応し、時代の要請に応じた滋賀の高等学校教育の適正化および質の向上を図るため、外部有識者から成る滋賀県立高等学校在り方検討委員会を設置し、令和2年度から2年間にわたって議論を積み重ねてきた。そこで出された答申は、令和3年度末の県民県政コメントの反映を経て、令和4年3月「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」として策定、公表した。

令和4年8月には、各県立高等学校のスクール・ミッションを再定義し、守山北高等学校については、①地域と協働した学びに取り組むことで「人を想う心」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校、②地域と連携したキャリア教育を推進するとともに、多様なニーズに応じた教育課程を展開することで、進路希望を実現するために必要な力を育成する学校とし、生徒、保護者にも公表した。

令和4年11月には、「魅力化プラン」策定に際し、市町のまちづくり主管課、教育委員会、地域の中学校長、保護者とそれぞれの代表に出席いただき、滋賀の県立高等学校の魅力化の方向性についての意見聴取（地域別協議会）を実施した。その中の意見を受けて、令和5年3月には「魅力化プラン」を提示した。守山北高等学校については、地域や社会の将来を担う人材の育成を視野に入れ、地域を教育資源とした体験的な学びや、地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な学びに重点的に取り組む地域連携重点校として、新学科設置を視野に入れ魅力化を推進する。

守山北高等学校はコミュニティ・スクールであり、学校運営協議会の中でも、高等学校の魅力

化やスクール・ポリシーについて検討する中で、地域や学識経験者・保護者に説明し、それぞれの目線で意見をいただくことができた。

今後も管理機関においては、県教育委員会のホームページはもちろん、毎月発行する保護者向け情報誌「教育しが」や、県立高等学校の魅力や特色を知っていただくための「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行いたい。

また、守山北高等学校では令和6年度PTA総会やPTA新聞、学校通信等の機会を捉え新学科設置に向けた情報発信や、実施事業を学校ウェブサイトやSNS等を活用した情報発信を行い、守山市が高校生を対象に実施する「守山市の将来を支える若い世代の起業家教育推進事業」にも参加し、他の守山市内の高校生とも議論を重ね、その成果発表を行うことで、守山北高等学校の生徒・保護者・地域等へ新学科設置の周知に努め、高校の所在地の守山市公報にも掲載をいただくとともに、地域密着型生活情報誌「リビング滋賀」に高等学校教育改革の特集の掲載を依頼していきたい。年度末には、研究成果報告会（守山市、市内中学校・高校、コンソーシアム関係者等）を実施する予定である。

令和6年度には、全県下の中学生・保護者・地域住民を対象とした「学校説明会」を県教育委員会が主催して行うとともに、守山市を中心に、地域連携の取組、学校改革についての説明会を、地元小中学校、地元商工会議所、地元自治会を基本とした形で実施し、生徒・保護者・地域に対する説明を行う。また学校は夏季休業期間を活用して中学生や保護者に向けたオープンスクールを実施し、新たな学科の設置について魅力発信をしていく。

2-1-5 実施計画

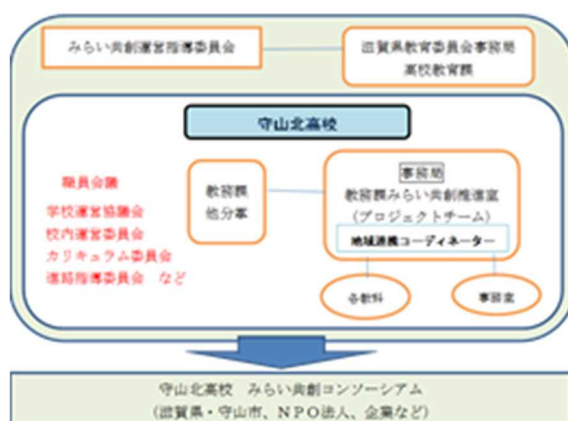
（1）3ヶ年の実施計画の概要

令和5年度の校内校務分掌において、研究事業推進の事務局として、教務課みらい共創推進室（プロジェクトチーム）を組織した。そのうえで、委嘱した運営指導委員、校長、教頭、事務長、教務主任を中心に研究にかかわる組織ならびに運営指導委員会、コンソーシアムを、右記の通り構成する。

管理機関の担当者と校長は、月1回以上は取組状況を共有しながら、諸課題の解決に向けた定期的協議を行う。また生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動を複数回見学し、成果や改善点を校長やプロジェクトリーダーなどと協議を行い、学校設定科目「みらい共創Ⅰ」「みらい共創Ⅱ」「みらい共創Ⅲ」のシラバスの充実を図る。例えば、「食・健康」をテーマに課題設定したグループでは、「学校給食と地域特産物」「食物アレルギー」「子ども食堂と現代社会」や、「ピワイチ、わた SHIGA 輝く国スポ・障スポという本県施策と地域」や「健康とは何か」という研究主題を、フィールドワークも踏まえながら、ウェルビーイングの視点をもって研究し、そこから見える地域の未来を考えたい。校内事務局では、地域連携コーディネーターと協働して、学校設定教科・科目の内容と育成したい資質・能力の関係について、運営指導委員会での評価・検討も受けながら、改善を重ねていきたい。

管理機関においては、「滋賀県立学校の校舎、課程、部および学科等の設置等に関する規則（滋賀県教育委員会規則第5号）」改正を行い、新学科設置を正式決定した。また「地域連携魅力化重点会議」「運営指導委員会」を開催し、課題の整理や他校への情報発信、連携促進に努める。

令和6年度は、新学科設置の周知活動として、県教育委員会ホームページはもちろん、毎月発行する保護者向け情報誌「教育しが」や、「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用



し、生徒・保護者・地域への情報発信を行う。また8月には高等学校が主体なり、6月には県教育委員会が主催し学校説明会を実施する。並行して、地域連携コーディネーターと協働して学校設定科目について、普通科生徒の教育課程を一部変更するなど、指導と評価を一体的に行い、教育課程について、総合的な探究の時間を含めカリキュラムマネジメントを図り、改善を図るとともに、コンソーシアム構築の充実を図る。卒業生には、「地域における課題に関わりたいと思うか」、「社会課題について、家族や友人など回りの人と積極的に議論しているか」等のアンケートを実施し、新学科1期生との比較データとしていきたい。

令和7年度入学生が1期生となる。地域連携コーディネーターと協働して練り上げた学校設定科目や総合的な探究の時間、その他各教科の教育活動等をマネジメントしながら実施し、生徒アンケートや関係者の評価を受けながらカリキュラムについてさらに改善したり、構築したコンソーシアムの充実化を図ったりしながら、指定事業終了後の体制づくりについても、守山市やコンソーシアムの関係団体等と確認を行う。高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としたい。

最終的には、コーディネーターと連携しながら、滋賀大学や立命館大学、滋賀県立大学の大学生も含めた地域の「みらい共創」のタネを育てるコンソーシアム構築を目指す。そのため、コンソーシアムの構成メンバーを再検討したり、学校運営協議会組織とも関連付けたりしながら、より実効性のある活動ができる組織としていく。

(2) 令和5年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	・学校設定教科・科目、「総合的な探究の時間」の検討 (カリキュラムアドバイザーによる指導助言) ・DX推進体制の検討 ・地域探究の基礎スキル学習	・インターンシップ(8月)実施に向けた、企業・行政・福祉施設等との連携・協力体制の構築
5月	・「みらい共創Ⅰ」「みらい共創Ⅱ」のプレ授業1の検討	・コンソーシアム構成員への事業説明と意見聴取 ・インターンシップ(8月)実施に向けた、企業・行政・福祉施設等との連携・協力体制の構築
6月	・新学科シラバスの大枠作成 (カリキュラムアドバイザーによる指導助言) ・地域課題の調査学習 ・プレ授業1の実施と振り返り (革新的な教育活動講師(4人))	・第1回運営指導委員会 (カリキュラム・コンソーシアム) ・学校説明会(県教育委員会主管)
7月	・新学科シラバスの初稿作成 (カリキュラムアドバイザーによる指導助言) ・インターンシップ準備 ・地域課題探究テーマの決定	・第1回コンソーシアム代表者会議 (カリキュラムとシラバスの共有)

8月	・学校設定教科・科目、「総合的な探究の時間」の確認（カリキュラムアドバイザーによる指導助言） ・インターンシップ実施と振り返り ・オープンスクール （中学生や保護者に新学科説明） ・プレ授業2の検討	・地域中学校との連携 （新学科説明等）
9月	・新学科シラバスについて専門家との集中検討 （カリキュラムアドバイザーによる指導助言） ・プレ授業2の実施と振り返り （革新的な教育活動講師（4人）） ・地域課題フィールドワーク実施	・外部専門家と連携した振り返り （インターンシップ）
10月	・プレ授業3の検討 ・個に応じたICT活用の研究 ・起業家精神教育事業実施 （革新的な教育活動講師（4人）） ・地域中学校の部活動調査	・第2回運営指導委員会 （モデル授業等の検証） ・第2回コンソーシアム代表者会議 （モデル授業の評価・協力依頼） ・学校運営協議会
11月	・プレ授業3の実施と振り返り （革新的な教育活動講師（4人）） ・地域中学校の部活動調査 ・地域課題解決策の検討	・地域中学校との連携 ・モデル授業・探究学習への協力
12月	・プレ授業4の検討 ・新学科シラバスの最終確定 （カリキュラムアドバイザーによる指導助言） ・個に応じたICT活用の研究 ・DX推進体制の整備	・事業中間報告会 ・探究学習への協力
1月	・プレ授業4の実施と振り返り （革新的な教育活動講師（4人）） ・個に応じたICT活用の実践研究	・モデル授業・探究学習への協力 ・第3回運営指導委員会 （事業報告会） ・地域連携重点魅力化連絡会議 （県教育委員会主管）
2月	・地域課題探究の発表会（「みらい共創」研究授業） （カリキュラムアドバイザーによる指導助言） （革新的な教育活動講師（4人）） ・個に応じたICT活用の検証	・学校運営協議会 ・第3回コンソーシアム代表者会議 （構成員からの評価・意見聴取） （課題の共有、次年度の協力依頼）

3 月	・モデル授業の検証 ・探究成果のWeb掲載 ・次年度の授業準備	・研究成果報告会 (守山市、市内中学・高校、コンソーシアム関係機関等)
--------	---	---

(3) 事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み

管理機関による「地域連携重点魅力化連絡会議」を年1回開催する。ただし令和5年度については令和6年1月23日に開催した。働き方改革の観点から、オンラインによる開催を積極的に取り入れ、安定的で計画的な会の開催に努める。その際に守山北高等学校から事業の進捗状況や成果と課題について報告を行い、他の地域連携に取り組む県内高等学校への情報提供とともに評価も行う。

守山北高等学校において、年3回（およそ6月、10月、1月）、運営指導委員会を実施していく中で、本構想において実現する成果目標の設定を行う。現時点においては就職希望者のうち県内に就職する生徒の割合を95%以上とすることや、進学志望者のうち将来県内での就職を希望する生徒の割合80%以上とすること、生徒アンケートにおいて「地域における課題に関わりたいと思う生徒の割合」を80%以上、「地元で貢献したいと思う生徒の割合」80%以上、「勉強したことを実際に応用してみたい生徒の割合」85%以上とすることなどを想定している。

また、公益財団法人日本財団「18歳意識調査第46回」や社会に対する意識（令和4年度）によると、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」とする肯定的回答は30.1%、「社会課題について、家族や友人など回りの人と積極的に議論している」は34.2%となっており、生徒の自己肯定感、社会参画に関する意識の向上は喫緊の課題であり、事業を実施することにより、いずれも60%以上とすることも想定している。

守山北高等学校は、地域連携を重点として高校の魅力化を推進し、地域で活躍する人材を育成する高校として、生徒が地域に赴き、地域の人々と協働して何かに取り組む回数や地域の方々や卒業生を学校に招く回数をあわせて年間20回を目指し、地域に開かれた学校づくりを推進する。また自治体に対する政策等の提案を年間3回、市内の高等学校による合同発表会や研究報告会等への参加回数を最終年次は6回としたい。

管理機関としては、守山北高等学校の協力を得て、卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向け、卒業時にメーリングリストを作成するとともに、SNS（FacebookやLINE）、学校のホームページなど、複数のソーシャルメディア等を介して、ニュースレター形式で、事業後の取組や学校の近況について定期的・継続的に情報を配信したい。それにより、卒業後も生徒とのつながりを維持したうえで、Google Form等を活用したオンライン・アンケート調査を4年後・7年後に実施し、進学・就職状況や、地域との関わり、地域の社会課題に対する意識の変容、高校時代の学びの有用性等を調査・研究する。

最終的には、コーディネーターと連携しながら、滋賀大学や立命館大学、滋賀県立大学の大学生も含めた地域の「みらい共創」のタネを育てるコンソーシアム構築を目指す。そのため、コンソーシアムの構成メンバーを適時再調整しながら、学校運営協議会組織とも関連付け、より実効性のある活動ができる組織としていく。

2-1-6 成果の普及のための仕組み

管理機関では、令和4年度から県予算の「県立高等学校魅力化推進事業」を実施し、地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置において、コーディネーター人材の必要性

が見えてきたところである。守山北高等学校において開催する年3回の運営指導委員会を通じた研究の深まりにより、「魅力化プラン」の中で、地域連携重点による魅力化推進を指定した普通科13校による「地域連携重点魅力化連絡会議」の中で、地域社会に関する学科の設置推進に向けた具体的な提案により、地域連携の課題研究と解決の方向性の提案、さらに他校の小学科検討推進を期待している。

また、生涯学習課が主管する「県立学校コミュニティ・スクール推進事業研修会」における事例発表を行うことにより、コミュニティ・スクールの円滑かつ効果的な導入や取組の充実が図られ、県立学校の地域連携・協働の推進につなげたい。

さらに、令和5年度から実施している「高校生による【しが】学びの祭典」は、各校で実践した探究的な学びの取組やその成果について発表し、探究的な学びを全県に普及するとともに、同世代の高校生の課題研究の発表を聴くことで、生徒の学問的探究心を養うことを目的としている。この「学びの祭典」において、アントレプレナーシップに関わる研究成果の事例発表を行い、新学科設置を県内の中学生等にアピールしていく。

あわせて、県ホームページへの掲載や、県内全ての小中学生と保護者に配布される情報誌「教育しが」で取組を紹介し、広く成果を発信するほか、守山北高等学校では、オープンスクールを年3回実施するとともに、学校のホームページに様々な活動を掲載し情報を発信する。また守山市の公報や学校独自の広報誌（学校通信）を発行するなど、地域住民や地元中学校等に向け情報発信を行っていく。

2-1-7 国の指定終了後の取組継続のための仕組み

① 管理機関

- ・国の指定終了後も、「地域連携重点魅力化連絡会議」を運用し、関係機関、特に、市町まちづくり主管課と連携を強化したうえで、事業の自走化を図り、「魅力化プラン」の推進に、構築したシステムの普及啓発を行う。

- ・指定終了後もコーディネーターの継続的雇用の必要性があることが想定され、管理機関である県教育委員会は守山市と事業指定3年間に協議を重ねる。その際、クラウドファンディングやふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得について、研究を継続し知見を共有する。

- ・県教育委員会事務局生涯学習課の令和6年度県事業「県立学校地域協働モデル事業」では、モデル的に県立学校に地域コーディネーターを配置し、学校運営協議会と連携しながら地域学校協働活動を推進し、モデル校での取組を検証・事例として活用することにより、県域への普及を目指すこととしており、この事業推進に協力していく。

- ・令和3年度から令和5年度にかけて、彦根工業高等学校においてマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を実施した。この事業で培った知的財産を継承するため、令和6年度県事業「シン・マイスター・ハイスクール～地域創生への挑戦～」において予算を確保し、彦根工業高等学校が地域の産業界や彦根市との共創により、地域を活性化させ、自律的で持続的な未来社会を創生できる産業人材を継続的に排出する持続可能な人材育成プログラムを構築することとしている。あわせて、彦根市や彦根地域の企業等から費用も含めた支援を受けながら、長期間を見据えた持続可能な人材育成システムの構築に向けて取組を進めている。同様に、本事業においても、「みらい共創科」の学びの継続・充実のための予算確保や、守山市や地域の企業等から費用も含めた支援も含め検討していく。

- ・「地域連携重点魅力化連絡会議」を継続して実施することで、「基本方針」に基づき作成した、「魅力化プラン」の事業成果の検証を行うとともに、教育委員会内の体制整備を行い、また必要な予算を獲得し、守山北高等学校が、県予算で自走していけるよう必要な支援、コンソーシアムの継続を行う。

② 守山北高等学校・守山市

・地域社会に関する学科の学びの成果や課題に係る調査・分析・検証については、外部機関と連携しながら継続して取り組み、さらなる改善・充実を図る。コーディネーターやコンソーシアム等の関係機関等と学校運営協議会の連携・協力体制を維持、強化しながら、守山市全体でも、時代の要請に応じた新たな取組の企画・開発を継続する。

2-2 事業の実施日程（事業結果説明書より）

事業項目	実施日程（令和6年4月1日～令和7年3月31日）											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
カリキュラムや教育方法等の検討・開発・実施												
新学科推進委員会	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
外部講師による講座			●	●	●		●	●	●	●		
フィールドワーク									●			
実践型インターンシップ				●	●							
社会実装プロジェクト（アントレプレナーシップ）				●	●	●	●	●	●			
関係機関との連携協力体制の構築・維持												
運営指導委員会				●				●				●
運営協議会			●				●				●	
コンソーシアム会議								●		●		●
先進校視察									●	●		
関係機関へのヒアリング			●	●	●				●			
コーディネーター												
コーディネーター（上田氏）	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
コーディネーター（田口氏）	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
新学科設置に向けた説明会等の実施												
オープンスクールの実施					●	●						
地域中学校への訪問			●				●					
新学科説明会			●									
成果発表・成果普及												
地域連携重点魅力化連絡会議												
公開授業			●					●				●
研究成果報告会							●					●
成果検証												
ルーブリックに係る 生徒アンケート	●									●		●
体験入学の際の 中学生・保護者アンケート					●	●						
中学校等卒業予定者の進路志望調査 （県教委）						●				●		

2-3 事業の実施概要

(1) カリキュラムの検討内容

みらい共創科の構想

本校では、普通科改革の一環として、令和7年度から新学科「みらい共創科」（地域社会学科）が1クラス設置される。“地域を教室に、自分のやりたい！を見つける、試す、深める”をコンセプトに、様々なつながりから自己形成を図れる学科を目指し、昨年度から今年度にかけて様々な取り組みを行ってきた。

本校は、公共交通機関の利便性の悪い立地にあり、また、学びの特色や魅力が感じられにくい普通科高校として、近年定員割れが続く一方で、近隣の中学校から自転車で通学する生徒が全体の9割を占めるなど、いわゆる“地域の子どもたち”が通う学校である。自然、歴史、文化、スポーツ、観光、産業等の教育にかかわる資源や地域と協働した学びが実践しやすい教育環境が整っており、加えて、生徒の卒業後の進路先も、四年制大学や短期大学への進学だけでなく、専門学校や就職、公務員など多様な進路先を保障している実績があり、また守山市を中心に各方面で卒業生が活躍している。

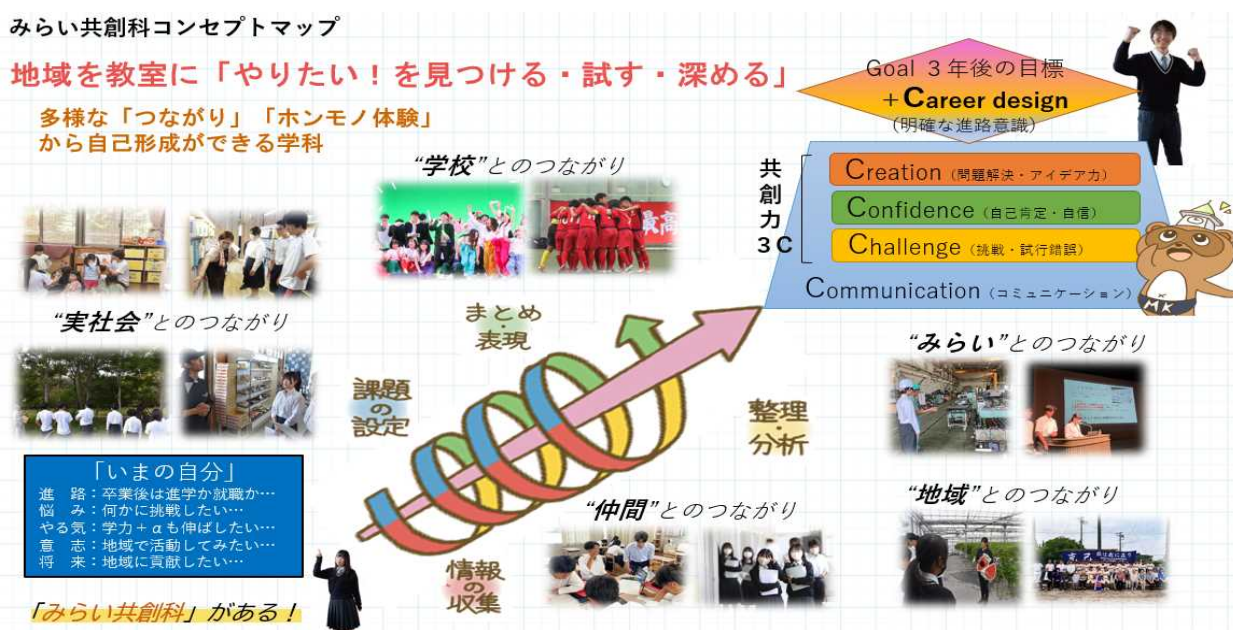
こうした本校を取り巻く現状を踏まえ、今回新設される「みらい共創科」は、地域・社会・学校・仲間等との様々な接点（つながり）をより多く持ちながら、自分自身の“みらい”、キャリア意識をより高めていける学科として設置する。

▽コンセプトマップ

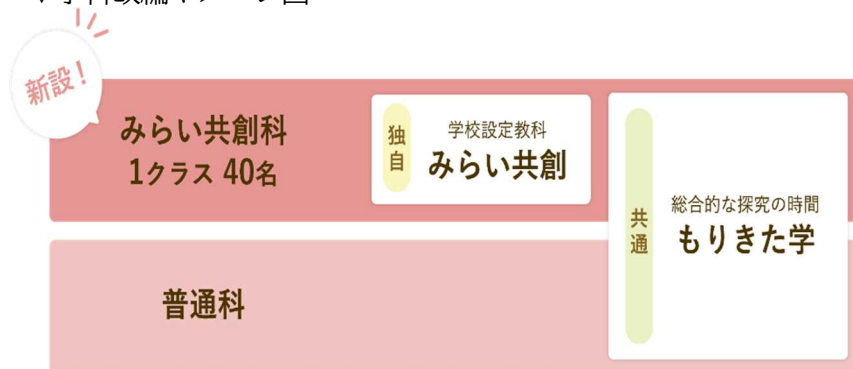
みらい共創科コンセプトマップ

地域を教室に「やりたい！を見つける・試す・深める」

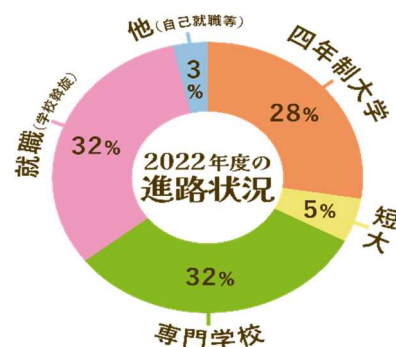
多様な「つながり」「ホンモノ体験」
から自己形成ができる学科



▽学科改編イメージ図



▽進路先イメージ図



▽守山北高等学校スクールミッション

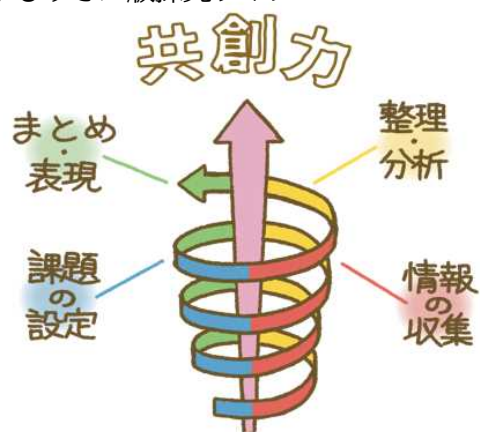
スクールミッション

守山北高校で育成する力

- 生徒の自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等の **生きる力**を育成する学校
- 地域と協働した学びに取り組むことで「**人を想う心**」を養い、地域の未来を担う人材を育成する学校
- 多様なニーズに応じた教育課程を展開することで**進路希望を実現するために必要な力**を養成する学校

#生きる力 #人を想う心 #進路実現に必要な力 — **共創力**

▽もりきた版探究サイクル



- **もりきた版「探究サイクル」**
この4つのプロセスを3年間で何度も繰り返すことで共創力を培う。新しい学びへの挑戦や試行錯誤を楽しめるプログラム！

<説明>

・アクションリサーチの導入（探究学習の手法）。PDCAサイクルだけではなく、フィールドワークや観察などの現場実習から各プログラムをスタートする、「もりきた版探究学習」。まずは現場でのActionから自分たちの学びへ、さらにこれらの学びを1人ではなくチームでやることで“共創”に結びつける。

今年度の成果

1.シラバスの完成

1ー(i)「みらい共創」(学校設定教科)

■学校設定科目「みらい共創Ⅰ」(1年:2単位)

【テーマ】“「共創」の基礎理解と技術習得”

【教科目標】

- ・多様な人たちとの共創に必要な探究スキルの習得
(地域課題の発見・設定方法、円滑なグループワークを行う協働力、それらを表現するプレゼンテーション力)
- ・地域の課題に取り組むアントレプレナーシップ(起業家精神教育)の基礎理解と実践
- ・探究学習を通じて、ウェルビーイングの基礎理解と実践

【学習内容】

- ・「探究基礎」
 - 探究に関する講演会や導入授業を実施し、ブレインストーミングなどのグループワーク(発表や振り返り含む)を繰り返し、探究的な学びを進めていく上での基礎的な知識やスキルを習得し、「共創」に関する基礎理解を深める。
- ・「探究表現」
 - 視覚的な思考方法(ビジュアルシンキング)であるグラフィックレコーディングの基礎スキルを習得し、グループワークやプレゼンテーションの質を向上させる。
- ・「企画提案型アントレプレナーシップ演習」
 - 外部講師による特別講義と現地研修(フィールドワーク)から探究する地域課題の設定を行い、予備調査を経てコンペ大会(仮説の提案)を実施する。その後グループに分かれて仮説の実証を行い、最後に振り返りを行う。
- ・「みらいフォーラム」
 - 学科内で学年を縦断した成果報告会を実施する
- ・「みらいノートの作成」
 - グループでの振り返り、自己評価、他者評価、個人レポートの作成、アンケートの実施等を行った後、2年次コース選択(仮称 エキスパートコース・アントレコース)や次年度のプロジェクト計画案の作成を行う。

■学校設定科目「みらい共創Ⅱ」(2年:3単位)

【テーマ】“「共創」の実践 -地域連携プロジェクト-”

【教科目標】

- ・地元企業や行政機関等と協働したインターンシップやマイプロジェクトの計画実施
- ・共創実践のための探究スキルの実践
- ・現場での課題発見と解決策(マイプロジェクト)の提案
- ・現場で学んだことを言語化するスキル

【学習内容】*生徒の希望進路に応じて、コース分けを行う。

<仮称 アントレコース>(進学希望者)

- ・「地域探究」
 - 自己分析マップから自身の興味関心・希望進路の深堀を行った後、地域資源マップを作成し地域リソースを発掘する。フィールドワーク等で、探究で深める課題の設定を行い、コンセプトマップで現状や課題・理想の姿・解決策を整理する。最後に自信のプロジェクトの企画立案を行う。

- ・「アントレ活動」
 - “守北版デュアルシステム”として各探究プロジェクトに応じて、事前研修からアントレ活動、振り返りセッションまでを行う。夏季休業中に現場でのアントレ活動（2～3日間程度）を実施する。

<仮称 エキスパートコース>（就職希望者）

- ・「業界研究」
 - 連携企業による特別授業等も取り入れながら、それぞれの業界に関する情報を収集（ウェブや文献）し、課題設定を行う。その際、業界が抱える課題や社会課題の基礎理解も並行して行う。各業界へのリモート取材やフィールドワーク（現地見学）から、コンセプトマップで、現状や課題・理想の姿・解決策の整理を行う。最後にプロジェクトの企画立案を行う。
- ・「実践型インターンシップ」
 - “守北版デュアルシステム”として企業・教育・福祉・行政の4分野から希望制で班分けをし、事前研修からインターン実習、振り返りセッションまでを行う。夏季休業中に現場でのインターンシップ（2～3日間程度）を実施する。

<コース共通>

- ・「マイプロジェクト」
 - マイプロジェクト企画書として現場での魅力、課題発見とその解決のための道筋を示す。外部アドバイザーによる助言や実習先へのフィールドワークやリモート取材を行いながら、企画書のブラッシュアップを行い、マイプロジェクトの実践に取り組む。
- ・「みらいフォーラム」
 - 学科内で学年を縦断した成果報告会を実施する
- ・「みらいノートの作成」
 - グループでの振り返り、自己評価、他者評価、個人レポートの作成、アンケート等の実施を行った後、次年度のプロジェクト計画案の作成を行う。

■学校設定科目「みらい共創Ⅲ」（3年：2単位）

【テーマ】 “「共創」の発信・還元 -社会実装プロジェクトの実施-”

【教科目標】

- ・地域の事業者や行政と協働したプロジェクトの実施
- ・プロジェクトの成果を地域や社会に還元する活動
- ・地域での学びを学校に還元する
- ・後輩たちのメンターとなる活動（アドバイザー・発表審査員など）

【学習内容】＊個人・グループによって活動が異なる

- ・「社会実装プロジェクト」
 - ○「社会実装プロジェクト」の進行
 - Ⅰ 2年次からのマイプロジェクトの継続・学外コンテストへの参加
 - Ⅱ 総合型選抜にも対応できる成果物作成、中学校説明会に向けた成果物作成
 - Ⅲ 地域のタウンミーティングへの参加・企画提案
 - Ⅳ 1・2年へのアドバイザー
 - ○ポートフォリオ・みらいノート整理
（2年間の学びを成果物としてまとめる。レポート・スライド）

- ・「みらい共創 プロジェクト成果発表会」
 - 守山市役所と連携し、成果発表会を行う。守山市役所の多目的ホールにて、優秀者は口頭発表、パネル展示等も行い、これまでの学びを地域に還元していく。
- ・「スクールデザイン “学校魅力化プロジェクト”」
 - 「学校魅力化プロジェクト」の企画進行
 - I 文化祭での地域協働企画
 - II 地域のタウンミーティングへの参加・企画提案
 - III もりやまいちへの参加・企画運営
 - IV 地域、学校の紹介動画の作成
 - V 学外コンテストへの参加
 - VI 学校内設備のデザイン等（例）生徒ホールや中庭の利活用
 - VII 1・2年へのアドバイザー

1－(ii)「もりきた学」（総合的な探究の時間）

■「もりきた学Ⅰ」（1年：1単位）

【テーマ】”人に会う”「探究」の基礎習得

【教科目標】

- ・「人を想う心」の基礎理解と実践
- ・基礎的なソーシャルスキルの習得
 - （対人関係を円滑にするコミュニケーションスキル、社会人マナー、デジタルスキル）
- ・SDGs や MLGs などの社会課題についての理解と文献調査のスキル習得
- ・地域理解のためのグループワークの基礎と実践

【学習内容】

- ・「人を想う心」
 - 本校スローガンの歴史、背景などを交えた校長講話の後、「人を想う心」とはなにか、自分たちの推しワードについてグループワークで考えを深める。
- ・「コ・クリエーション（共創）」
 - アイスブレイクを中心に、演劇やダンス等も活用しながら基礎的なコミュニケーションスキルの習得を行う。
 - I 集団理解（サバイバルクエスチョン、三角に集まれ）
 - II 協働実践（ペーパータワー、アンケート）
- ・「文献調査」
 - 夏季休業中の課題として、自身の「推しの1冊」を選定し、2学期に報告会を実施する。その後、アクティブブックダイアログによるグループワークで、要約の仕方や記事のまとめ方について学びを深める。
- ・「住人叶色」
 - はじめに探究に関する講演会から探究学習を進めていくうえでのヒントを得る。その後、希望制で班分けを行い、守山市の北部エリアを中心に活躍されている方へのフィールドワークを行い、学びの成果をクラスで発表する。
- ・「もりきたフォーラム」
 - 学年発表会を実施し、全体共有をはかる。
- ・「ポートフォリオの作成」
 - 自己評価、個人レポートの作成、アンケート等の実施を行い、1年間の振り返りを行う。

■「もりきた学Ⅱ」（2年：1単位）

【テーマ】”道（分野）に会う”探究活動の実施

【教科目標】

- ・自己分析を通じて、自身の適性や興味関心を深堀する
- ・地域探究を題材に、探究学習のスキルを実践する
- ・学びをキャリアデザインと関連させて、自身の進路意識について再考する

【学習内容】

- ・「自己分析」

→ 学部学科／業種研究として、自己理解や興味関心の適性を深堀した後、もりきたセミナーを実施する。ゲスト講師との対話、インタビューから振り返りのワークショップを行い、自身の進路先についてのイメージをもつ。

- ・「地域探究 “もりきた×〇〇”」

→ カテゴリー別に、探究を進めるテーマの設定をし、5W1H法等で問いの深堀を行う。予備調査や中間報告会を実施した後、企画書作成やアポとりなど実施準備を進め、フィールドワーク（現地調査）を行う。最後にクラス発表会を行う。

- ・「もりきたフォーラム」

→ 学年発表会を実施し、全体共有をはかる。

- ・「ポートフォリオの作成」

→ 自己評価、個人レポートの作成、アンケート等の実施を行い、1年間の振り返りを行う。

■「もりきた学Ⅲ」（3年：1単位）

【テーマ】”己に会う”独自研究プロジェクト

【教科目標】

- ・志望理由書、自己PR文の作成を通じて、学びの言語化（まとめ）
- ・研究集録（卒業レポート）の作成を通じて、言語能力の向上
- ・発表を通じて、後輩の手本となる

【学習内容】

- ・「自己探求」

→ I 志望理由書／自己PR文編

（これまでの学びをまとめ言語化）

→ II 卒業レポート編

自己探求テーマの設定と先行研究を行う。問いの深堀（5W1H法）だけでなく、適宜、個別面談を実施しながら問いの再検討を実施する。予備調査（情報収集）とシナリオづくり（章立て）を経て、レポート作成に取り組む。最後にはクラスの研究集録を作成する。

- ・「ポートフォリオの作成」

→ 自己評価、個人レポートの作成、アンケート等の実施を行い、1年間の振り返りを行う。

2.カリキュラム検討のための先行授業の実施

2ー（i）「みらい共創」（学校設定教科）

	時期	取り組み内容	参加生徒	協力機関
I	R6.7/3	「「共創」の基礎理解」 「無印良品 特別コラボ授業」	130名 (2年生)	喜多見 智子氏 (株式会社 良品計画 空間設計部 大阪事務所) 新井 亨氏 (株式会社 良品計画 空間設計部 資材調達・開発課)
II	R6.7/2 (第1回 交流会)	「企画提案型アントレ プレナーシップ演習」 「北部図書館との連携」	6名	佐藤志歩氏 (守山市立北部図書館司書)
	R6.7/16 (第2回 交流会)		4名	守山市立北部図書館
III	R6.7/11 ・7/23	「実践型インターンシ ップ」 (i)[はすねだこども 園](教育群)	3名 (2年生)	社会福祉法人あけぼの会 はすねだこども園
	R6.7/8 ・7/25	(ii)[ゆいの里 グルー プホームゆい](福祉群)	1名 (2年生)	社会福祉法人慈恵会ゆいの里 グループホームゆい
	R6.8/17	(iii)[滋賀県立大学] (教育群)	2名 (2年生)	滋賀県立大学
IV	R6.7/27	「社会実装プロジェク ト」 (i)「守山市民ホール リニューアルに向けた ワークショップ」	7名 (吹奏楽部 生徒)	守山市民ホール
	R6.8/10	(ii)「アントレクエス ト-次世代の起業家教育 共創プロジェクト-」	4名 (生徒会執行 部)	守山市
	R6.12/22	(iii)「「もりやまいち」 への参画」	5名 (1年生生徒会 執行部)	守山市
V	R6. 5月～ 3月	「マイプロジェクト」 「笠原しょうがで SDGs」	生徒会執行部	津田氏(ショウガ農家) 長浜バイオ大学 福井充氏(高大連携担当) 河合靖教授(生物有機化学専門)

2－(ii)「もりきた学」(総合的な探究の時間)

	時期	取り組み内容	参加生徒	協力機関
I	R6.4/17 ・5/1	「人を想う心」	124名 (1年生)	
II	R6.6/19	「コ・クリエーション」 (i)ロールプレイング 型講演会	124名 (1年生)	蓮行氏 (京都大学特定准教授/劇団衛星)
	R6.5/8 ・5/22 ・5/29	(ii)「コミュニケーション基礎」	124名 (1年生)	
III	R6.4/24 ・5/1 ・5/8	「アクティブブックダイアログ」(文献調査)	130名 (2年生)	
IV	R6.12/12 ・12/13 ・12/19	「もりきた学」 フィールドワーク 「住人叶色」	1年生	平塚英史氏 (びわこ地球市民の森) 川井玲央人氏(よってこファーム) 廣田岳尚氏 (社会福祉法人ゆいの里) 藤井康憲氏(佐川美術館) 南平喜代和氏(キヨシ商会) 松谷悦男氏(鉄人工房マツヤ) 武田みゆき氏 (守山市環境コミュニケーター) 井入吉信氏(井入農園) 出口湧己氏(Vita) 川田久美子氏(はすねだこども園) 中川知美氏(BIWAKO DAUGHTERS) 廣瀬香織氏 (ビワコパールサプライズ)
V	R6.2月 ・3月	成果発表会「もりきた フォーラム」	1年生 2年生	
VI	R6.7/3	「地域探究」 (i)「探究する力」講演会	124名 (1年生)	吉田大作准教授 (京都芸術大学クロステックデザインコース)
	R6.6/19	(ii)SDGsセミナー	130名 (2年生)	西田智美氏 (キャリアコンサルタント/守山市在住) 田口 真太郎氏 (成安造形大学 講師/守山北高等学校 コーディネーター)

	時期	取り組み内容	参加生徒	協力機関
VI 続き	R6.6/19	(ii)SDGs セミナー	130 名 (2 年生)	廣瀬 香織 氏 (ビワコパールサプライズ 代表理事) 杉本 悠太 氏 (守山市企業連携室 係長/守山北高等学校 キャリア教育推進委員) 麻生 知宏 氏 (NPO 法人 Since 理事長) 田中 洋一 氏 (NPO 法人クラブアトラクション 理事長) 北井 香 氏 (NPO 法人まちづくりスポット大津 マネージャー) 中井 健太 氏 (合同会社 andstep 代表/守山北高等学校 カリキュラムアドバイザー) 堂ヶ崎 篤 氏 (ロゴスピエリ守山店 店長) 佐藤 大知 氏 (フォトグラファー/みらい共創科動画制作)
VII	R6.7/18	「もりきた未来シンポジウム」(もりきた学 特別編)	全校生徒 保護者(希望者)、地域の方々	世津田スン氏(ゲストスピーカー) 杉本聡氏(パネラー:本校 0B、守山市役所職員) 伴野友彦氏(パネラー:本校 0B 守山市内で起業) 北脇すみよ氏(パネラー:本校 PTA 会長) 生徒代表(パネラー:生徒会長) 田口真太郎氏(モデレーター:成安造形大学 講師)

3.学校全体での取り組み

3ー（i）「キャリアデザイン」（進路行事とのリンク）

新学科推進に向けた取組やもりきた学（総合的な探究の時間）の取組が、単発で一時的なものにならないよう、生徒のキャリアに関わる進路行事や普通教科での学びとリンクするよう、キャリアデザインのイメージ図を策定し、教職員全体で共有を行っている。

▽キャリアデザインイメージ図

学年	1年	2年	3年
	キャリア導入期 多くの選択肢から自己目標をデザイン		
学期	1Q	2Q	3Q
	キャリア考察期 自己目標実現に向けた学びの実践		
	1Q	2Q	3Q
	キャリア展望期 学びをまとめキャリア形成へ		
	1Q	2Q	3Q

“もりきた学” (総合的な探究の時間)	1 学年テーマ “人に会う” ～基礎的なソーシャルスキルの獲得～			2 学年テーマ “道に会う” ～探究学習の実践と進路意識の醸成～			3 学年テーマ “己に会う” ～独自研究プロジェクトによる学びのまとめ～		
	・人を想う心 ・コミュニケーション基礎 「コ・クリエーション」	・文献調査 ・地域探究 「住人叶色」	・成果発表会 「もりきたフォーラム」	・自己分析 ・学部学科／業種研究	・地域探究 「探究実践編」	・成果発表会 「もりきたフォーラム」	・自己探求 「志望理由書／自己PR文」	・自己探求 「卒業レポート」	・自己探求 「研究集録完成」

“みらい共創” (新学科学校設定教科)	“「共創」の基礎理解と技術習得” ～多様な人との共創に必要な探究スキルの習得～			“「共創」の実践 一地域連携プロジェクト” ～地域と協働したインターンやマイプロジェクト～			“「共創」の発信・還元 一社会実装プロジェクト” ～学びの成果を地域や社会に還元する活動～		
	・探究基礎 「ブレインストーミング」 ・探究表現 「グラフィックレコーディング」	・企画提案型 アントレプレナー演習 「地域課題テキスト」	・コンペ大会 ・プロジェクト実施	＜アントレ＞ ・地域探究	・アントレ活動 (フィールドワーク・ボランティア)	・マイプロジェクトⅠ	・社会実装プロジェクト 「学びの言語化」 「地域への発信」	・学校デザイン 「学校魅力化プロジェクト」	・成果報告会 ・後輩のアドバイザー

キャリアデザイン プログラム (進路関係行事)	・キャリアデザインⅠ 「文理選択ガイダンス」 「進路学習」	・キャリアデザインⅡ 「職業講演会」 「進学補習開始」	・キャリアデザインⅢ 「模擬講義」	・キャリアデザインⅣ 「もりきた学と連動（学部学科／業種研究）」	・キャリアデザインⅤ 「ようこそ先輩」	・キャリアデザインⅥ 「進路別説明会」 ＊保護者含む	・進路別ガイダンス (進学補習、看護対策講座、職場見学、面接指導、公務員勉強会など)	進路実現
-------------------------------	-------------------------------------	-----------------------------------	----------------------	-------------------------------------	------------------------	----------------------------------	---	------

3ー（ii）「普通教科での地域協働実践」

(1) 理科

I 「生物特別実習」

授業名：生物（3年選択科目）

対 象：3年5組 理系（9名）

日 時：2024年10月30日（水）3限（11：00～）

連携先：ととや平蔵（守山市荒見町 201-6）

授業者：村上晴子（守山北高等学校）

担当者：平島昭人氏

授業目的

3年生「生物」の授業の一環として、今回の活動を通して「食物連鎖」「生物の進化の過程」「魚から内臓を取り出す科学的根拠」「魚の栄養分と健康」の4つの生物学視点で学習する。また、今後の自己のキャリアデザインを考え、行動する力を身につける。

授業内容

講義：なぜ魚屋さんになったのか、平島さんのキャリアについて

お店に売り出す魚選びと仕入れ先、魚の部位とその特徴について

実演：魚の解体（サワラ）



▲授業の様子

Ⅱ「企業とのコラボ授業」

授業名：生物（３年選択科目）、科学と人間生活（３年選択科目）

日 時：2025 年 1 月 16 日（木）1・2 限

連携先：（株）旭化成 守山製造所

授業者：村上晴子（守山北高等学校）

テーマ：分離膜についての出前授業

○概要

地元守山市に立地する同社守山製造所で製造されている「分離膜」をテーマとして、分離技術の概要、分離膜の特徴、同社製品である中空糸膜による物質除去の原理と用途について学んだ。その後、中空糸膜を用いたろ過実験に取り組んだ。ろ過実験では、まずコーヒーフィルターおよび中空糸膜をそれぞれ使用して墨汁をろ過する様子を演示していただいた。墨汁をコーヒーフィルターでろ過した場合には、フィルターを通す前とほとんど変化がなかったが、中空糸膜でろ過した場合は無色透明になり驚きの声が上がリ、中空糸膜の孔径の小ささを実感することができた。次に、オロナミン C とドデカミンを中空糸膜でろ過した。似たものどうし、同様の結果になると予想したものの予想とは異なる結果になり、なぜ異なる結果になったのかを考察した。「ろ過した溶液をもう一度ろ過してみたらどうなるのだろう」と生徒から疑問も出て、追加実験を行うなど、生徒自身が主体的に取り組む姿も見られた。

地元企業が製造している製品を題材とすることで、生徒自身が身近に感じることができ、科学に関する知識の向上および生徒の探究する能力と主体的に取り組む力を身につけることが期待される。

最後に、同社に就職し今年度より働いている本校の卒業生よりメッセージをいただいた。特に人とのつながりの大切さについて話していただき、これから進学する生徒、就職する生徒も心に刻み込んだことと思う。



▲授業の様子

（２）地歴公民科：「史跡の魅力化アイデア」

授業名：社会研究（３年選択科目）

対 象：３年５組 文系（16 名）

連携先：守山市下之郷史跡公園（守山市下之郷 1 丁目 12 番 8 号）

授業者：高田法悟（守山北高等学校）

担当者：川畑和弘氏（守山市教育委員会事務局 文化財保護課 主査）

○概要

滋賀県守山市にある弥生時代中期（約 2200 年前）の環濠集落。南北約 470m、東西約 600m は滋賀県内の環濠集落としては最も大きい。三上山（野洲市）を頂点として広がる野洲川下流域平野のほぼ中央部に位置している。この立地は扇状地の末端部分にあたるため、豊富な地下水に恵ま

れ、生活を営む上で大変適した場所であった。その地下の伏流水により、発掘される土器等の保存状態がたいへん良好であることも大きな特徴である。現在、第一次整備期にあたり、環濠部分の整備が終わり、集落域の整備への移行期とされている。

下之郷史跡保存の意義としては、史跡の保存状態の良さを生かした弥生時代の生活や文化体験（発掘作業も含めた）への市民参画により、伝統文化への理解の深化を図るとともに、伝統文化継承という持続可能なまちづくりの観点からも非常に大きな意義がある。

<課題（市の思い）>

- ・史跡を学校教育とどう結び付けられるか
- ・市民団体メンバーの高齢化が進み、幅広い世代の参画により持続可能な事業にしたい

○コラボ授業について

テーマ：「市民参画のための体験授業のアイデアを考えよう」

目的：時代のストーリーを実体験から学ぶ

市民への理解の輪を広げる（高校生に期待されること）

まちづくりへの参加体験から生徒の自己肯定感や地元愛を醸成する



▲授業の様子

（3）芸術科

美術Ⅰ（1年生）

Ⅰ「文化財を知り、考える」

目的 伝統文化の現状と現代における活用を通して社会におけるアートの役割を考える。

展開 1 講義『スティーブ・ジョブズと信楽の古壺』 ※教員による導入授業

2 講義『ポケモンと工芸の化学反応』講師 佐川美術館学芸員 藤井康憲さん

3 現地見学『蜷江（つぶえ）神社』講師 琵琶湖文化館学芸員 和澄浩介さん
ご案内（神社総代）津田増夫さん

4 講義『彦根城と世界遺産登録』講師 滋賀県文化財保護課

5 講義『信楽発の最先端技術 ～セラミックがつなぐ人と世界の文化財～』

講師 大塚オーミ陶業株式会社 製造本部 信楽工場 野口歩実さん

6 表現『モリキタヌキ』をデザインする（蜷江神社が祀るタニシと本校キャラクター）

7 考察『文化財を保存、活用する方法について考える』文章化、共有



▲授業の様子

Ⅱ「対話型鑑賞」

目的 モノの見方や考え方とコミュニケーション力を育成するために、アート作品を用いた対話型鑑賞活動を行い、人や社会にとってのアートの役割を考える。

展開 講義およびワークショップ

『対話型鑑賞みる・考える・話す・聴く…アート・コミュニケーションを体験』

講師 京都芸術大学アートプロデュース学科 伊達隆洋さん

Ⅲ「人と森とアートについて考える」

目的 人や社会にとってのアートの役割を考えるために、「人と森とアート」の関りをテーマとした創作活動を行い、新たなことを学び考えることを通した自己の変容に生徒自身が気付く。

展開 1 現地活動（1）びわこ地球市民の森における講義と散策

講師 びわこ地球市民の森所長 平塚英史さん

2 制作物構想 現地に設置する立体作品のテーマとデザインを検討

3 現地活動（2）材料の収集、作品制作活動

4 現地活動（3）材料の収集、作品制作活動

5 現地活動（4）作品完成、設置

6 考察 活動の振り返り、「自然と人とアート」文章化、共有 ※現地移動自転車



▲授業の様子

美術Ⅱ（2年生）

Ⅰ「アール・ブリュットを知り、考える」

目的 多様なアートとそこに携わる人の存在を知り、人や社会にとってのアートの役割を考える。

展開 1 講義『アール・ブリュットと障害のある人のアートについて』

※教員による導入授業、講義および映像視聴

2 講義『障害とアートが交差するところ』

講師 滋賀県立美術館 学芸員 山田創さん

3 講義『全ては幸せを感じるために～やまなみ物語～』

講師 やまなみ工房 施設長 山下完治さん

4 考察 活動を通して考えることを文章化、共有



▲授業の様子

II「野洲川とヨシを知り、考える」

目的 人や社会にとってのアートの役割を考えるため、「自然と人とアート」の関りをテーマとした

学習、体験および作品制作活動を行う。

展開 1 講義 『びわ湖とヨシ、環境保全について』

講師 守山市環境政策課 環境コミュニケーター 武田みゆき さん

国土交通省近畿地方整備局 琵琶湖河川事務所流水治水課 伊保朋弥 さん

2 ヨシ刈り 場所：野洲川河口部右岸

講師 守山市環境政策課 環境コミュニケーター 武田みゆき さん

琵琶湖河川事務所 流水治水課 伊保朋弥さん

※琵琶湖河川事務所様でマイクロバスを準備

一般の方の参加の場合あり（淡海を守る釣り人の会、一般公募）

3 4 立体品制作 場所：もりやまエコパーク交流拠点施設

刈り取ったヨシを粉碎し、型枠と樹脂で固める（M O R I K I T A の8文字）

※事前活動として本校で型枠を製作する

5 完成作品を展示（校内・校外）

美術III（3年生）

I「いちごが紡ぐコミュニケーション～絵本のデザイン～」

目的 いちごの栽培やそこに関わる人を取材し表現活動を行うことで、アートとデザインの役割や展開を考える。

展開 1 取材活動 河西いちご園を訪問し、オーナーや栽培担当、パティシエさんたちに取材し、施設見学を行う。

2 デザイン 取材内容から、制作する絵本のテーマや展開、絵柄、文章を考える（5人程度の班による共同制作活動）

3 制作 絵本の各ページの制作

4 完成 絵本を実店舗に展示（見た人から感想を頂くQRコードを添える）



▲授業の様子

II「ヨシの可能性を考える」

目的 ヨシの活用について考えるために、ヨシから抽出し試行的に作られた染料を用いて、身近なものを染める体験を行う。

展開 1 講義『染物とヨシについて』 講師 染色作家 迫沼寛さん

2 染色体験

3 鑑賞会



▲授業の様子



4.教育課程表の完成（令和7年度入学生）

令和7年度入学生用の教育課程表を策定した。4月から5月にかけて、3回のカリキュラム検討委員会（各教科主任、教務主任）を開催し、各教科からでてきた意見をすり合わせながら、教育課程を議論し、完成に至った。

▽教育課程表（R7入学生）

R7年度 教育課程

みらい共創カリキュラム案(新学科1クラス)

1年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30			
全員	現代の国語		書画文化		歴史総合			数学Ⅰ			数学A		化学基礎		体育		保健		英語コミュニケーションⅠ			家庭基礎		情報Ⅰ		みらい共創Ⅰ		総探		LHR			
2年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31		
文科型	論理国語		文学国語		古典探究		公共		日本史探究			数学Ⅱ			生物基礎		体育		保健		英語コミュニケーションⅡ			論理・表現Ⅰ		芸術Ⅰ		みらい共創ⅡA		みらい共創ⅡB		総探	LHR
理科型					数学B				化学						生物基礎 物理基礎																		
3年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30			
文科型	論理国語		文学国語		古典探究		日本史探究			政治・経済		芸術Ⅱ		地理総合	地学基礎	英語研究		体育	英語コミュニケーションⅢ			論理・表現Ⅱ		みらい共創Ⅲ		総探		LHR					
数学C			数学研究		生物			化学		数学演習																							
看護系 理系							数学Ⅲ			物理																							

普通科カリキュラム

1年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
全員	現代の国語	書画文化	地理総合		数学Ⅰ					数学A	化学基礎		体育	保健	芸術Ⅰ		英語コミュニケーションⅠ		家庭総合	情報Ⅰ	総探	LHR								
2年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
文科型	論理国語	文学国語	古典探究		公共	歴史総合				芸術Ⅱ		化学	数学Ⅱ		生物基礎	物理基礎	生物基礎	体育	保健	英語コミュニケーションⅡ		論理・表現Ⅰ	家庭総合	総探	LHR					
理科型			数学B																											
3年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
文科型	論理国語	文学国語	古典探究	日本史探究	選択①	芸術Ⅲ／社会研究				政治・経済	地学基礎	選択②		体育	英語コミュニケーションⅢ		論理・表現Ⅱ	総探	LHR											
看護系		数学C	数学Ⅲ	生物																										
理系																														

選択①②(それぞれ科目選択)																														
進路希望	英語研究	数学研究	英語研究	数学Ⅲ	健康講座	芸術講座																								
専門知識	基礎知識	応用知識	応用知識	応用知識	応用知識	応用知識																								

今年度の課題と次年度の計画への反映方針

1.カリキュラム検討のための校内体制

今年度の4月から教育課程表の策定を行うにあたり、本校のカリキュラム検討委員会は、各教科主任が集まる会議であった。そのため、各教科の視点から意見が出てしまい、学校全体の方向性やビジョンが共有されないまま、協議が進んでしまったように感じている。例えば、普通科と新学科とで同じ科目の単位数が異なることに対する不平不満等である。各教科の意見のすり合わせからカリキュラムを作成するのは無理があるため、各教科の利害をこえた組織体制の整備が必要である。

2.指導と評価の一体化

2—（i）学校独自のルーブリック作成

カリキュラム内容を決めていくにあたり、同時に評価をどうしていくのかに関する課題があった。そのため、生徒の振り返り用だけでなく、授業内容と生徒の成長・変化が図れる指標となる独自のルーブリックを策定した。ルーブリックの項目については、本校のスクールミッションの3つの柱である、「生きる力」「人を想う心」「キャリアデザイン」に照らし合わせたものとした。実際に今年度の4月に実施したが、今後も本校の生徒の現状を分析するとともに、カリキュラムの再構築にも活用していきたいと考えている。

▽学校独自のルーブリック

【もりきたで育てたい”つながる力”（共創力）・人物像・現状分析】滋賀県立守山北高等学校 みらい共創科・普通科

学年	つなぐ力（共創力）	表現・能力・態度	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
生きる力	A 表現力・発信力	●自分の考えや気持ちを表現し、他人の人に伝えたり、廣くに発信したりすることが出来る	意図に達しない	意図する	標準レベルのプレゼン	能力的な表現	聞き手への配慮
	B 思考力	●物事をじっくりと論理的に考え、問題や課題を様々な角度から捉えることができる	単純な解答	分析・考察不足	標準レベルの分析・考察	論理的で多面的な考察	柔軟な思考力
	C 創造力	●何事にも好奇心を持って新しいことを考えたり、ユニークなアイデアを生み出したり、社会・みらいに新たな価値を生み出すことができる	同じ方法	不十分なアイデア	標準的な創造力	独自のアプローチ	社会への影響
人を想う心	D 自己肯定感	●自分自身の考えや行動を大事にしつつ、自分のことを客観的に認識し、自分の強みや得意なところを認めることができる	自分のことまでわかっていない	自分のことをよく理解していないため、自分の思いや得意なところを伝えられない	自分の強みや得意なところを伝えられる	適切な自己評価	自己理解と成長
	E 共感力	●人と違う考えや好みを持つ人々を理解し、他者を受け入れることができる	相手の考えや気持ちを理解することが苦手な	他者の考えや気持ちを理解することが苦手な	他者の考えや気持ちを理解することが出来る	良好な人間関係	適切な自己評価
	F 協働力	●グループ活動で、他者メンバーと力を合わせ、その本質や目的を達成することができる	自分のやりかたばかりで進める	他者の人となりに合わせる意識が低い	自分の役割を担うことができる	チームの役割や貢献を認識する	チームの目標や貢献を認識する
キャリアデザイン	G 社会への関心	●世の中や起きている社会問題や変化に興味を持ち、その本質や目的を達成することができる	関心がない	具体的な行動がない	基礎的な知識	フィールドワーク	社会問題への関心と行動
	H 試行錯誤	●社会課題のつなぐ力にも前向きに挑戦し、試行錯誤を繰り返す。うまくいかない時にはそれから学び、改善し続けることができる	挑戦しない	同じ失敗を繰り返す	失敗から学ぶ	失敗から学ぶ	社会課題への挑戦と改善
	I 自己実現	●学校内外での学びと自身の得意なことを結びつけ、社会課題の解決に貢献できるイメージを持つことができる	自己の得意・得意への意識が低い	自己の得意・得意への意識が低い	自己の得意・得意への意識が高くなる	自己実現のイメージ	社会の一員としての得意なことを活かす

▽分析結果（2025.3月時点）

1 昨年度との違いや分析のながれ

データの目視での確認結果、2024年と2025年のデータには以下の違いがあることが判明した。

2024年

・「社会課題への関心」「社会貢献」「アントレプレナーシップ」が調査項目として存在

2025年

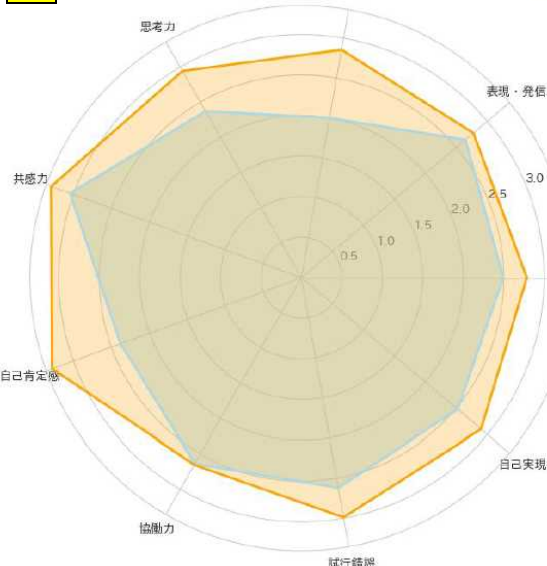
・社会課題への関心と社会貢献を「社会への関心」に統合
・アントレプレナーシップを「自己実現」に変更

上記の確認作業を通じ、社会貢献のみを除外し、データを比較可能とした。

また、複数回答や正誤判定などを予め実施し、明らかなミスは修正している。

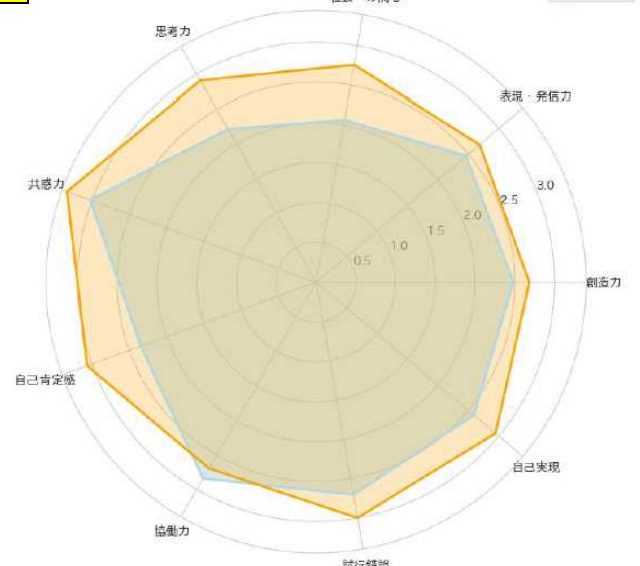
2年

2024年 vs 2025年 レーダーチャート
社会への関心

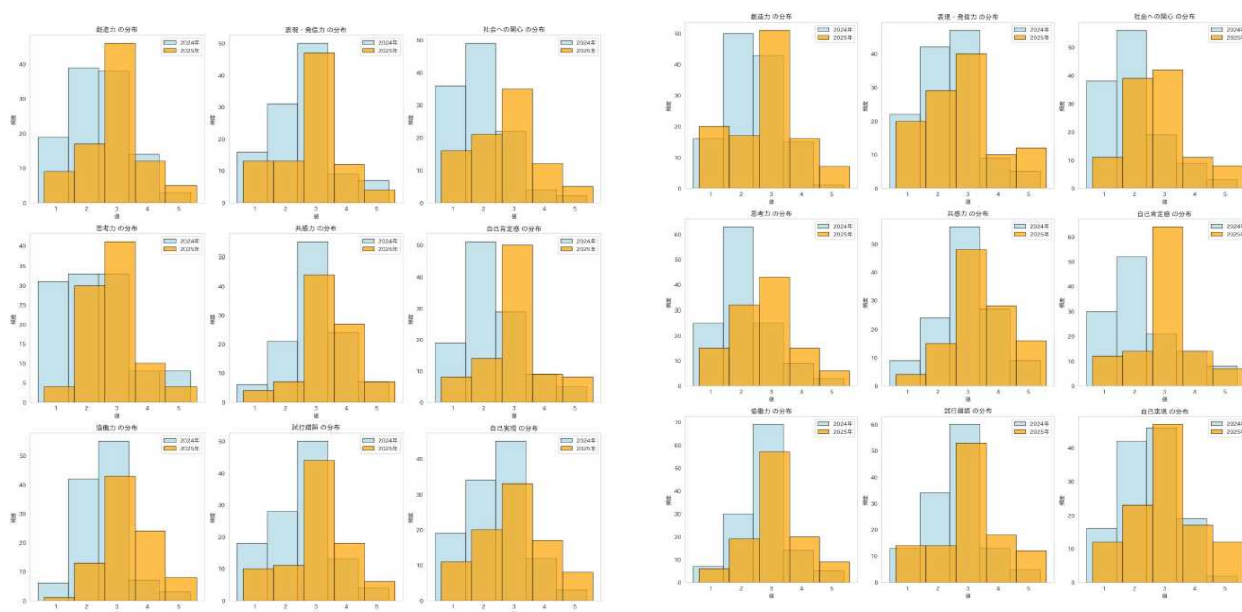


3年

2024年 vs 2025年 レーダーチャート
社会への関心



▽項目別



比較分析

< 2年生 >

- ・どの項目も「2～3あたり」に分布が集まりやすい。とくに「社会への関心」「思考力」「自己肯定感」など、2024年に低いスコアが多かった項目でも、2025年は改善の兆しが見える。
- ・一方で、2に集中する形は高学年と比べると弱い傾向が散見される。

< 3年生 >

- ・どの項目も「2～3あたり」に分布が集まりやすい。
- ・2025年は総じて「2」から「3」へのシフトや、「4」や「5」にわずかながら伸びが見られる項目が多い。
- ・とくに「社会への関心」「思考力」「自己肯定感」など、2024年に低いスコアが多かった項目でも、2025年は改善の兆しが見える。
- ・一方で高スコア（4～5）層の比率が十分に大きいとは言えない項目も散見される。
- ・今後は特に低得点層を減らし、中間から上位へ移行していくための学習支援・指導が求められる。

2－(ii) 定量評価の導入検討 → カリキュラムの再検討へ

(i) のルーブリック評価では、データの分析能力が不可欠であり、現在はコーディネーターの上田氏を中心に取り組んでいたが、コーディネーターの任期終了後を想定し、別の形で定量評価を検討している。現在、(株) IGS ソリューションの「Ai-GROW」に関する実践事例などの情報を収集しており、来年度の4月から「みらい共創科」で先行実施したいと考えている。

* 先進校視察：滋賀県立大津商業高校

3. 守山北高校全体のブランディング

新学科推進の取組を行いながら、新しい学科を作って学校の魅力化を図るのには限界があると感じている。もちろん、新学科も魅力化の1ピースではあるが、それと同時に普通科も含めた学校全体のブランディングが不可欠である。その一番の肝はやはり「授業改革」である。今年度は、普通教科での地域協働の様子や変化を、HP や毎月の職員会議で共有するだけでなく、職員研修を実施し、各教科で3学期に試行授業を行うような仕組みづくりを行い、普通教科への広まりを行った。ただ、すべての教員で取り組んでいるかについては、やはり疑問が残る。地域協働が「目的」ではなく「手段」として活用し、その先にある生徒の成長につながるよう、次年度以降も取り組みを継続していきたい。

▼R5年度の課題（R5年度報告書より抜粋）とその進捗状況

- ・公開授業の定期的な開催
→ 年に2回開催。保護者にも周知を行い、参加者もいた。
- ・「みらい共創」の評価方法検討
→ 学校独自のルーブリック策定。定量評価の導入検討中。（詳細は後述）
- ・大会議室の環境整備
→ MORIKITA BASE として整備継続中。（詳細は後述）
- ・企業や行政との連携
→ 継続したプログラムと新たな取り組みも多数行った。

（2） 管理機関による事業の実施体制や管理方法

本県では、令和4年度から概ね10年から15年先を見据えて、新しい時代を切り拓く人づくりのため、県立高等学校の在り方について全県の視野で基本的な考えを示す「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」を令和4年3月に策定した。令和5年3月には、この「基本方針」に基づき、全県の視野から各県立高等学校の魅力化の方向性を示す「滋賀の県立高等学校魅力化プラン」を作成し、各県立高等学校の魅力化の取組を推進している。

この「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高等学校（13校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和6年1月23日に開催し、各高等学校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認した。この連絡会議の場で、守山北高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、グループ別の意見交換を通して、地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及を図った。なお、本会議は隔年開催とし、次回は令和7年度に開催することとしている。

守山北高等学校は、地域の未来を担う人材育成を目指して地域の課題解決に向けた学びや、外部人材の活用や地域を教育資源としたフィールドワーク等による体験的な学びに取り組む地域連携重点校として、普通科の特色化に向けたカリキュラム等の検討を行っており、かつ関係機関や市町等の協力体制など取り組みやすい条件が整っていること等から、新学科設置に向けた研究を進めてきた。

事業の実施にあたっては、高校教育課魅力ある高校づくり推進室が事務局を担当し、室長1名、参事1名、主担当として教育企画主事1名、主任主事1名をその任に充て、学校の支援を行ってきた。適宜、守山北高等学校に出向き、取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議を行うとともに、3回開催した運営指導委員会では、事業の進捗状況や成果をその都度確認し、外部有識者による指導・助言・評価を行うことで、以後の事業運営に役立ててきた。令和7年度も高校教育課内の体制を継続し、学校の取組を支援していきたい。

令和7年1月に実施した中学校等卒業予定者の進路志望調査では、守山北高等学校への志望状

況は例年と比較してやや増加した。守山市内4中学校やそれ以外の中学校から守山北高等学校への志望者数の変化等を分析するとともに、新学科の地域への広報や魅力づくりについて守山市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和7年度以降の周知活動に努める。

■協議や先行実施授業等への参加状況

活動日程	活動内容
R6. 4/ 1	・運営指導委員を委嘱
R6. 4/ 4	・運営指導委員立命館大学柏木教授へ事業説明
R6. 4/22	・今後の取組について協議
R6. 5/ 1	・今後の取組について協議
R6. 5/16	・守山市教育委員会 守山市企画政策課訪問
R6. 6/ 8	・新学科説明会
R6. 7/23	・第1回運営指導委員会 ▶ 最新情報の共有、今後の方向性に関する指導・助言
R6.10/15	・取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議
R6.11/12	・守山北高校魅力化コンソーシアム第1回準備会議に出席 ▶ コンソーシアム構築に向けた協議
R6.11/20	・第2回運営指導委員会 ▶ 最新情報の共有、事業に関する指導・助言
R7. 1/17	・守山北高校魅力化コンソーシアム第2回準備会議に出席 ▶ コンソーシアム構築に向けた協議
R7. 3/19	・守山北高等学校研究成果発表会 ▶ 成果発表 ・第3回運営指導委員会 ▶ 今年度の取組に関する総括的な指導・助言

課題・次年度計画への反映方針

守山北高等学校では、先行実施授業や地域をフィールドとした探究的な学び、地元地域行事への参画など数多く実施されたが、それらの取組全てに立ち会うことができなかった。

令和7年度は、学校における取組状況やコンソーシアムの管理運営について情報を共有しつつ、管理機関として、適宜、校内検討会議や新学科の授業等に参加しながら事業管理を行う。あわせて新学科の学びを実施しながら、令和8年度に向けてさらに準備を進めていく。

また、令和7年1月に実施した中学校等卒業予定者の進路志望調査では、守山北高等学校への志望者数は全体としてはやや増加し、みらい共創科は23人の志望があった。守山市内4中学校やそれ以外の中学校から守山北高等学校への志望者数の変化等を分析し、新学科の地域への広報や魅力づくりについて守山市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和7年度以降の周知活動に努める。

(3) 高等学校における事業の実施体制や管理方法

今年度の成果

① カリキュラム検討のための組織体制

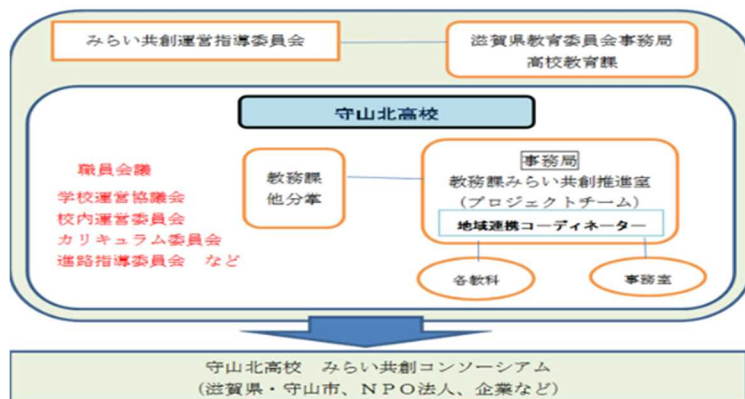
■プロジェクトチーム

本校では、昨年度に引き続き、教務課内に新学科推進のための事務局としてプロジェクトチームを設置し、コーディネーターを交えて定期的な会議（月2回程度の頻度）を行った。カリキ

キュラムの検討を中心に据え、学校行事や現行の「総合的な探究の時間」の変革、実際の教材に関する議論等に加えて、環境設備や広報デザイン等、学校全体の魅力化をどのように図れるかについて重点的に議論を進めた。

また、毎月の運営委員会・職員会議で、教職員に対して新学科推進の進捗状況や情報の共有を行うとともに、適宜教職員向けのアンケートを実施しながら、それらの意見を集約・共有しカリキュラム等のブラッシュアップを行った。

▽組織図



2. 探究担当の学年制

今年度は、もりきた学（総合的な探究の時間）の学年担当を1名ずつ配置し、各学年の総合的な探究の時間係の先生と連携を図りながら、授業を計画・展開していった。役割と責任が分担できることで、スムーズな運営ができた。来年度も学年担当制を継続させたいと考えている。さらに、学校全体の探究分野を統括する“探究部”のような組織も整備していくべきである。具体的には、探究部の主任を中心に、総合的な探究の時間の学年担当者、みらい共創の授業開発担当（現新学科推進室）をメンバーとして、3年間の全体像や育成する生徒像を共有しながら、指導にあたる組織である。

3. 総探委員会の開催

もりきた学（総合的な探究の時間）に関する計画や指導方針、評価について、各学期に1回程度、学年と連携した形で総探委員会を開催した。委員会は基本的に放課後に行っていたが、部活動の指導や補習、生徒対応等もあり、通常時間割内に総探担当者会議の時間が確保できる方が望ましい。（または月行事として明記）

4. 学校運営協議会の開催

△第1回運営協議会

日 時：2024年6月19日（水）15：40～

場 所：大会議室

メンバー（敬称略）

（委員）北脇すみよ（PTA会長）、田中義規（ゆいの里）、津田徹（元笠原自治会長）、中島義訓（守山市役所企画政策課）、服部宣彦（元守山市立中学校長）

（県教育委員会）石田由美（生涯学習課社会教育主事）

（学校職員）杉原真也（校長）、柳垣弘樹（教頭）、林敬治（事務長）

富高靖二（教務主任）、高田法悟（CS担当）、山崎仁嗣（地域連携担当）

林拓矢（生徒会担当）、野村正樹（生徒会担当）

協議題

1 出席者の自己紹介

2 会長・副会長の選出（会長：服部氏、副会長：北脇氏）

3 学校教育目標・経営の重点

校長より守山北高校の教育目標・学校経営の重点について説明

- ・生徒面談や教育相談の充実
- ・自主活動や体験活動の実施
- ・地域への広報 PR
- ・進路選択に向けた意識の向上
- ・学年分掌の連携体制

4 県立学校の魅力化・特色化

I アントレプレナーシップ事業について（高田教諭より）

- ・新学科だけではなく学校全体の魅力化へ
そのために「総合的な探究の時間」を「もりきた学」としてカリキュラム再編成
もりきた学Ⅰ：“人に出会う”
もりきた学Ⅱ：“地域に出会う”
もりきた学Ⅲ：“新たな自分に出会う”
- ・新学科の開設に向けて、先行授業の実施
Ⅰ もりきた共創 Day の実施
Ⅱ インターンシップの試行実施

Ⅱ 地域と連携した主権者教育の充実について（林教諭より）

- ・スマホの使用ルールに関する問いを設定し、生徒会執行部で取り組む
現在計画を作成中だが、アンケートの実施や県内外の事例調査、探究学習の手法を専門家にヒアリングするなどしていきたい。

Ⅲ 学外コンテストへの参加について（野村教諭より）

- ・アントレプレナーシップの育成プログラムを活用して、学外コンテストに参加予定
テーマは「笠原しょうが」について、県内にある大学の理系学部と連携した研究も

5 コンソーシアム

コンソーシアムについて（杉原校長より）

- ・文科省の指定事業では「コンソーシアム」と呼ばれる組織を設置することが必須
- ・原案では二層構造を考えている。一層は理事会、二層は分科会のような形
そこにこの運営協議会をどのように位置づけていくのか、夏以降ヒアリングも開始



▲会議の様子

△第2回運営協議会

日 時：2024 年 10 月 18 日（金）15：30～

会 場：守山北高校 大会議室

メンバー（敬称略）

（委員）服部宣彦 北脇すみよ 荒川富也 田中義規 中島義訓

（県教育委員会 生涯学習課参事） 宮崎良一

（学校）杉原真也 柳垣弘樹 林敬治 富高靖二 山崎仁嗣 高田法悟 林拓矢 野村正樹

（生徒）2 年インターンシップ参加生徒 1 名、1 年生徒会執行部 3 名

協議題

1 校長挨拶

2 生徒発表

「インターンシップについて」（2 年南田）

「文化祭の取組」「笠原しょうがの取組」（1 年生徒会執行部 3 名）

3 意見交換会（生徒含む）

「インターンシップ」

- ・インターンシップ参加後に日常生活で変化はあったか（服部委員）
- ・周囲の生徒にはインターンシップの取り組みについて話したか、どんな反応だったか（北脇委員）
⇒インターンシップは新学科のメインの取組、学年のまわりの生徒にも報告会等で還元する予定（杉原校長）
- ・インターンシップは将来にどういかされそうか（田中委員）
⇒将来にいかすにはやはり実体験が大事（田中委員）

「文化祭について」

- ・今年度は新たな挑戦があった。自分たちでやる部分と外部に頼った部分も。（野村教諭）
⇒ただ、生徒の意見で多かったのは、模擬店をやりたいという声（生徒会生徒）
- ・文化祭を見たが、手作り感があってよかった。ただ、キッチンカーがあってこだけ別世界感があって違和感があった。（北脇委員）
- ・キッチンカーは昨年度同様に外部にお願いをした。昨年は 4 台だったが、混雑を避けるために 5 台になった。
また、値段も高く、2 日間とも同じメニューになった。1 日目をキッチンカー、2 日目を模擬店でもいけそう（野村教諭）
- ・値段が高い場合、他校では生徒に補助チケットで 100 円割引券を配布したりしている。検討できるのは（北脇委員）
- ・準備期間中のスマホの使用をもっと許可してほしい。買い出しなど（生徒会生徒）
- ・スマホでゲームばかりしている他校での様子を見ると、クラスの出し物に集中できる環境は大事（野村教諭）

「笠原しょうが」

- ・夏休みにしょうがの収穫、長浜バイオ大学の川井教授の協力を得て、成分調査も実施。親しょうがと子しょうがでは、親の辛み成分は多く、子の辛み成分は少ないことがわかった。また、親しょうがは基本的に破棄されることが多く、SDGs の観点からも、親しょうがの再利用方法などを研究したい。（野村教諭）
- ・アントレプレナーの育成プログラムを活用して、コンテストに参加予定。12 月の発表に向けて、商品開発にも取り組む予定。（柳垣教頭）
- ・商品開発となると学校予算では厳しいのでは。平和堂などの補助金を使ったらどうか（北脇委員）
- ・生徒会執行部だけの取り組みはもったいない（田中委員）

「学校がもっと〇〇になれば」

- ・スマホの使用を緩和してほしい
⇒昼休みだけでも、思い出づくり、写真をとったりできる（参加生徒全員）
- ・「使用したい」だけでなく、どうやったら良くなるのか、スマホのメリットデメリットをもっと考えたらどうか（田中委員）
- ・夏休みに立命館守山で行われた「スマホサミット」に参加。スマホのルールについて意見交換を行った。関係者へのヒアリングや生徒アンケートの実施などが行われている学校もあり、参考になった。（野村教諭）
- ・もたないことのメリットは見逃せない。「中立」の立場の専門家にヒアリングするなど必要ではないか。ほかにも学年制はどうか。3年は選挙権もあるため、スマホの制限緩和など。（北脇委員）
- ・女子が少ない（生徒会執行部）
- ・購買や自販機（アイスなど）の種類を増やしてほしい（生徒会執行部）
- ・目安箱的なものの設置で、意見を集めたりできないか（生徒会執行部）

「新学科の広報」

- ・現時点での希望者数が伸び悩んでいる。定員充足に危機感を感じている。（杉原校長）
- ・一番は出口保障が大事。学んだことがどういかされるか。進路先につながるかに注力する必要がある。（服部委員）
- ・広報用のPVを作ってはどうか。人によって広報の仕方が変わるのではなく、学びの具体（授業の様子）を動画で作成する。（北脇委員）
- ・高校生の間に自分のキャリアを考えるための実体験を交えた選択肢が他の高校と全く違うイメージ。これはもっとPRすれば、自然と広報できるはず。（田中委員）

「学校評価」

- ・教員サイドとして、あいさつの徹底などはすごく課題。今後新学科関連で地域と連携した取り組みの部分は改善される。（杉原校長）



▲会議の様子

▼R 5年度の課題（R 5年度報告書より抜粋）とその進捗状況

- ・教職員の意識向上
→ 学期に1回の職員研修を実施した。（詳細は後述）
- ・教員の負担感
→ 新学科のスタートが次年度であるため、令和7年度における取組として継続して行う。

（4） 運営指導委員会の体制および取組

運営指導委員会では、活発な議論が行われ、カリキュラムや評価、先行授業、コンソーシアムの運営、持続可能性等における大切な視点について、多くの指導・助言をいただいた。事前に資料を配付することで、限られた時間での議論を深めるとともに、会議の際には自立移動式のモニターを用いるなど新学科で用いる機器を一部紹介することができた。

運営指導委員の専門的な立場からの様々な指導・助言は、学校としても貴重であり、令和7年度も引き続き、年3回は運営指導委員会を開催していく。

■運営指導委員会の体制

氏名	所属
大野 裕己	兵庫教育大学学校教育学部 教授
柏木 智子	立命館大学産業社会学部 教授
森中 高史	守山市 市長
桶土井 雅章	株式会社日本政策金融公庫 大津支店長
根木山 恒平	NPO法人碧いびわ湖 常務理事

■運営指導委員会の取組

	開催日	内容
第1回	R6. 7/23	・最新情報の共有、今後の方向性に関する指導・助言 ▶ 先行授業の取組について ▶ 「学校設定科目」と「総合的な探究の時間」とのつながりについて ▶ ルーブリックについて ▶ 広報（説明会・HP のリニューアル）について ▶ コンソーシアムの立ち上げについて など
第2回	R6. 11/20	・最新情報の共有、今後の取組に関する指導・助言 ▶ 「学校設定科目」、「総合的な探究の時間」と進路指導計画の全体像について ▶ 評価（ルーブリック）について ▶ コンソーシアムの進捗状況について ▶ 学校改革の現状等について など
第3回	R7. 3/19	・今年度の取組に関する総括的な指導・助言 ▶ 守山北高等学校研究成果報告会について ▶ 次年度の取組について など

課題・次年度計画への反映方針

年3回開催して、事業の進捗状況や成果、課題等を確認し、適宜、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てるよう努めてきた。次年度も学校が求める指導・助言等をいただけるよう、学校との打ち合わせを十分に行い、準備を進めていく。

運営指導委員会の開催にあたっては、学校の取組や進捗状況等も把握しながら進めていく。

(5) コンソーシアムの体制および取組

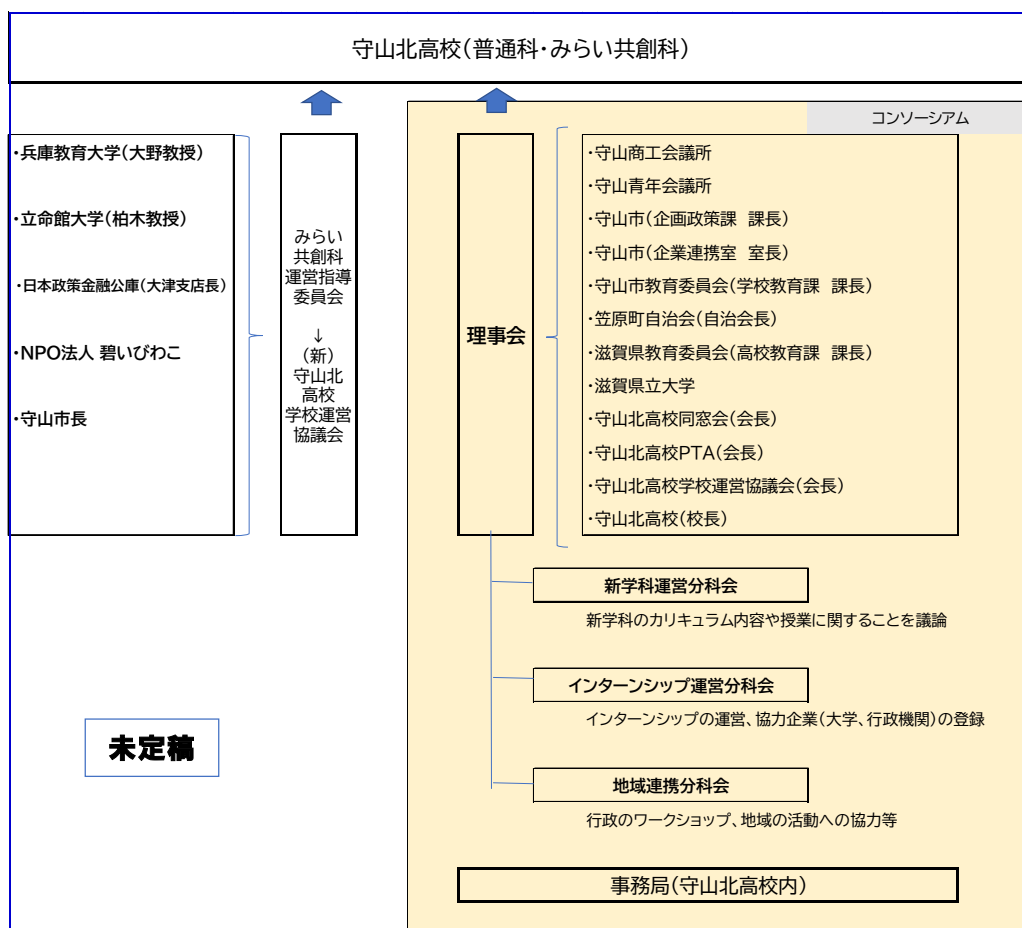
今年度の成果

1. コンソーシアム設立第1回準備委員会(11月)

昨年度は、カリキュラム検討を中心に進めたこともあり、コンソーシアム設立に向けた取組は全くできなかった。7月の運営指導委員会や学校運営協議会においては、本県伊香高校の取組事例や先進的な島根県浜田市の取組事例を参考に検討しているという現状報告を行ったに過ぎなかった。

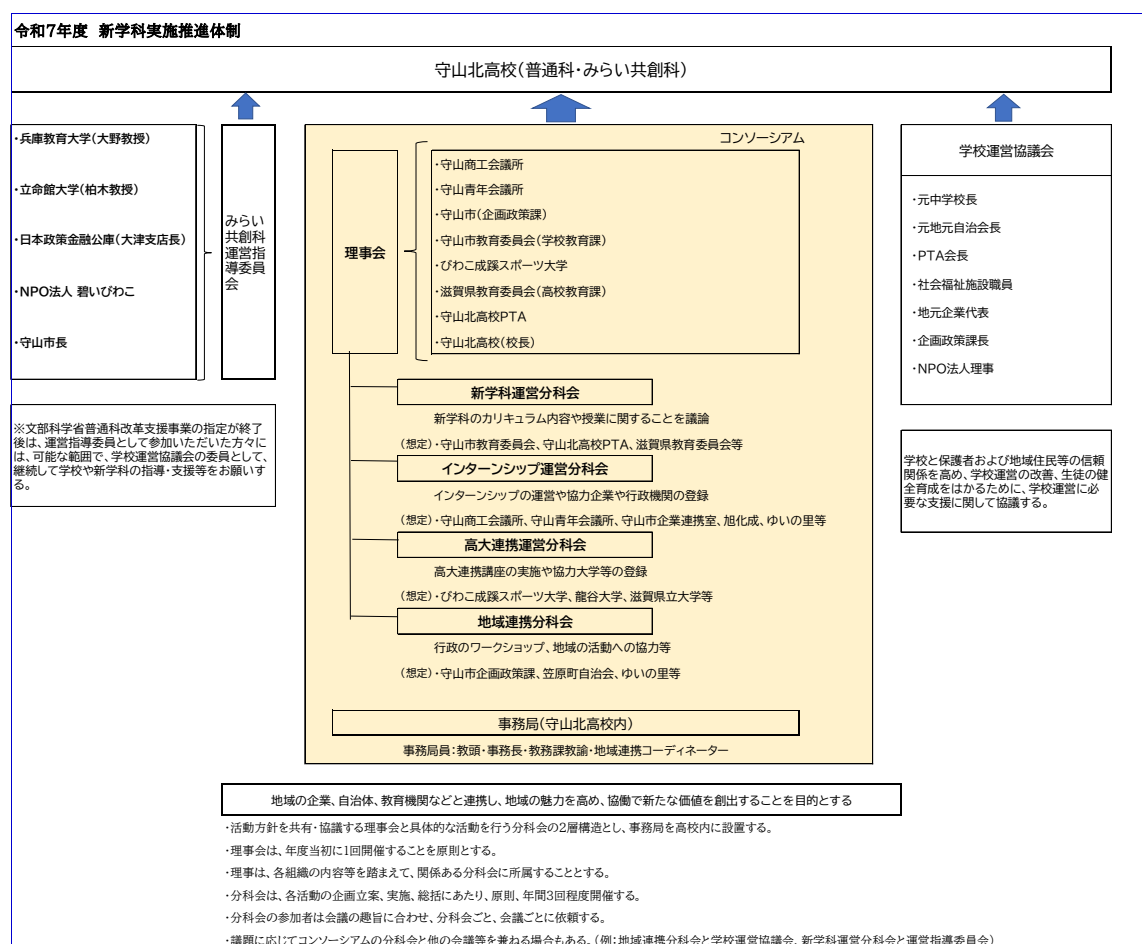
9月以降本格的に検討を行い、11月12日に守山北高等学校魅力化コンソーシアム第1回準備委員会を開催し、設置目的、運営体制、規約等について議論いただいた。コンソーシアムは、活動方針を共有・協議する理事会と具体的な活動を行う分科会の2階建てとし、連絡調整を行う事務局を本校内に設置することを原案として提案した。会議においては、大きな構想・方針は理解したが、理事の数が12名というのは多く、少なくして機動性を重視し、アイデアを求める方が良いのではないかと議論された。理事と分科会の役割や関係性を明確にすべきである。学校運営協議会とコンソーシアムの役割・関係性はどのようになるのか。他の地域からの進学生徒もあるが、守山市との連携を重視していくコンソーシアムでよいのかなど、修正点も含め議論をいただいた。

▽会議資料(第1回)



2. コンソーシアム設立第2回準備委員会

第1回の会議を受け、大学におけるコンソーシアムや理事の意味合いを理解するコーディネーターと議論を重ね、龍谷大学高大連携室に別件で伺った際に参考意見もいただき、下記のとおり令和7年度の新学科実施体制を再構築し、1月17日に第2回準備委員会を開催し議論を深め、了承を得られた。



3. 「地域と守山北高のみらい共創コンソーシアム」

令和7年2月の学校運営協議会、同年3月のみらい共創科運営指導委員会で報告し、令和7年4月に、地域と守山北高のみらい共創コンソーシアムの理事に参集いただき、設立委員会ならびに第1回理事会を開催する予定である。

(6) コーディネーターの配置および活動内容

今年度の成果

1. 分業体制

本校のコーディネーターは2名体制で学校運営に関わっている。これは昨年度から継続している形であり、非常勤のコーディネーター2名が、それぞれのもつ知見や技能を最大限生かせる勤務体系であるといえる。2名体制にすることで、それぞれの役割と責任が明確化し、また、学校側の課題に応じた対応が可能である点も、メリットであるといえる。

1— (i) コーディネーター上田氏

- ・上田氏は主にカリキュラムの検討や実際の授業運営における教材の提供や開発に尽力していただいた。「取組の持続可能性」に重点を置き、他校での総合的な探究の時間の運営に関わられた知見を活かしながら、探究学習の基礎的な部分をまとめた自主教材の開発にも取り組んでいただいている。また、地域へのヒアリングを行う際にも、アポをとっていただいたり、アテンドをしていただいたりと、地域と学校とのハブ役も担っていただいた。

1— (ii) コーディネーター田口氏

- ・田口氏は、昨年度に引き続き、主に広報デザインの部分に尽力していただいた。本校では広報活動を学校改革の重要な柱の一つと位置付け、積極的な取組を行ってきた。広報用タブロイドの制作にあたり、学校改革におけるさまざまなステークホルダーの意見を丁寧に収集しながら、昨年3月に実施された職員会議での意見をもとに、新学科の特徴と魅力を明確に伝えるための修正を施した。例えば、探究学習の成果が社会においてどう役立つのかを示す具体例が追加されたり、視覚的なデザインも生徒や保護者が親しみやすいものに仕上げられたりした。また、企業や地域社会との連携が可視化され、実践型インターンシップを推奨する内容が強調された。体験入学の参加者数の増加等にも確実につながる資料となった。

▽タブロイド紙



ピックアップ



「みんなの行きたいところはどこですか？やりたいことは何ですか？」パラ陸上アスリート福永凌太さん講演会

2024年12月19日



障害ってなんだろう…アートを通して考える

2024年12月7日



アグリカフェ 果物の“香り”と“おいしさ”～鼻で味わう食べ物を～

2024年11月27日

新着情報

「みんなの行きたいところはどこですか？やりたいことは何ですか？」パラ陸上アスリート福永凌太さん講演会
2024年12月19日



▽HP検索、アクセス数

2023年1月1日 - 2024年12月31日

2023年1月1日 - 2024年12月31日



投稿とページ	表示数	リファラー	表示数
TOP	14,682	検索エンジン	14,557
#6 (タイトルを読み込み中) 旧トップページ	12,866	Wikipedia	761
学校紹介	5,087	Facebook	98
みらい共創科	4,814	service.smt.docomo.ne.jp	75
行事予定	4,150	sites.google.com	30
入学案内	3,792	Twitter	26
2024年度 第二回体験入学の実施について	2,925	sp-web.search.auone.jp	24
学習・進路	2,843	WordPress Android App	23
生徒会・クラブ活動	2,684	WordPress ダッシュボード	18
ニュース	2,613	seisenjfc.com	15
すべて表示		すべて表示	

今年度の課題と次年度の計画への反映方針

1. 持続可能な取組を目指して

1－(i) サポート役

本校でのコーディネーターの役割は多岐にわたり、またその貢献度は非常に高い。その一方で、任期終了後を見越した取り組みは常に考慮しなければならないと考えている。公立高校の教員である以上、転勤のタイミングは不明瞭である。そのために、人が代わっても継続される仕組みづくり、つまり自走できるシステムを構築する必要がある。今年度は、コーディネーターは、取り組みの最前線に立って学校を引っ張るというよりも、教員のサポート役、黒子に徹するような形で取組を行った。これは、それぞれの学校が置かれた立場や、校内の状況にもよるため、一概に良い形と言い切ることは難しいが、本校においては最良の体制であると考えている。コーディネーターの任期終了後を想定しながら、持続可能な形での取組を行っていきたい。

1－(ii) 引継ぎ

一方で学校内の引き継ぎ体制づくりは急務である。現在、各学年団のほかに、教務課、進路指導課、生徒指導課、教育環境課の4つの分掌があるが、来年度は教育環境課を解体する予定である。それぞれの分掌の人数を確保し、適切な学校運営にあたる一方で、やはり教務課内の新学科や総合的な探究の時間担当の負担は非常に大きくなることが予想される。（コーディネーターの任期は来年度まで）学校として、探究学習に重点を置いた取組をするなら、学校内の体制とまたその後の事業継続を見越した中長期的な目線での体制づくりが求められている。来年度の大きな課題点であるといえる。

■コーディネーターの勤務記録

	上田コーディネーター		田口コーディネーター	
	時間数	主な取組事項	時間数	主な取組事項
4月	40.0	・教材の開発	16.0	・学校紹介プレゼン資料作成 ・学習プログラムの検討
5月	52.0	・関係機関との打ち合わせ	23.0	・学校紹介プレゼン資料作成
6月	31.0	・シンポジウムの準備	14.0	・学校紹介プレゼン資料作成
7月	29.0	・シンポジウムの準備	15.0	・シンポジウムの準備
8月	46.5	・カリキュラム打ち合わせ ・体験入学準備・分析	6.5	・カリキュラム打ち合わせ
9月	21.0	・カリキュラムの策定	19.5	・教材の開発
10月	23.5	・カリキュラムに関する打ち合わせ	15.5	・教材の開発・打ち合わせ
11月	20.0	・教材の開発	16.0	・教材の開発
12月	22.5	・次年度に向けた全体計画	3.0	・次年度に向けた全体計画
1月	21.5	・教材の開発 ・研修資料の作成	－	(活動実績なし)
2月	35.0	・ループリックデータ分析	11.0	・次年度に向けた全体計画
3月	38.0	・教材の開発	38.0	・学校案内パンフレット作成

課題・次年度計画への反映方針

学校におけるコーディネーターの役割は多岐にわたり、その貢献度も非常に高い。コーディネーターの任期終了後も想定しながら、持続可能な形での取組を行っていく必要がある。また、新学科や総合的な探究の時間担当の教員の負担が増加することも予想され、学校内の体制づくりや事業継続を見越した中長期的な目線での体制づくりが求められる。

次年度は、みらい共創科の第1期生が入学することから、具体的な取組や在籍する生徒の学びの成果など中学生はもちろん、中学校の先生方や保護者の方、さらには守山市、地域の方々にも周知していきたい。

(7) 新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況

■守山北高等学校

今年度の成果

1. 職員研修会の実施

1—(i) コミュニケーションスキル研修

日時：2024年6月5日（水）15：30～

場所：大会議室

講師：蓮行 氏（劇団衛星/京都大学経営管理大学院特定准教授）

大山 湊花 氏（立命館大学 客員協力研究員）

目的：もりきた学に用いる演劇を用いた学習やワークショップを教員が体験し、その内容と意義を共有するとともに、コミュニケーションスキルの向上につなげる。

内容：『みらいを共に創るための集合知生成』

「集合知生成／コミュニケーションデザインの考え方」をワークショップ等を通して理解した。流れは以下の通りである。

- ・キーワードに関する解説
- ・不親切理論についての解説
- ・集合知生成についての解説
- ・コミュニケーションデザインについての解説
- ・ミニコミュニケーションワーク：いいですね～ゲーム※
- ・メインコミュニケーションワーク：コンサルテーション XX※

（日本学術振興会 科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究（2016年）採択研究課題「高等教育における演劇的手法を用いた教育プログラムの事例分析と設計指針の構築」にて開発



▲研修会の様子

1— (ii) ビジョン共有のための研修

日時：2024年11月25日（月）13：30～

場所：大会議室

目的「新学科設置」に際して、本校全体の現在の課題と今後の展望を共有する
学校全体（新学科も含む）が目指す方向と目標を共有する
もりきた版「生きる力」とは、それを育成するために学校や教員に求められることを具体化する

内容：「生きる力を育てるために今、求められること」

10月に教員向けに事前アンケートを行い、その資料をもとにグループ討議を行った。流れは以下の通りである。

- ・研修会の目的・流れの確認
（これまでの取組、新学科のコンセプト説明、アンケート結果の共有）
- ・グループ討議①（分掌・学年別）
テーマ①：各分掌の現状課題とその手立てを考える
 - ・各班はアンケート結果から課題を複数抽出し、議論の材料とする
 - ・時系列表から、①今年度中に取り組めること ②来年度以降も検討
→ 3学期の総括で報告
- ・グループ討議②（教科別）
テーマ②：現行の授業で、探究的・地域連携的・教科横断的な学びの可能性を見つける
→ アンケート結果を参考に、授業デザイン作成→3学期計画、試行
- ・グループ討議③（世代別）
テーマ③：未来像を語ろう！ ～3年後、もりきたが目指す姿～
 - ・アンケート結果を参考にしながら、未来像を語る *まとめ方は自由
 - ・青写真（ポンチ絵）のメインとなる部分、青写真のデザイン化



▲研修会の様子

2.近隣施設へのヒアリング

来年度以降の授業連携を見越して地域へのヒアリングを以下の通り実施した。

2— (i) 北部図書館

日時：2024年11月12日（火）16：00～

場所：北部図書館

担当者：佐藤志歩氏

目的：来年度の「みらい共創Ⅰ」での連携について

打合せ内容

- ・授業連携は可能。生徒の解決策の実行なども可能。ただし、利用者の方のプライバシーだけは守る必要あり。

- ・データの分析や情報収集の分野でも、ぜひ北部図書館を利用してほしい。
- ・検証実験の場合は、北部図書館だけでなく、「学区民のつどい」も活用してみてもどうか
→ 地球市民の森で開催される地域のまつり。小さい子からお年寄りまで幅広い
- ・現在の北部図書館では、毎週火曜にお話しのイベントがあるくらい。

2— (ii) エコパーク

日時：2024 年 12 月 9 日（月）11：00～

場所：エコパーク

担当者：武田みゆきさん

目的：来年度の「みらい共創 I」での連携について

打合せ内容

- ・授業の連携は可能
- ・1 学期にグループワークなどの力をつけてきてくれるのは非常にありがたい
- ・探究学習では、「わかったつもり・知っているつもり」が多いので、実際に社会で検証できるのがすごくよい。
- ・アントレプレナーシップの本質がわかるほうがよい。
→ 漁師さんや琵琶湖ドーターズさんなど、環境教育をビジネスにいかす
- ・フィールドワークに重点を置き、「やったことがある」からスタートできるといい。

実体験が「わかった」につながる

（授業フィールド案）

- ・琵琶湖（生物多様性、内湖の活用など）→ 少し大きなフィールドになる
- ・野洲川（アユの産卵床、ビワマスなどを対象魚にする・野洲川の防災）
→ エムリバー作成等身近でよいかも
- ・親水公園（公園の利活用・学区民のつどいなど）→ 野洲川とセットにするとよい
- ・近所の水路（魚、防災など）

*11 月のエコフェスタ（エコパーク開催）や学区民のつどい、12 月の淡海の川づくりフォーラムを活用すればプレゼンの機会が増える。さらに北部図書館と連携して、成果物のポスター掲示も可能。

3.新学科に関する説明会（県教委主催） 実施

日 時：2024 年 6 月 8 日（土）13：30～

場 所：守山市民ホール（小ホール）

参加人数：111 名

（中学生・保護者・中学校関係者・メディア関係・その他）

配布資料：学校案内、新学科タブロイド紙、体験入学の案内、アンケート用紙ほか
当日の流れ

- 13：30 教育長挨拶
- 13：40 新学科説明（守山北高校教員）
- 14：00 生徒発表
- 14：20 質疑応答
- 14：30 校長挨拶

*司会進行、受付は生徒会執行部による運営



教員説明

- ①地域社会学科について（普通科改革）
- ②「みらい共創科」について
 - ・学びの特色
 - ・実践型インターンシップ
 - ・先行実施授業
- ③「もりきた学」について
 - ・アンケート結果
 - ・先行授業授業
- ④キャリアデザインについて
 - ・キャリアデザインプログラム
 - ・進路サポート



生徒発表

- 発表①「インターンシップ」 3年
発表②「家庭内暴力の原因」 2年
発表③「コラボ授業」 生徒会



＊教員説明および生徒発表は成果報告として実施

▲説明会の様子

質疑応答

- Q1 地域をフィールドとした学びをする上で、外部団体の協力組織みたいなものはできているのか、また協力企業のようなものを募集するのか。
- A1 現在組織中。コンソーシアムと呼ばれる組織を構築して、定期的な会議を開き情報共有を図りながら、学校支援隊のようなものをつくっていく。
- Q2 教育課程をみると、「みらい共創」の授業が導入される分、どのように普通科のカリキュラムから変化したのか
- A2 実際、「みらい共創」の分、これまでの普通科のカリキュラムから単位数が減少したり、科目数が減少した普通教科もある。ただ、昨年度から学校内で何度も協議（カリキュラム検討委員会）を重ねた部分。何を重視するかで決定したカリキュラムである。
- Q3 みらい共創科ができる背景はどのようなことだったのか
- A3 滋賀県全体として、普通科改革（魅力化）が行われる中で、本校は「地域と協働した学び」というのが特色となった。その経緯から、今回新学科の設置という流れになったと思う。
- Q4 （生徒に質問）あなたがこの新学科に入れるならどんなことを学びたいか
- A4 もうすぐ求人票がくるタイミングでもあるので、はやくから企業の方々などとグループワークしたり意見交換ができれば、自分のためになると思う。
- Q5 グループワークの頻度はどれくらいか
- A5 「みらい共創」の授業は金曜5・6限の2時間連続を想定している。授業内容によって異なるが、授業は週に1回、金曜日に行く。
- Q6 みらい共創科は1クラス40名と書いてあるが、他の普通科との交流はあるのか。
- A6 ある。学校行事も一緒にやる。ただ、カリキュラムが異なる部分があるので、そこは差別化していく。

Q7 インターンシップでは守山市以外との連携はあるのか。

A7 ありえるが現時点で協力をお願いしているのは守山市が中心である。今後、個人でやるのかグループ単位でやるかなど、検討事項もたくさんあるので、他市との連携についても検討していくと思う。

Q8 新学科の位置づけは

A8 普通学科普通科と普通学科みらい共創科になる。出願要項等についても6月の県下一斉提示で確認してほしい。現時点ではここまでしか言えない。

○参加者の感想より（抜粋）

- ・地域に根差す学びがおもしろい！！
- ・もりきた学とみらい共創で、総合的な探究の時間をより深める科と理解しました。インターンシップに大胆に取り組めそうなところに魅力を感じました。
- ・在校生の方の発表が良かったです。
- ・ご説明をうかがってワクワクする学科が生まれると感じた。
- ・地元を大切にしていこうというのはよくわかりました。新学科設立によって探究型の授業の内容のレベルアップを期待しています。

4.体験入学（高校主催） 実施

4―（i）第1回体験入学

日時：2024年8月23日（金）9：00～

会場：守山北高校

全体参加者数 第1回体験入学 生徒：173名 保護者：98名

第1回体験入学流れ

8：40～ 受付開始

9：10～ 学校全体説明（教務課）

＊各教室で放送にて実施

9：25～ 新学科説明、成果発表（新学科推進室）

9：40～ 学校行事、部活動説明（生徒会執行部）

10：00～ 模擬授業①

10：40～ 模擬授業②／部活動体験（野球部）／部活動見学

11：10～ 各会場にて解散

第1回体験入学 みらい共創科 模擬授業

・イントロダクション（5分）

・チーム分け／準備（5分）

・ペーパータワー（15分）

・評価／振り返り（5分）

模擬授業①参加生徒：64名

模擬授業②参加生徒：15名

はじめにイントロダクションとして、「共創」についての説明や、基礎トレーニングの流れについて説明した後、チーム分けとして「バースデーライン」を実施した。しかし、出身中学校が異なる集団で、さらに保護者も多く見学される独特の雰囲気もあり、なかなか積極的に参加する生徒が少なかったため、教員のサポートを適宜入れながらチーム分けを行った。（模擬授業②ではスムーズに実施できた。模擬授業①を受けた後で、本校の雰囲気に慣れてきた部分も大きかったように思う）

5～6人のグループを結成し、簡単な自己紹介とペーパータワーの説明をした後、実際にペ

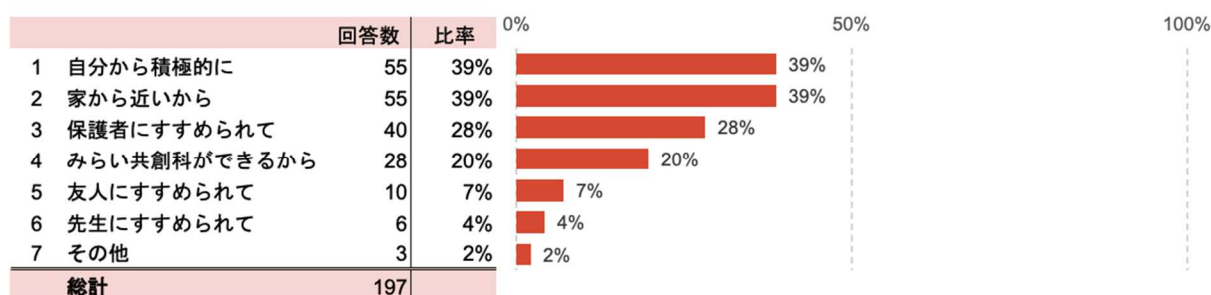
ーパータワーの活動をスタートした。初めてのメンバーでなかなかコミュニケーションがとれないグループもあったが、時間が経つにつれて、ほぼすべてのグループがペーパータワーの作成に取り組んでいた。最後に、なぜペーパータワーを行ったのか、その目的や活動のポイントを解説して模擬授業を終えた。



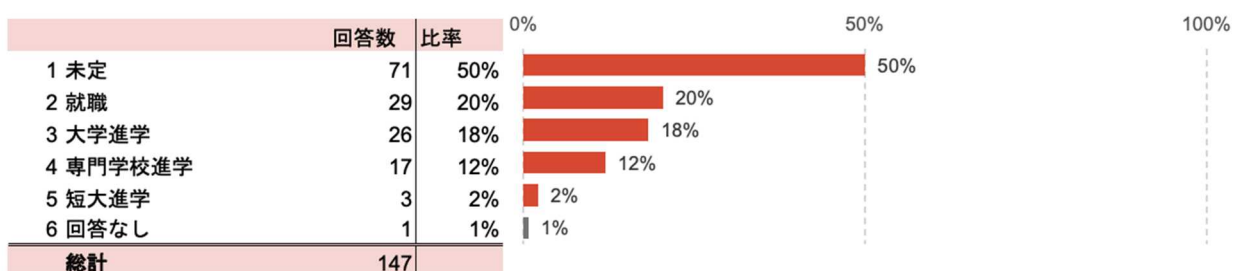
▲体験入学の様子

▽アンケート結果：回答数 142

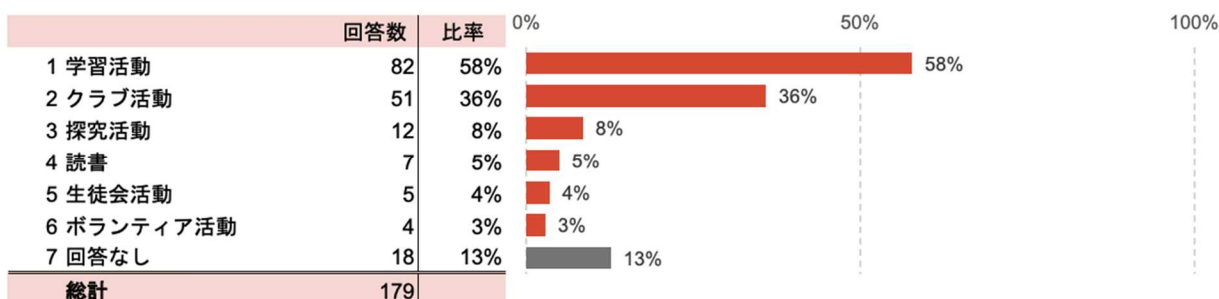
Q1. 参加動機（複数回答）



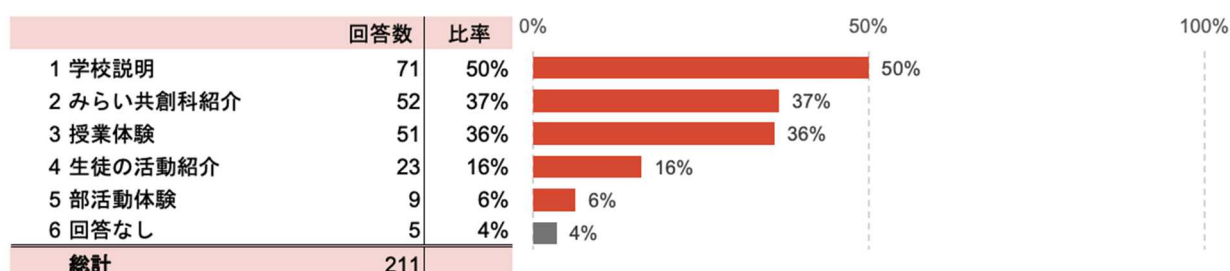
Q2. 高校卒業後の進路（複数回答）



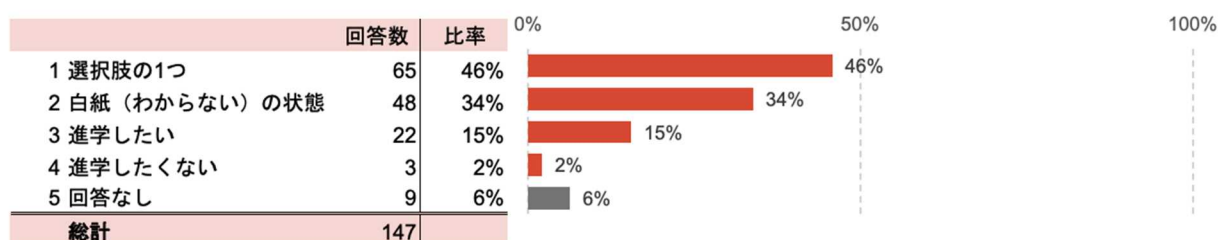
Q3. 高校入学後に力を入れたいこと（複数回答）



Q4. 本日の内容の中で、本校の様子を知る上で参考になったもの（複数回答）



Q5. 体験入学を終えた、いま時点での本校への進学希望（複数回答）



<理由についての記述抜粋>

- ・地域とのつながりも多く、先生方もとても優しい印象だったからです。
- ・体験授業を受けて楽しかったし、授業で学んだことがたくさんあったからです。
- ・新しいものを色々と学べそうだから。仲間とたくさんの青春を味わえそうだから。
- ・楽しそうだし、文化祭とかも面白そうだし、色々となことが知れそうだと思う。社会のことももっといっぱい知れそうだと思う。
- ・もっとみらい共創科のことを学びたいと思った。
- ・他にも気になっている高校があるから。
- ・まだ他の体験入学に行けていないから、もっと他の学校も見てから決めたいと思ったから。

4—（ii）第2回体験入学

日時：2024年9月21日（土）9：00～

会場：守山北高校

全体参加者数 36 名 第2回体験入学 みらい共創模擬授業生徒：15 名

第2回体験入学流れ

- 8：40～ 受付開始
- 9：10～ 学校全体説明（教務課）
- 9：25～ 新学科説明、成果発表（新学科推進室）
- 9：40～ 学校行事、部活動説明（生徒会執行部）
- 10：00～ 模擬授業／部活動見学
- 11：00 ごろ 各会場にて解散

第2回体験入学 みらい共創科 模擬授業

- ・イントロダクション（5分）
- ・アイスブレイク（5分）
- ・ペーパータワー（15分）
- ・評価／振り返り（5分）



はじめにイントロダクションとして、「共創」についての説明や、基礎トレーニングの流れについて説明した後、3～4人のグループを結成し、アイスブレイクとして「いいですねゲーム」を実施した。前回のバースデーラインによるアイスブレイクよりも、各グループのコミュニケーションははかれていたように感じた。その後、ペーパータワーの説明をし、実際にペーパータワーの活動をスタートした。この活動に関しても、前回からテープの使用を可能にしたこともあり、活動のスタートからすべてのグループがペーパータワーの作成に取り組んでいた。最後に、なぜペーパータワーを行ったのか、その目的や活動のポイントを解説して模擬授業を終えた。



▲体験入学の様子

5.中学校への訪問

5－（i）訪問内容

[1回目訪問]

日時：2024年6月6日（木）～6月28日（金）

場所：中主中、守山中、守山南中、栗東西中、明富中、守山北中、新堂中

○訪問を終えてのまとめ

- ・座学だけでなく実体験をしたい生徒が各中学校に一定数いる。
- ・いわゆる特進クラスというわけではないのか。
- ・1クラス40名の倍率がどうなるか、読めない。その面は指導がしにくいのか。
- ・コミュニケーション力をどのように育てるのか。
- ・企業や市との連携はすごくPRポイントで売り。
- ・ソーシャルスキルのトレーニングができることがホットワード。
- ・少し高校卒業後の進路先のイメージが明確ではないように思う。
(中学教員がイメージしにくかった)
- ・新学科に興味を持った生徒は多い。それが体験入学の人数につながっている。

[2回目訪問]

日時：2024年10月10日（月）～10月21日（月）

場所：中主中、守山中、守山南中、明富中、守山北中

○訪問を終えてのまとめ

- ・広報戦略には一定の成果あり
(タブロイドや説明会実施等→体験入学の参加者数増加)
- ・プレゼンの中身や伝え方のブラッシュアップが必要
(中学生やその保護者に向けた内容)
わかりやすさ、新学科イメージ、何を学ぶのか、何が身につくのか、出口はどうなるか
- ・中学校の先生方への理解が浸透していない・・・広報の時期や方法を再検討
→ 近隣5中学校のなかでも、本校への理解度に差がある
- ・実際の新学科の生徒が入ってきたときに、生徒を主体とした広報への切り替え

5—(ii) Q&Aの策定

上記の中学校への訪問を踏まえて、本校の取組や広報への理解度に差があることがわかった。そのため、HP上に「Q&A」を掲載するとともに、HP更新の案内を中学校側に案内を行った。HPには毎日100回以上(12月時点)のアクセスがあり、一定の効果が期待できるものと考えている。

今年度の課題と次年度の計画への反映方針

1.ビジョンの共有

様々な取り組みや広報活動を行ってきたが、重要なことは学校内の教職員の意識ではないだろうか。一部の係や探究の担当者のみが取り組むだけでは、学校全体としての魅力にはつながらない。教員が同じ方向を向き、どのような生徒を育てたいのか、その部分を基盤にしながら、来年度の取組へとつなげていきたい。その一つの指標になるよう、職員研修をもとに作成した青写真を来年度以降も全教職員で共有していきたい。

▽もりきた2028青写真

滋賀県立守山北高等学校 学校改革プラン



2.学校内の意識とスキル向上

2—(i) 教員側のスキル向上

探究的な学びを進めるにあたって、教員のスキル向上は不可欠である。学期に1回程度、探究に関する研修を実施するだけでなく、校内の公開授業等も活用し、学校全体で探究に取り組む環境を整えていきたい。また、職員会議も活用して、生徒の変容や外部講師等の生の声などもスピード感をもって共有することを継続して行っていきたい。

2— (ii) 試行錯誤を楽しむ風土づくり

学校全体で試行錯誤を楽しむ雰囲気が大切である。本校生徒の特徴の一つとして、失敗したくない思いが強いように感じる。普段の授業においても、誤答を恐れ、発言しない様子やグループ学習に取り組まないことも多々ある。これは、教員側にも課題があるのではないかと感じている。失敗OKの風土づくりと、生徒と共に教員も探究している姿勢を見せていけるようにする必要がある。探究的な学びにおいては、いわゆる「指導者」としてではなく、「伴走者」としてのスキル向上が求められている。そのために、(i)で先述したような研修会や公開授業などの既存の仕組みを有効活用しながら、教員同士の活発な「語り」の場を準備することも必要になっていると感じている。

3. 広報戦略

3— (i) 学校案内のリニューアル

これまで本校の広報媒体として、重要な役割を果たしてきたのが、「学校案内」であった。ただ、新学科用のタブロイド紙やHPなどの更新によりその存在価値が問われるようになった。しかし、タブロイド紙は新学科に特化したものであり、またその予算も本事業によるところが大きかった。そのため、事業終了後も継続した取組になるよう、これまでの「学校案内」と新学科のタブロイドを融合させた新たな学校案内を作成したいと考え、12月ごろから取り組んでいる。来年度の6月に地域や県内の中学校に配布できるよう計画立てて取り組んでいきたい。



▲既存の学校案内

3— (ii) 広報媒体の切り替え

来年度は、新学科の生徒が入学するため、生徒の生の声を地域や中学校側に伝えることができる。生徒の授業の様子を説明するだけでなく、自身の成長や変化も含ませながら、各中学校への説明会や体験入学の準備を進めていきたいと考えている。

3— (iii) SNS の活用

今後の課題として、継続的な情報発信が挙げられる。限られた予算の中で、毎回新しいデザインのパンフレットを制作するのではなく、SNS を活用した日常的な情報発信が重要となる。新学科での生徒の活動や成果をこまめに伝えることで、学校の魅力を高め地域社会とのつながりを深めることが期待される。タブロイドという形で効果的に発信したことが、学校の新たな魅力を伝える成功要因であったことは間違いがないが、今後は SNS を活用した持続的

な情報発信を通じ、本校が地域社会と連携しながら持続可能な形で発展することが期待される。

3— (iv) 計画の実践と成果の検証

今年度は昨年度の計画に基づいて行ってきたが、それぞれの授業や施策等がどのような効果があったのか、評価していく必要がある。特に「育成したい力に対して、生徒の力がついたのか」、「学校全体の魅力化の部分での志望動向の変化」、「新しい普通科としての答え」については、今後も検証の必要性があると感じている。計画立てて実践するだけでなく、その後の成果の検証もあわせて行っていきたいと考えている。

▼R 5年度の課題（R 5年度報告書より抜粋）と進捗状況

- ・各種会議の在り方を検討
→ 運営協議会において、生徒を交えた意見交流会を実施。
- ・広報活動の計画
→ 計画に基づいて中学校への訪問や、進路・学年担当者へのヒアリングも実施。

■管理機関

管理機関として、守山市教育委員会には、守山北高等学校では新学科「みらい共創科」のカリキュラム研究や先行授業等を行っていること、県教育委員会主催の新学科説明会を開催すること等を説明した。あわせて、令和7年度設置予定であることから、特に現中学3年生を対象に市内中学校等への周知や、必要に応じて県教育委員会や守山北高等学校から中学校長会進路指導主事会に出向いて新学科の説明をさせていただくこと等をお願いした。

新学科「みらい共創科」の設置は令和7年度であるため、本格的な広報活動を令和6年度より実施した。管理機関においては、県教育委員会のホームページはもちろん、保護者向け情報誌「教育しが」や、県立高等学校の魅力や特色を知っていただくための「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行った。また、令和6年12月には、中学3年生向けに新学科に関する広報チラシを作成し、県内中学校を中心に周知活動を行った。

令和7年度においても、守山市を中心とした中学生・保護者・学校関係者を対象とした「学校説明会」を県教育委員会が主催して、新学科について説明を行うことを予定している。学校は夏季休業期間を活用して中学生や保護者に向けたオープンスクールを実施し、新たな学科の設置について魅力発信していく。

令和7年1月に実施した中学校等卒業予定者の進路志望調査では、守山北高等学校への志望者数は全体としてはやや増加し、みらい共創科は23人の志望があった。守山市内4中学校やそれ以外の中学校から守山北高等学校への志望者数の変化等を分析し、新学科の地域への広報や魅力づくりについて守山市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和7年度以降の周知活動に努める。

課題・次年度計画への反映方針

守山北高等学校での新学科設置に向けた検討状況は、守山市教育委員会や県議会等に適宜説明してきた。令和7年4月には新学科の1期生が入学し、「みらい共創科」の学びが始まる。より具体的な学びの内容や卒業後の進路について周知を行っていく必要がある。

令和7年度は、県教育委員会のホームページはもちろん、保護者向け情報誌「教育しが」や、県立高等学校の魅力や特色を知っていただくための「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」等を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行いたいと考えている。また、守山市広報にも掲載をいただくとともに、地域密着型生活情報誌に高等学校教育改革の特集の掲載を依頼していきたいと考えている。さらに、守山市内4中学校やそれ以外の中学校から守山北高等学校への志望

者数の変化等を分析し、新学科の地域への広報や魅力づくりについて守山市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和7年度以降の周知活動に努める。

(8) 管理機関における事業全体の成果検証、評価

令和4年度末に公表した「魅力化プラン」の中で、本県の普通科高等学校29校のうち地域連携重点により魅力化を図ることを推進する13校で、「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和5年度から開催することとした。初回は令和6年1月23日に開催し、連絡会議の場で守山北高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、普通科改革の推進のための必要条件を探る中で事業全体の成果検証を行った。連絡会議は隔年で開催することを予定しており、令和7年度も引き続き開催する。

あわせて、年3回の運営指導委員会によって事業の進捗状況や成果を確認し、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てた。運営指導委員会では、学校が求めるカリキュラム検討や学校全体のリニューアル、コンソーシアム構築等における大切な視点について、多くの指導・助言をいただいた。運営指導委員の専門的な立場からの様々な指導・助言は、学校としても貴重であり、令和7年度も引き続き、年3回は運営指導委員会を開催していく。

今年度、守山北高校のコーディネーターは主に教員のサポート役に徹するような形で取組を行っていただいた。カリキュラムの検討や実際の授業運営における教材の提供や開発、学校改革の重要な柱の一つである広報に関わるデザイン等、令和7年度設置に向けた準備を進めた。

課題・次年度計画への反映方針

運営指導委員会や令和5年度の「地域連携重点魅力化連絡会議」の場で、取組の成果について検証・評価いただけてきた。一方、運営指導委員会については、学校と十分打ち合わせの時間を取れないこともあり、今後学校が求める指導・助言等を、より十分いただけるように準備を進める必要がある。

令和7年度に開催する、「地域連携重点魅力化連絡会議」では、守山北高校の取組内容および諸課題を共有することで改善点等を把握するとともに、県内地域連携重点校における魅力化の取組推進につなげる。また、運営指導委員会の開催にあたっては、新学科および学校全体の状況等をしっかり確認しながら進めていく。加えて「守山北高等学校研究成果報告会」や、その他成果発表会等の機会を活用して成果検証評価を行い、以後の事業運営に役立てる。学校における取組状況やコンソーシアムの管理運営について情報を共有しつつ、管理機関として、適宜、校内検討会議や新学科の授業等に参加しながら事業管理を行う。

(9) 管理機関による支援体制

守山北高等学校の新学科「みらい共創科」は、地域でのフィールドワークやインターンシップを軸にした探究活動と、グループワークやディスカッション、プレゼンテーションを行う活動を中心に、企業や大学、地域等とつながった学びを展開する。また、遠隔で企業や大学、地域等の外部専門家から指導助言等を受けたり、他校生徒との意見交流等を行う学びに取り組んだりすることを考えており、これらの学びができる教室や備品等を整備する。

教室や備品等については、令和6年度に学校の施設改修費や県事業「普通科改革推進事業」において整備を行った。令和7年度も引き続き「普通科改革推進事業」において予算化を図っている。

守山北高校では、教職員研修等を通して教職員の探究学習のスキル向上を図る必要がある。あわせて、令和8年度から実施するインターンシップに向けた体制作りを、引き続き行うとともに、コンソーシアムの指導により事業終了後もその体制の継続・充足を図っていく必要がある。管理機関として、これらの学校の取組を支援していく。

(10) 成果普及のための取組

■守山北高等学校

守山北高等学校は、オープンスクールを年2回実施したり、学校のホームページに様々な活動を掲載し情報を発信したり、守山市の広報（令和6年4月発行）を活用したりするなど、地域住民や地元中学校などに向け情報発信を行った。

また、「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高等学校（13校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和6年1月23日に開催し、各高等学校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認した。この連絡会議の場で、守山北高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、グループ別の意見交換を通して、地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及を図った。なお、連絡会議は隔年開催することとしており、今回は令和7年度に開催する。

3月19日には守山市民ホールで「守山北高等学校研究成果報告会」を開催し、今年度の教育活動等の報告を行い、守山北高等学校の新学科について、地域の行政機関、中学校等に向けてメッセージを発信した。

課題・次年度計画への反映方針

今年度は、生徒による成果発表会を兼ねた学校説明会を実施した。令和7年度も引き続き、連携・協働した授業から成果発表に関する評価・助言までを一連の流れとしてプログラム化し、カリキュラム等のブラッシュアップを図ることを考えている。

また、令和5年度から実施している「高校生による【しが】学びの祭典」は、各校で実践した探究的な学びの取組やその成果について発表し、探究的な学びを全県に普及するとともに、同世代の高校生の課題研究の発表を聴くことで、生徒の学問的探究心を養うことを目的としている。令和6年度同様、令和7年度も「学びの祭典」において、アントレプレナーシップに関わる研究成果の事例発表を行い、新学科設置を県内の中学生等に応用していく。

■管理機関

「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高等学校（13校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和6年1月23日に開催し、各高等学校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認した。この連絡会議の場で、守山北高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、グループ別の意見交換を通して、地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及を図った。連絡会議は隔年開催することとしており、今回は令和7年度に開催する。

課題・次年度計画への反映方針

昨年度実施した「地域連携重点魅力化連絡会議」では、本事業の指定を受けた学校の取組状況等を発表していただくことで、本事業の効果的な実施と、各校での地域連携の取組や地域社会に関する学科の検討の一層の推進を図った。地域連携の取組を進めるには、コーディネーターの配置や教職員の負担軽減等、予算・人員配置が焦点になりがちだが、令和7年度開催時には、それ以外のところでも県教育委員会として各校の取組を支援する方策を考えたい。

また、守山北高等学校が行うオープンスクールとは別に、県教育委員会として、守山市を中心に中学生・保護者・学校関係者を対象とした「学校説明会」を主催する。令和7年度は新学科の生徒も参加した説明会とする等、出席者にとって訴求力の高いものになるよう工夫する。

(11) 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組

■管理機関

- ・国の指定終了後も「地域連携重点魅力化連絡会議」を運用し、関係機関、特に、市町まちづくり主管課と連携を強化したうえで、事業の自走化を図り、「魅力化プラン」の推進に、構築したシステムの普及啓発を行う。
- ・指定終了後もコーディネーターの継続的雇用の必要性があることが想定され、管理機関である県教育委員会は守山市と事業指定3年間に協議を重ねる。その際、クラウドファンディングやふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得について、研究を継続し知見を共有する。また、県教育委員会事務局生涯学習課の令和6～8年度県事業「県立学校地域協働モデル事業」では、モデル的に県立学校に地域コーディネーターを配置し、学校運営協議会と連携しながら地域学校協働活動を推進し、モデル校での取組を検証・事例として活用することにより、県域への普及を目指すこととしており、この事業推進に協力していく。
- ・「地域連携重点魅力化連絡会議」を継続して実施することで、「基本方針」に基づき作成した「魅力化プラン」の事業成果の検証を行う。
- ・令和3年度から令和5年度にかけて、彦根工業高等学校においてマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を実施した。この事業で培った知的財産を継承するため、令和6～8年度県事業「シン・マイスター・ハイスクール～地域創生への挑戦～」において予算を確保し、彦根工業高等学校が地域の産業界や彦根市との共創により、地域を活性化させ、自律的で持続的な未来社会を創生できる産業人材を継続的に排出する持続可能な人材育成プログラムを構築することとしている。あわせて、彦根市や彦根地域の企業等から費用も含めた支援を受けながら、長期間を見据えた持続可能な人材育成システムの構築に向けて取組を進めている。同様に、本事業においても、「みらい共創科」の学びの継続・充実のための予算確保や、守山市や地域の企業等から費用も含めた支援も含め検討していく。
- ・守山北高等学校が自走していけるよう必要な支援やコンソーシアムを継続する。

■守山北高等学校・守山市

今年度の成果

1. 「MORIKITA BASE」

本校では探究学習の専用ルームとして、教職員の会議用スペースを、「MORIKITA BASE」として整備している。「MOMOBO」と呼ばれる自立移動式のモニターや、大型スクリーンなども設置し、いつでも外部とつながれる環境を整備している。これにより、時間的・距離的な制約のある外部企業や団体等とも授業内で連携することができ、指定事業終了後においても、地域協働の取組が推進できる。また、生徒の成果発表の場としても活用できることが期待される。



▲MOMOBO



▲大判プリンター



▲大型ホワイトボード

2.協力体制の構築

指定事業終了後を見越し、これまである種、単発的に行ってきた講演会や特別授業をいかに継続性のあるものにできるかが課題である。前述したようなコンソーシアムがいかに機動力のある、持続可能な取組になるかが大きな課題である。

今年度の課題と次年度の計画への反映方針

1.「MORIKITA BASE」

グループワーク等も行える専用ルームであるが、現在は移動しにくいパイプ椅子と長机が設置されており、生徒の自由で創造的な学びが促進しにくい環境である。限られた予算の中ではあるが、可動式の椅子や机、カーペットなどの環境整備が必要不可欠である。

2.人員配置

教材研究、部活動の指導、生徒対応等、日々の多忙な業務におわれる中で、新たな取組をさらに継続して進めるには、人員配置の問題を再考しなければならない。前述したような学校内の組織体制を再編成するのは限界があり、外部との協働という特徴のあるカリキュラムである以上、教員数の加配は必要であると切に感じる。

(12) 他の事業との関係

県内における中学生の生徒数減少にともない県立高等学校の小規模化が見込まれることから、令和4年度から県予算において独自に普通科の高等学校を対象とした「県立高等学校魅力化推進事業」を実施している。この取組では、地域の企業や大学、自治体等との調整を行うなど学校と地域をつなぐコーディネートの必要性や、ICTを活用した、専門機関との遠隔授業の導入に向けた研究に取り組んだ。地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置による普通科の魅力化を進めるにあたり、コーディネーター人材は欠かせないものとなっている。

第3章 研究開発の内容

3-1 運営指導委員会

■第1回運営指導委員会

<会議の日時等>

開催日時 令和6年7月23日(火) 9:50~11:30 (守山北高等学校 校長室)

出席者 【運営指導委員】

大野裕己委員 柏木智子委員 森中高史委員

【滋賀県立守山北高等学校 みらい共創推進室】

杉原真也校長 林敬治事務長 高田法悟教諭

上田隼也コーディネーター 田口真太郎コーディネーター

内 容 (1) 「普通科改革支援事業」の取組状況について
(2) 事業に関する指導助言等

○「先行授業」・「広報活動」・「ルーブリック」等について

○資料説明(高田教諭、杉原校長、上田コーディネーター)

<主な意見>

- ・学校設定教科の「みらい共創」は、総合的な探究の時間「もりきた学」で学んだことをさらに当事者として参画する時間が多いという点で差別化できる。学校全体として「もりきた学」に取り組むが、さらに深く学びたい場合は「みらい共創」という流れになるかと思う。
- ・評価については、きちんとその生徒なりに参加していればよいと思うが、この手の学びの評価は難しい。減点評価でなく加点評価として子どものやる気、自己肯定感を伸ばす方法を考えた方がよいのではないか。
- ・守山北高校は地域と一緒に様々な活動を行っているところが強みになる。市でも色々な活動を紹介できると思う。みらい共創科入学生が2年生になる再来年あたりからは、生徒もより深く地域や企業に入っていくことになる。生徒がやりたいこと、生徒にやらせたいことをお伝えいただければ、市としても紹介できると思う。
- ・守山北高校の半数くらいは市内の中学校から来ているため、中学校との連携も考えていかないともったいないと感じた。
- ・生徒が学んだ成果や感じたこと、思いを整理することや、高校で初めて学んでモチベーションが上がる内容、中学校とのつながりをよくすることで、より良く学べる内容を確認することができる。加えて、地域の教材を用いて教科横断的な指導ができるのかどうか。このあたりのイメージも高めていけるとよい。
- ・「もりきた学」と「みらい共創」の分け方もそうだが、ヨコでつなげて学んで生徒のモチベーションを高める、またタテにつなげて中学校との関連性をうまく取ることで、生徒のより良い育ちを支援する。こういったことを整理いただければと思う。学習後には生徒が達成できた成果や思いも負担にならない程度に記録化されているとよいと思う。
- ・本校は高校3年間で進路を考えることができる学校ということでPRしているが、例えば進学を考えている生徒であれば大学等を、保育士を考えている生徒は保育園とつなぐことを考えている。守山市内の企業に加え、大学や保育施設、福祉施設等もつながりを持ちたい。今年度はコーディネーターにより仲介いただき、ヒアリングを行ってきた。結果的にはほぼ全てから受け入れ可能と前向きな回答が得られたため、カリキュラムの中に入れたという流れである。
- ・中高連携により、かつてのように地元の中学校から高校へという流れをつくっていく。加えて、市外から電車を利用して通学する生徒には、駅からの距離を逆手にとって、例えば

電動キックボードを利用できるよう「みらい共創」の中で安全なルートを市と一緒に探してみるなどしてもよいかもしれない。

- ・「もりきた学」は総合的な探究の時間であり、全員が学べること、守山北高校は「普通科」と「みらい共創科」が共存しており、シナジーが活かせるということ。守山北高校に来たらこんな学びができるといったアピールができるといいと思う。
- ・「もりきた学」を学校全員で取り組むなら、アウトプットされるものやその機会を通して、生徒はこういう体験を享受できる、この体験そのものはその先の進路で生きるポイントになる、さらにこれは学校全体で育つというアピールの仕方がどこかで必要になってくると思う。
- ・居心地の良い学校にするために何ができるかということを生徒自身で考えてスクールデザインしてもよいのではないか。データ等をとって課題を発見し、それから整理分析して何ができるか考えて交渉し、実際にスクールデザインしてみる。そこでもう一度課題を見つけるといったことが探究であり、社会でもそういった力が求められていると思う。
- ・ループリックをもう一度見直すことで生徒に伸ばしてもらいたい力が分かってくると思う。それぞれに対してどういうカリキュラムや実践が必要かという点を体系立てて考えることが大事。授業、単元ごとに要素を焦点化したり、生徒と一緒に考えたりするなど、学校を共に作っていく相手として生徒を位置付けてもよい。
- ・学校教育目標にある「人を想う心」が一番上なのであれば、そのようなループリックを作る。また、色んな自分であってよい「多様性を尊重」というところをループリックでどう反映していくかということも焦点になる。
- ・ループリックについて、2学期に職員研修を兼ねて作り直しを考えている。次回の運営指導委員会では中心議題のような形でお示ししたいので、アドバイスをお願いしたい。

「予算」・「コンソーシアム」について

<主な意見>

- ・コンソーシアムは学校を支援いただく応援団的イメージで、令和7年度の段階で立ち上げている想定。理事会とは別に分科会を置き、2年生の段階でインターンシップを実施するため、御協力いただける企業は分科会の中に入ってもらうのがよいと考えている。
- ・令和8年度以降はコーディネーターの費用をどういう形で考えるかということは必要。コンソーシアムをある程度形作って持続可能なものができていくとコーディネーターの費用も少し抑えることができるかもしれない。コンソーシアムの結成と連動すると思われる。
- ・コンソーシアムがしっかり機能していけばコーディネート機能そのものは一定担えるのではないかと。生徒の学びなどある種外側からの支援が必要になるところがあることを考えると、コーディネーターの必要性は残ると思う。今後何が必要かということを考えていく必要がある。

■第2回運営指導委員会

<会議の日時等>

開催日時 令和6年11月20日(水) 10:00~11:35 (守山北高等学校 大会議室)

出席者 【運営指導委員】

大野裕己委員 桶土井雅章委員 根木山恒平委員 森中高史委員

【滋賀県立守山北高等学校】

杉原真也校長 柳垣弘樹教頭 林敬治事務長 富高靖二教諭 高田法悟教諭

上田隼也コーディネーター

内 容 (1) 「普通科改革支援事業」の取組状況について

(2) 事業に関する指導助言等

○もりきた学、教科「みらい共創」と進路指導計画の全体像、シラバス等について

○資料説明(高田教諭)

<主な意見>

- ・中学校には守山北高校みらい共創科をよく理解いただき、進学行動につなげてもらいたいという思いを強くしている。
- ・コンセプトマップは学校として頑張っておられることが整理され、キーワードとして「見つける、試す、深める」があり、特に「試す」が大事なことで示してあるのは、よく頑張っておられるなと思うところ。
- ・新学科のため共通理解に至っていないところもあるが、アウトカムに当たる「ここで何が身に付くか」を知らせるとよいと思う。学びのコンセプトとそれが何につながるか、またそれが期待されるものであるということが示されるとよいのではないか。
- ・我々が資料をつくる際、「現状」の次にこれから目指す内容を「目標」と書く代わりに「ゴール」という表現をよく使う。みらい共創科に入学した生徒の3年後の姿をゴールとして表現するとイメージしやすいのではないか。
- ・中学校を回っていただいているが、中学校の教員から掴めるものと、生徒や保護者から掴めるものにはギャップがあるのではないか。そのあたりは慎重にとらえていくべきと思う。
- ・体験入学のアンケート結果より、保護者からは、探究の時間が多く、入学後子どもに頑張ってほしいという思いがある一方、生徒にはそこまでインセンティブがなかったのかなと感じた。中学生や保護者から直接話を聞く機会はないので、中学校の先生方との丁寧なやり取りの中で思いを掴んでいきたい。
- ・地元中学校の先生方との懇談の中で、夏の体験入学は何をするのだろうという期待感などから多くの中学生が参加したが、イメージとしては総合学科や他の普通科との違いが明確でなかったということ、新学科を卒業するとどんな力が付くのか、どんな進学・就職ができるのか具体的ところが十分示せていなかったことも分かってきた。10月には本校に志望者数の多い中学校に訪問し、こういった部分を先生方に説明させていただいた。
- ・在籍生徒の言葉はこれから入ってくる生徒に対しても一定の訴求力はあるかと思う。他県で普通科の改革プロジェクトを行った際も、広報の中で生徒の言葉は生徒募集に一定の効果が あったと思われる事例があった。これまでも努力いただいているが、生徒に発信させることでの訴求力、どういう言葉が誰に通じるか、そこを応用されてみるのも一つではないかと思う。

○評価（ルーブリック）について

○資料説明（高田教諭）

- ・よく思案され練り上げられたルーブリックという印象を持っている。各レベルでどのあたりを目指すのか統一する努力や、そのあたりの言葉の整理の努力があったと思う。
- ・レベル3と4の間はいろんな工夫の余地はあるかと思う。3から4は、質的変容みたいなことがあるのか、あるいは何かが追加されるのか、子どもが見るときに、3と4の間でどちらも当てはまるということも出てきそう。レベル4は何が追加されているとか質的に変わるのであれば、それを見せてもいいのかと思う。生徒が先に進みたいと思ったり、少し上を目指したりするのであれば、レベル4はレベル3に付加価値が一つずつ付いているという点でそろえてある方が、使いやすいのではないかと思う。
- ・到達点が分かってよいと思うが、生徒に渡すのであれば、一部もう少しイメージしやすい言葉にすることで、更に有効なものになるのではないか。

○コンソーシアムの進捗状況、7月以降の取組状況、今後の予定等について

○資料説明（杉原校長、林事務長、柳垣教頭、高田教諭）

- ・もりきたベースについて、生徒の学びのプロセスを可視化できて、お互いに見合ったりコメントができたという動線は大事にしてほしい。大学ではラーニングコモンズのような空間をガラス張りにして切磋琢磨している様子が分かるようにしている。もりきたベースでも学びの途中経過や成果を見せ合えることができたり、フィードバックを得ながら高めていけたりといったことが、この空間のどこかで保障してあげられるよう工夫いただけるとよい。
- ・難しいかもしれないが、もりきたベースは学校らしくないスペースを目指してほしい。例えば、緩衝マットのようなものを敷いて寝転がれるようなスペースがあるといったイメージ。日本の学校はきっちり椅子に座らないといけないという部分もあるが、自由な雰囲気です授業が受けられるスペースがあってもよいのではと思う。そういったことを高校生に考えてもらうのもありかもしれない。
- ・今年度、市の関係では、アントレクレストや市民ホールのワークショップなど、守山北高校から参加いただき、若い方のアイデアなどいただいた。こういった関係は来年度以降も継続したい。
- ・フィールドワーク先では良い経験ができると思うし、来年度に向けていろんな方と連携しながら取り組んでいきたい。市としても一緒になってできることはあると思うので、気軽に相談いただきたい。
- ・フィールドワーク先は素晴らしいところがたくさん並んでいる。将来地域で生き生きと働く姿が見えるような守山北らしさにつながる一歩が踏み出せると思う。エッセンシャルな仕事はこれからも無くならないので、そこにいかに良い人材を送り込んでいくかという点で、先生方にはお願いしたい。
- ・地域の事業者からすれば高校生と出会える機会というのは将来の就業者を獲得するチャンスでもある。今後コンソーシアムが軌道に乗れば、そういったニーズも高まってくるのではないか。
- ・ある中学校からは、特進を作られたのかとの質問もあった、我々が目指しているところと、中学校側の受け取りが異なるところもあり、そのあたりを修正していく必要がある。
- ・1年目は大切な時期であり、トップギアで取り組んで欲しい。当然いろんなことが起きると思うが、そこは試行錯誤して柔軟に対応していけばよいのではないか。
- ・倍率は競うものではないにしろ、イメージもあるしたくさんの方々に志望してもらえるのがベストではある。ターゲットを考えた時に、フィールドワークや地域に入っていくとい

ったことを強調しすぎると、生徒によってはハードルが高くなってしまうことも考えられる。どこを前面に出すか難しいが、学校に行きやすい雰囲気も1つのPRポイントになると思われる。

■第3回運営指導委員会

<会議の日時等>

開催日時 令和7年3月19日（水）13：30～15：00（守山市民ホール 学習室1）

出席者 【運営指導委員】

大野裕己委員 桶土井雅章委員 根木山恒平委員

【滋賀県立守山北高等学校】

杉原真也校長 柳垣弘樹教頭 林敬治事務長 富高靖二教諭 高田法悟教諭

山崎仁嗣教諭

上田隼也コーディネーター

内 容 （1）「普通科改革支援事業」の取組状況について
（2）事業に関する指導助言等

○今年度の取組成果について

○成果発表（守山北高校生徒）

- ・「もりやまいちスマイルプロジェクト」（生徒会執行部）
- ・「メリハリと継続」（1年生）
- ・「保育業界の現状と課題」（2年生）
- ・「ケーキの膨らみに差が出るのはなぜか」（3年生）

○資料説明（高田教諭）

<主な意見>

- ・研究成果発表会は、温かく素晴らしい場であった。こういう場を継続的に持たれると、地域にとっても良いことだと感じた。一方で地域の方にとって、関わるのであればこんなメリットが欲しいといったところを把握した上で、学校でどこまでできるのかが今後の検討課題としてあると思う。
- ・今回はファーストケースだから新鮮で楽しいと思うが、これが2年3年と続くと、徒労感が出てくる可能性もあるし、この程度のことであれば毎年続けられるとなるかもしれない。こういったことを把握していくことが、お互いにとって大事なのではないかと思う。
- ・これまで学校側にとっては未知の部分が多かったと思うが、今年はそれを形として具現化されたところは非常に尊かったと思う。また守山北高校が変わっていくという地域の期待値を引き出せたところは大きな成果だったと思う。広報にあたっても、こういった期待値が存在することを外に発信されると良いと思う。私たちの研究分野では、方針があることや生徒の力が変わったということも広報の内容としてあると良いと言われている。こういった情報は保護者等にも伝わるが、これが学校の満足度を高めるというデータもある。そういう情報を外側に示されるといいのかと思う。
- ・本日の発表の中で、つなげるという要素について検証していただきたい。大きく2つあって、1つは生徒がつなげるという部分。本日、生徒の発表が終わった後に学校からも問いかけがあったのは、自分の中で具体的にどう落とし込むかというところを投げかけられていたと思う。発表としてはよくできていたが、そこはもう一つ出てくればというところ。そうすると2年生以降に繋がると思う。来年度のカリキュラムではこの辺りで、学習経験

として次につげるというところを丁寧にフィードバックしながら次に生かしていただきたい。

- ・2点目は先生方がつなげる。系統化という話があったが、生徒の学習経験を大事にする立場で、3年間でどう育てるか、簡単にはいかないが、多くの先生がそういった学習経験を理解して、全ての授業とはいかないまでも、3年間の授業のどこかではこの授業とつながっているということを見い出す。この辺りを学校の中で大事にさせていただくと生徒さんによっては自己効力感につながっていくこともあるのではないかな。
- ・生徒同士でつなげるという要素もあるかと思う。こういった発表会もお互いの成果を共有していく中で、生徒が互いの振り返りの場として今日をつなぐようなところで、創発的な会の持ち方もあるのではないかなとも思った。今後先生方がそういうことをやってみたいと思われたら、進展させていくとよいのではないかな。
- ・つなげるという要素で、生徒の学習経験をつなげる、先生方の縦横、学びのデザインをつなげる、そして生徒同士をつなぐ。こういったことが見えてきたのが本日の発表であった。
- ・生徒のプレゼンテーマは、命題的になっているもの、素材がそのまま上がっているもの等様々なタイプがあった。発表の組み立てはどうだったか、この問を立てたらこんな風に最後終わると良かった等、生徒と振り返るとプレゼンの力も高まるのではないかな。テーマから入ってみても振り返りのよい教材になるのではないかなということも思った。
- ・2年間守山北高校に関係させていただき、改革のご苦勞を感じた。
4月からいよいよ第1期生がスタートする。期待していることは、入学した生徒が、「みらい共創科」に来て良かったという思いを持ってもらうこと、そしてそれが伝播していくことである。みらい共創科に行くといろいろなことにチャレンジできる機会があって、来て良かったとぜひ感じてもらいたい。
- ・持続可能性に向けた体制づくりも大切だと思う。チャレンジはするけれど、一発花火みたいに1回だけ良ければいいではなく、先を見据えた中長期的な視点で考えていただきたい。まずは身の丈で始めて、それを2年目、3年目でも継続し発展させていくことが大切である。
- ・体制という面では、担当されてきた先生が異動されてしまった場合どうなるか。組織を持続させようと思ったら、非効率な面もあるかもしれないが、次の体制も考えながらバックアップ体制やその後任者をどう育てていくか等についても考えていかないといけない。一気にではなく、少しずつでも着実に良くなっていくイメージで取り組んでいただきたい。
- ・地域と学校の連携は色々難しい問題もあると思う。地域の方々は本日の発表を見て、生徒や先生が一生懸命なことを理解してもらえたと思う。一生懸命取り組んでいる人には人がついてきてくれて、協力しようとなる。一方で、作業として取り組んでいたり、深く考えず同じことの繰り返しと伝わってしまうと人は離れていってしまう。繰り返しになるが、地道に一生懸命やっていくことが長い目で見たら最後は勝ちになるのではないかな。
- ・1年目のすごく大切な時期に早くから志望し、希望を持って入ってくる生徒がいる。非常に嬉しい話であり、4月以降、大切に育ててあげて欲しい。
- ・かつて、フィールドワークで各方面の企業の方にお世話になっていた際に言われたのは、時間は企業にとってとても大事なものであること。学校側としては生徒の学びにつながるという部分で、ご協力いただきたいと言っていたが、持続可能な部分で言うと、委員にご指摘いただいたことを注意していかないといけないと思った。
- ・つなげるという部分について、普通教科の中でカリキュラムマネジメントをしながら、この地域連携の部分をどうつなげていくのかを、単発にならないようやっていくのが、令和7年度の主課題かと思っている。みらい共創や総合的な探究の時間のカリキュラムやシラ

バスが出来上がってきた中で、あとは改良の部分。さらに守山北高校全体としてブラッシュアップしていく、新しい守山北高校にしていくというコンセプトで言うと、普通教科でいかに地域との連携に取り組んでいくかというのは令和7年度にまた研究したいと思うところ。

- ・学校の組織的な部分については、次の年度の校務分掌の体制を作っていく際には意識していく必要がある。また、令和8年度以降、文科省の事業予算が切れてくるため、県の方でも支援をいただかないと中々難しいと思うところ。本日は委員の皆様から、研究等様々なことに向けて来年度の課題をいただいたと思っている。

コンソーシアムについて

○説明・報告（杉原校長）

- ・コンソーシアムの第1回理事会を令和7年度の4月または5月に開催して体制を固めていきたい。新学科の推進体制としては、事業を継続させていくため、委員の皆様には運営指導委員会への御出席をお願いしたい。また別に学校運営協議会も組織している。学校としては地域の皆様の声をお聞きしたいと思っている。みらい共創科と普通科の支援体制として、守山商工会議所や青年会議所、守山市、教育委員会、また、高大連携の協定を結んだびわこ成蹊スポーツ大学等と共にコンソーシアム理事会を作って取り組んでいきたい。
- ・令和8年度はインターンシップにほぼ全員が行くことになる。インターンシップや高大連携はコンソーシアムの中でご協力いただいた企業や大学に中心となっていただくことになり、翌年度を見越して議論していきたい。

令和7年度入学者選抜の状況について

○説明・報告（柳垣教頭）

- ・一般選抜の学校出願において、みらい共創科と普通科の両方を希望して出願した生徒には、みらい共創科に来て良かったと思ってもらえるよう、来年度から頑張っていきたい。今まで2年間、新学科ができるということで我々教員が必死で広報活動してきた、来年はこのみらい共創科に来た生徒が広報マンになってもらい、生徒たちにもPRしてもらえたらと思っている。

3-2 教科主任会議

I. 第1回教科主任会議

開催日時 令和6年5月10日（金）

主な議題 新学科カリキュラム検討について

<主な意見>

○みらい共創科と普通科との連動性について

- ・「日本史」「生物」「物理」の1単位増は良いと思う。
- ・どの科目でもみらい共創科と普通科で単位数が異なるのはやりにくい。
- ・理系は選択者数が少数なので、みらいと普通科で合同授業ができないのは困る。
- ・単位数を無理に合わせる必要があるのか。
- ・理科の5単位はかなり多いように感じる。カリキュラム表全体を見たときに目立つ。
- ・連動性がよくないのは、社会科も同様。単位数の違いや学年またぎの展開もあるが、仕方ない。
- ・旧の案では新学科が普通科よりも少ない。これも問題ではないかと思うが、さらに少ない方に合わせるのはいかがでしょうか。
- 新学科の英語の単位数を1増にする方を考えるべきでは。
- ・普通科の理系科目5単位はかなり多い。希望人数が少なくとも開講するのか、教員はつけるのか、理科の先生は了解しているのか。
- 授業展開を全体で考える。
- ・「コミュニケーション英語Ⅲ」を1単位減らすのではなく、元々多かった。

○みらい共創Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについて

- ・特に反対意見なし

II. 第2回教科主任会議

開催日時 令和6年5月21日（火）

主な議題 新学科カリキュラム検討について

<主な意見>

○みらい共創科と普通科との連動性について

- ・理系の「英語研究」、「数学演習」の全員履修は了承した。
- ・「コミュニケーション英語Ⅲ」は3単位が望ましい。
- ・普通科とみらい共創科の内容が合わせやすく体育の1単位減はよい。
- ・「数学演習」を理系全員履修はできない。生物選択（看護系）は数学Ⅰ・Aのみの学習（数学研究でカバー済み）、5単位になるとかなり厳しい。
- ・みらいと普通科の連動性の必要はあるのか。学科も違い、みらい共創科のカリキュラム案に合わせて普通科のカリキュラムを変える必要があるか。
- ・みらい共創科は31単位（7限）にすべき。
- ・「選択科目」については、2単位×3科目にして、セットものにする方がよい。
- ・「選択科目」については、3単位×2科目のほうがよい。
- ・「英語研究」の内容によって意見が変わる。コミュニケーションと研究の比率が変わるが問題ないか。
- ・選択科目の「国語研究」は2時間連続展開ではなく、バラバラがよい。
- ・「英語研究」の単位数が、理系全員履修と選択科目とで単位数が変わるので、教材・授業・成績等の検討が必要。

○結論

- ・「みらい共創科」のカリキュラムは探究学習に特化したクラスという PR をする。「みらい共創Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を重要視したカリキュラムを昨年度作成したもので、普通科カリキュラムをこの新学科のカリキュラムに合わせていくのは難しい。

3-3 学校運営協議会

■令和7年2月21日（金）実施

出席者 【外部委員】

服部宣彦氏、北脇すみよ氏、田中義規氏、荒川富也氏、津田徹氏、中島義訓氏

【学校関係者】

杉原真也校長、柳垣弘樹教頭、林敬治事務長、富高靖二教諭、高田法悟教諭、林拓矢教諭、野村正樹教諭

内 容 はじめに 校長挨拶

1. コミュニティスクール事業におけるまとめ・総括について
2. 学校評価アンケートについて
3. その他（施設見学含む）

<主な意見>

○地域と共に学べるというは特色。親御さんへの理解がもっと進めばよいが、来年度はどういった取組を考えているのか。

→今年度同様、6月に県主催の新学科の説明会を開催予定。体験入学を8月と11月に実施。さらに6月に中学校に出向いての説明会がある。来年度は新学科の生徒が入学するので、生徒自身が広報PRとなる。また、インスタグラムなどのSNSやHPの更新も図る。今年度の課題としては、各種説明会等には、中学校の管理職が来てくださった。しかし、中学校の学年の先生方にまでは理解を拡げることができなかった。生徒に一番近い担任の先生方にどうやって伝えられるのかが課題。

○様々な取組が楽しそうだけで終わってしまう。親目線では、自分の子どもにどうやってマッチするのかを考える。手を広げすぎて焦点が絞りづらくなっているのでは。わかりやすいキャッチフレーズがやはりほしい。キーワードは“経験値”か。

○高校生に求めるのは、やはり社会で生きていく力。例えば電話対応などできない子が非常に多い。新学科の社会で“試す”というのはすごく大切。行政なり地元企業なり、関係者を巻き込んでいく必要がある。また、多様な進路先も北高の大きな武器。学年すべて「みらい共創科」でよい。

○「みらい共創科で〇〇の力が身につく」をはっきりと、さらにそれを生徒が実感していないと意味がない。何度も言っているが、最後は出口の保証が一番。

○あまり先を見すぎて小さくまとまらないように。それでは普通科の探究と変わらなくなってしまう。大人が見ていてもハラハラしてしまうくらい生徒には挑戦させてほしい。そしてその学びを学校外へもっと発信していく。学校の先生だけでは限界があるので、そこは外部に頼ることも大事。先生たち自身も生徒と一緒にワクワクできるように。

- 探究のフィールドとして守山市を活用していただきたい。自分でやってみようが色々な所で実現できるように。学校内だけでなく、ぜひ他校とも連携してみても面白い。



3-4 先進校視察

京都府立洛西高等学校

○日時：2025年1月30日（木）13：30～

○洛西高校 河本卓教諭、児玉廉教諭

○守山北高校 林教諭、野村教諭、高田教諭

○視察目的

- ・地域と連携した探究学習について
- ・同好会発足の経緯やその活動内容について
- ・「総合的な探究の時間」などとの連携について
- ・部活動として展開する上での課題や困りごとなど

○学校概要

全クラス普通科（全日制）

元々は10クラス規模でスタートしたが、現在は7クラス規模（男女比率）

昨年は国公立大学の合格者が50名以上

（なかには地域連携の取組を武器に総合型選抜で合格者も）

一方でここ2～3年は定員割れが続いている

→ 洛西ニュータウンとして開発、現在は超少子高齢化による過疎化が深刻な問題

周辺の農地などは後継者がいない（高齢化）、空き家問題

京都の学区制では乙訓通学圏として、自転車での通学生徒が90%以上を占める

近隣では、地域と連携した取り組みを特色とする普通科は洛西高校だけ

○地域と連携した授業

- ・「総合的な探究の時間」を1単位ずつ配置
 - 1年：自己・他者理解（マインドマップ作成）
問い出し練習（講演会も実施）
地域企業探究サイクル（職業について）
地域課題探究サイクル（企画アイデア出し）
 - 2年：グループ探究→夏休みに「アクション」
成果物作成、ポスター発表
志望理由書作成
 - 3年：志望理由書作成続き、進路探究として教科学習的な部分がある

○課外活動

★「洛再 Links 活動」

教科書は地元地域、地域再発見を通して自分と社会を再発見する体験型探究プログラム
様々な体験を通して「もの」「ひと」「社会」との「つながり (=Link)」を増やす

洛：京都＝地元地域

再：再発見、再構築、再生

Links：(Local・Information・Network・Knowledge・Sustainable)

地域 情報 ネットワーク 知識 持続可能性

背景：洛再 Links 活動は7年前にスタート

調査書の所見の記入方式が変更になるタイミングで、学年団から調査書に載せられる
ような活動や体験、成長できる機会を生徒に提供しようとして始まった。

①「Gate Links」

- ・1年生全員を対象に、「総合的な探究の時間」で地域連携の取組（'24～）

- ・ボランティア活動の入門編（例）学校裏の農地手伝い

②のPlus Links に繋げるきっかけ作り

→ 認知を学校全体に広げる意味でも、全教員が日を分けて引率

②「Plus Links」

- ・担当教員から学校全体に案内し希望者が参加する（'18～）。

- ・案内は classi や教室掲示、校内放送等で行う。

→ 後述の連携先等から、生徒派遣依頼や連携依頼があったり、学校側からお願いしたりして、様々な活動の場を生徒に提供している。

（現在の例）空き家のリノベーション、農地の手伝い、公園の整備など…

- ・初期：参加生徒は少数で同じメンバーばかり、0の場合もあった

- ・現在：少しずつ認知が広がって、①での活動もあって今年度は参加生徒も多種多様
また、オフシーズンの運動部等が、掃除のボランティア活動に参加する等、他の部活動との連携も行っている。（部顧問がLinksをうまく活用してくれる）
担任の先生も、希望進路や受験方式に応じてLinksにクラスの生徒を出させる。
→ 志望理由書や総合型選抜、調査書の所見など

③「Links 同好会」

- ・学校の戦力となっている。ある程度メンバーも固定できるため、継続的な取組が可能。

- ・週に1回、昼にミーティングを実施（ミーティングだけの参加でも意義あり）。意識が高い生徒が来てくれる。

- ・文化祭での取組でも連動。（舞台セットを地域資源で）

- ・近年は、Linksの取組を総合型選抜の成果物としてフル活用している。

*①②③は課外活動の深度の違い。

○連携先（どことつながるか）

★持続可能で教育活動への理解のある先方

連携の中心：西京区役所 洛西支所（まちづくり課）→ 行政のフィルターがかかり安心
京都信用金庫 → 中小企業などの連携に強い。地元密着。

NPO 等 → 利害関係なく連携できる。大学生とも連携できる。

○学校内の組織体制

- ・校内分掌として「企画部Q課」3名

「総合的な探究の時間」の企画運営、同好会等の課外活動の企画運営（顧問）、広報活動

- ・「同好会」だが、学校内では事実上「部活動」扱い

規約上、教員の旅費や引率 0K。そのため、例えば野球部のボランティア活動として参加した場合でも、その野球部の教員が旅費や特勤申請も可能。保険等も他の部活動と同様。活動内容によって、連携先から事前に相談がある場合はある。（山に入る場合、虫刺され等に関する保険等）

- ・活動の予算

生徒会からのクラブ予算の分配はなし。京都府の〇〇プロジェクト等の申請で予算をいただいたり、府の指定事業等の予算を活用。

- ・「同好会」のままだがベスト

ある種、同好会のゆるさが適切。忙しい時は来なくてよい。与えられたメニューの中から自分たちの興味関心を深めるものを選択している。将来的には、自分たちからメニューを探したりできるとよい。（生徒による自走）

○まとめ

キーワード：「社会実験をしよう」学校を大きな実験室（Labo）とする

→ 「失敗」とは読まずに「挑戦」とする

過疎化などの地域の深刻な課題を逆手にとる

★学校という閉鎖的な空間の中で、いかに社会との接点を持たせる機会を作れるか

自分の目で社会を見てくる環境整備が大事（教員の大きな仕事）

→ 将来のキャリア選択に貢献できる（生徒の発表等の形にはこだわりたい）

（実体験をどう感じるかは生徒一人一人絶対違う）

Links の活動から、総探のテーマ設定につなげるなど、横断的な取り組みになっていけるよう取組を続けていきたい。

3-5 カリキュラム検討のための先行授業の実施

3-（i）「みらい共創」（学校設定教科）

I 「共創」の基礎理解

「無印良品 特別コラボ授業」

日 時：2024 年 7 月 3 日（水）9：00～

場 所：守山北高校 体育館

対 象：2 年（130 名）

講 師：喜多見 智子氏（株式会社 良品計画 空間設計部 大阪事務所）

新井 亨氏（株式会社 良品計画 空間設計部 資材調達・開発課）

タイトル：無印良品が考える「共創」、ものづくりの視点から社会を考える

目 的：当事者を増やすという無印良品の「共創」の考え方や、ものづくりの視点から社会、そして自分自身の生き方を学び、これからのキャリア形成に活かしていくことを期待する。

内容

1 限目は、無印良品の「共創」について3つの実践事例をご紹介いただいた。世の中の“きれいで整ったものがよい”という風潮ではなく、感じよい暮らしの社会の実現のために企業が取り組まれていることについて講義していただいた。その後、「感じよい学校とは？」という問

いについて、生徒たちは意見交換しながら考えを深めることができた。

2限目は、商品開発の裏側から「良品計画」の由来やコンセプト、地元にはしかないものからグローバルの世界へというマーケティングの話まで講義をしていただいた。その後、「地域とともに歩むとあるが、自分たちにできることはなにか？」という問いについて全員で考えた。今回の講義を通して、「空間が美しいだけ」ではなく、そこに関わる当事者、仲間を増やしていくことが「共創」の第一歩であると教えていただいた。

生徒の感想（抜粋）

- ・これから自分事にして考えたり、色々なことをやってみたいと思った。無印良品の考える共創と、新井さんのしくじりの話が一番印象に残っている。（2－1）
- ・いつも使っている無印の商品の開発の裏側が知れてとても楽しかったし、改めて考えさせられることも多くて学びも多かった。（2－1）
- ・「共創」とは色々な人と「共」に「創」ることだと思った。（2－1）
- ・地域の方々の支えがあって今の生活ができていたと改めて感じた。地域のことを他人事と捉えず、当事者としてだれかの役に立ちたいと思った（2－3）
- ・新井さんの話を聞いて、人はだれでも失敗するし、それもOKなんだと思った。（2－4）



▲講演会の様子

Ⅱ「企画提案型アントレプレナーシップ演習」

「北部図書館との連携」

◆概要／目的

守山市の「読書日本一のまち」を目指して図書館活動、読書活動に力を入れておられる中、北部図書館“本の湖”がオープンし、今後より良い図書館活動をするため、10代の生徒の率直な意見を聞きたいと「北部図書館司書と守山北高校の図書委員との交流会」を計画。（守山市図書館協議会にて、「本校の地元根拠校として協力できることは、協力したい。」との発言もあつての計画でもある。）

〔第1回交流会〕

日時：7月2日（火）12：10～13：30

場所：守山北高校図書館

担当者：佐藤志歩氏（北部図書館司書）

内容：北部図書館の説明、図書館へ期待することなどの意見交換

参加生徒6名

話題：『どんな図書館なら行きたいと思うか』

○主な意見

- ・楽しいイベントがあれば行きたいと思う。例えば、お互いに好きな本の交換会とか。
- ・ツイッターやインスタなどでポップ作って写真とかで『こんな本置いてます』的な広報活動をしてみてはどうか
- ・1冊1冊について詳細に説明をしてくれたり、紹介してくれる人がいてほしい
- ・本は、自宅にいてもネットで手に入れることができる。それでもわざわざ図書館に行きたいと思わせる何かがあると、行きたいと思うかもしれない。
- ・家から遠い、通学路から離れている等の立地条件では行きにくく、また高校は学校図書館がいつも開いているので学校で済ませてしまう。中学校の学校図書館は、鍵がかかっていることも多かったので、近くに図書館があれば行くかもしれない。

[第2回交流会]

日時：7月16日（火）10：30～12：00

場所：守山市立北部図書館

守山市水保町 2236 番地 （本校から約 4 km）

内容：『魅力的な北部図書館にするには』

参加生徒：4名

10：15 挨拶・本日の流れ

10：20 館内見学

10：50 休憩

11：00 ワークショップ

11：45 解散

○ワークショップの内容（主な意見抜粋）

館内の案内を受けた後、『良かったところ』『残念なところ』など、気づいたこと、自分ならこんなことをしたらいいのにと考えたこと等を、ワークショップ形式で自分の意見をポストイットなどに書き込んでいながら、みんなで意見を共有していく。これら書き込んだものは、北部図書館はもちろん本館の職員にも見てもらう。

<空間として（良い点）>

- ・テラスが飲食可能⇒自販機があればよい（ドーナッツや紙コップで飲むドリンク）
- ・室内からでも景色が楽しめる⇒天井からでも見えるようにする
- ・子どもが楽しめるスペースがある（土壁のスペース）
- ・木造なのであたたかみがある（落ち着いた雰囲気）
- ・勉強スペースと本を読むスペースが分かれている（机にコンセプト）
- ・自然光が良くも悪くもある⇒やりすぎない程度に屋根にスタンドグラスやガラスを入れる

<空間として（悪い点）>

- ・テラスの入り口が少し狭く感じる
- ・テラスから見る近くの景色は悪い
- ・読むスペースが少ない⇒多目的室を使う・カウンターも読むスペースを空けておく

<その他>

- ・子どもの本はなるべく低いところに、大人の本は高いところという工夫がされている
- ・大人の本、子どもの本ではなく、ジャンル別になっている
- ・小学校が近いので、交流ができる
⇒小学校・中学校・高校で交流会ができるのではないかな

- ・玄関の屋根の部分にライトをつけても良いと思った⇒おしゃれなライトをつける
- ・本の紹介を増やした方が、手に取りやすい⇒ポップを作る
- ・7つの秘密がおもしろい⇒もっと増やしてもよいのでは
⇒宝探しができれば面白い



▲交流会の様子

Ⅲ「実践型インターンシップ」

(i) [はすねだこども園] (教育群)

参加生徒3名 (守山北高校2年生)

事前打ち合わせ 日時：7/11 (木) 13:15～

内容：実習の内容、実習に関する注意事項の確認

実習当日 日時：7/23 (火)

8:30 集合

9:00 おやつ、排泄補助、着替え補助

9:45 水遊び

10:40 お風呂

11:30 昼食

13:00 休憩 (実習生の昼食)

13:30 実習日誌記入

14:00 反省会

14:30 実習終了、解散



▲実習の様子

*第一回体験入学で成果発表を実施



(ii) [ゆいの里 グループホームゆい] (福祉群)

参加生徒1名(守山北高校2年生)

事前打ち合わせ 日時: 7/8(月) 12:30~

内容: 実習の内容、実習に関する注意事項の確認

実習当日 日時: 7/25(木)

- 8:50 集合
- 9:00 オリエンテーション、利用者の方のそうじ、ラジオ体操に合流
- 9:30 喫茶の準備、手伝い
- 10:00 職員打合せ
- 10:15 ごみ捨て(散歩含む)
- 10:30 昼食づくり手伝い、配膳準備
- 12:00 昼食
- 12:30 休憩(実習生の昼食含む)
- 13:15 洗濯物整理手伝い、職員の方にインタビュー
- 15:00 おやつ
- 15:30 実習日誌記入と反省会
- 16:00 実習終了、解散



▲実習の様子

*第二回体験入学で成果発表

インターン先 情報

- 社会福祉法人慈恵会 ゆいの里 グループホームゆい
- 認知症の方が共同生活する施設
→イメージはシェアハウス
- 一人一人の個性に合った生活を心掛ける

当日何をしたか

〈午後〉

- 洗たくたみ
- 図書館に行く(散歩など...)
- お風呂(週2日程度)
- 交流

〈毎日すること〉

検温

朝(9:00)

昼(13:00) → 体調を確認する

夜(19:00)

(iii) [滋賀県立大学] (教育群)

参加生徒2名(守山北高校2年生)

日時: 8/17(土) 9:00~

参加講座「SDGsと滋賀のグローバルイノベーション -近江の暮らしとなりわい-」

(夏季集中講座3日間) *2日目に参加

- 1限: 「SDGsと地域社会」 上田洋平先生
- 2限: 「グローバルイノベーション 企業の挑戦」
油藤商事代表取締役 青山裕史氏
日映志賀社長 中村信滋氏
ダイフクサステナビリティ 三好順子氏
- 3~4限: 「グローバルイノベーション 地域の挑戦」
せせらぎの郷須原 藤岡いずみ氏
KUMINO工房 井上慎也氏
海津漁業協同組合 田村志帆氏
雲雀が丘学園高校 生徒





▲授業の様子

○参加生徒の感想（i・ii・iiiをまとめて抜粋）

- ・「介護」というイメージが、自分の中にあったのと実際にやったのとで違ったのが大きな変化だった。自分のやりたいことができてすごくよい経験になった。
- ・相手との距離を縮めることができたときにすごくやりがいを感じた。実習が終わった後全体的にやりがいを感じた。
- ・インターンシップで社会のことを知ると一歩先に進めるし、これからの高校生活や自分の意識が少し変わりそう。
- ・今回参加したことで実際の保育士の現場を体験することができ、またさらに保育士になりたいという夢が強くなった。
- ・今回文系の授業を受けたが、先生が言っていることの半分くらいしか理解できなかった。大学に進学を目指しているが、もっともっと高校での学習をがんばろうと思った。

IV「社会実装プロジェクト」

（i）「守山市民ホール リニューアルに向けたワークショップ」

日時：2024年7月27日（土）13：00～

会場：守山市民ホール 学習室

内容：リニューアル改修後にやってみたい・やってほしい事業を考える

参加生徒7名（吹奏楽部の生徒）

守山市民ホールは1986年の開館からまもなく40周年を迎える。老朽化した施設、設備の改修が必要な時期に差し掛かっている。これからも長く愛される市民ホールにするために、単なる修繕ではなく、市民の声をやニーズに対応した新たな市民ホールへのリニューアルを検討している。リニューアル後にどんな機能があったらよいか、どんな風に利用していきたいかを、市民の方々と一緒に考えるワークショップを開催する。

流れ

- 13：00～ 挨拶、市民ホールの概要、ワークショップの説明
- 13：40～ グループワーク
テーマ「改修後にやってみたい、やってほしい事業を考える」
- 14：40～ グループ発表
- 14：55～ アンケート記入
＊守山市の大規模改修基本計画策定の参考にされる





▲ワークショップの様子

ワークショップの主な意見

<やってみたい事業>

- ・楽器の練習や自主練習が自由にできるスペース
- ・共用エリア（ロビー、屋上、中庭）でイベント（世界の楽器体験など）
- ・だれでも市民ホールの舞台にたてる
- ・イベントの開催（曜日ごと、アイドル、ゲーム、ブレイキン、映画等）
- ・市民の学園祭的なもの
- ・SNS の活用
- ・静かなロビーは入りにくい

<やってほしい事業>

- ・子供関連の遊具（アスレチック、ボルダリングなら大人もできる）
- ・学びのスペース確保（自習室など）
- ・カフェをもっと開放的にしてオープンスペースに
- ・雨の際の動線が悪く、濡れずにホールに入れるように
- ・アクセスが悪い(ピストンバス)
- ・楽器の搬入が苦勞する。バリアフリー化
- ・リハーサル室を大ホールの舞台と同じ規模に

<生徒の感想（抜粋）>

- ・自分の住む地域について深く考える機会がなかったので、貴重な経験になった
- ・意外といろんな年代の人たちと考えるが楽しかった
- ・外部の人ともしっかり話せてよかった
- ・リニューアル計画に関わって楽しかった（参加してる感、手伝っている感）
- ・幅広い年代のひとと話していて、世代によって考えていることがバラバラで楽しかった。

(ii) 「アントレクエスト - 次世代の起業家教育共創プロジェクト-」

日時：2024 年 8 月 10 日（土）10：00～

会場：守山市役所 1 階 多目的ホール

対象：守山市内をはじめとした滋賀県内の中学高等学校に在学中の生徒

参加生徒 4 名（生徒会執行部の生徒）

概要

5人グループに分かれて、身の回りの課題を解決するアイデアを創出し、ゲーム感覚で起業体験ができるプログラム。本プログラムを通して、世の中の「不確実性」「失敗への耐性」「現実との整合性」を再現し、「仕事とはなにか」「自分の強みや弱みはなにか」「世の中にはどんな課題があるのか」など、今後の将来に役立つスキルを体験できる。

1. チームビルディング「会社をつくろう」「市場を調査せよ」
2. アイデアの構築「商品をデザインせよ」「事業計画を作成せよ」「資金調達せよ」「PR 設計せよ」
3. 発表会「販売／決算せよ」「次のプランを設計せよ」



▲ワークショップの様子

(iii) 「「もりやまいち」への参画」

日時：2024 年 12 月 22 日（日）10：00～15：00

生徒：生徒会執行部 1 年生 5 名

内容

守山市の中山道で、毎年 1 2 月に行われている「もりやまいち」に本校生徒が参加した。守山市役所から企画提案いただき、One Smile Tech さんと連携して、11 月からスマイルプロジェクトを始動していた。このプロジェクトは One Smile Tech さんの開発した笑顔を検知するシステムで、1 回の笑顔が 1 円の寄付につながる仕組みから成り立っている。本校の生徒はもりやまいちの参加者に対して、会場を巡回しながらプロジェクトの説明や協力依頼を行い、多くの人から笑顔を集めた。（1 万笑顔達成）集まった寄付は、福祉施設や能登半島の被災者支援に募金する予定である。また、これらの取組がメディアにも取り上げられた。



▲取り組みの様子

V 「マイプロジェクト」

「笠原しょうがで SDGs」

生徒：生徒会執行部

概要

【ショウガの栽培】

5月上旬から守山北高校の前の畑にてショウガ農家の津田様の協力のもと栽培。

【研究】

長浜バイオ大学 （高大連携担当）福井 充 様、
（生物有機化学専門）河合 靖 教授

夏休みの取組

- ・ショウガの水分量についての実験
- ・ショウガの成分についての実験
- ・ショウガが身体に与える影響について（講義形式）

【研究の成果発表】

ショウガ農家にむけての発表

→笠原ショウガの成分や、身体への効果など学んだことをまとめ、笠原ショウガの特徴やアピールポイントをプレゼン。12月25日の「しが学びの祭典」にて、ポスター発表を実施。

【全体計画】

8月中旬（夏休み）	収穫
8月中旬（夏休み）	本校にて実験（①の実験と②の実験の事前準備）
8月下旬（夏休み）	大学に行き実験（②の実験と講義を受ける）
9月～12月	研究のまとめ・発表用のパワポ作成
1月～3月	ショウガ農家の方々への発表



▲取り組みの様子

3—(ii)「もりきた学」(総合的な探究の時間)

I「人を想う心」

内容

「人と出会う」ことを具体的に生徒が考えるために、「人の心を想うこと」をテーマとした活動(校長先生の講話含む)でクラスのスローガンを制作した。



▲校長先生の講話



▲クラススローガン

◀探究マップ(1年)

II「コ・クリエーション」

(i) ロールプレイング型講演会

日 時: 2024年6月19日(水) 13:30~

場 所: 守山北高校 教室、格技場ほか

対 象: 1年(124名)、2年(130名)

講 師: 蓮行氏(京都大学特定准教授/劇団衛星)

タイトル: みらいを共に創るための劇的コミュニケーション

目 的: 劇の活動を通して、人の言葉や行動、人と人のコミュニケーションそのものに目を向け、『コミュニケーションデザイン』の考え方やその意義について、体験を通して学ぶ。

内容

「コミュニケーションデザイン」をテーマとして、ワークショップを通してその楽しさや意義について学んだ。誕生日という情報を頼りに人とつながる、「いいですね」とお互いの発言を肯定し話題を展開していく、滋賀をイメージするモノでの区分や集合、さらには様々なコトのイメージを2人組で表す活動を体験した。伝える内容や相手、条件によってその方法を工夫することで、コミュニケーションが展開し、人と人の間がほぐれ、関わりができていく楽しさを、実感を伴って知る機会となった。



▲講演会の様子

生徒の感想（抜粋）

- ・普段は自分のクラスの人としか話さないで、他のクラスの人たちとコミュニケーションをとれてよかった。
- ・言葉だけではなくアイコンタクトや色々な方法で、人と意思を共有できるんだと思った。
- ・コミュニケーションの大切さを改めて知ることができました。人を傷つけない言葉を日頃から使っていくと、自然とコミュニケーションがとれることがわかりました。
- ・他人とコミュニケーションをとる時は、思いやりを持つことが大切だと思った。

(ii) 「コミュニケーション基礎」

内容

基本スキルとして、様々なコミュニケーション活動を通して、モノやコトの意味や価値を協働して生み出すことの意義や方法を、「コ・クリエーション」の授業を通して学んだ。



▲「三角に集まれ！～クラスの傾向を探ろう～」



▲「ペーパータワーを作ろう！」

Ⅲ「アクティブブックダイアログ」（文献調査）

内容

探究テーマを決める前段階の話題提供と、文献調査の手法獲得を目指してアクティブブックダイアログを行った。その後、カテゴリー希望調査を行い、カテゴリー別の探究クラスに分かれた。



▲探究マップ（2年）



▲アクティブブックダイアログ

Ⅳ「住人叶色」

内容

市役所の方に地域理解のための講演会を実施していただいた後、本校近郊で特徴的な活動をされている様々なジャンルの方（12人）を対象として、各クラスで少人数の班（2～3人）を作り、現地を訪問し、取材や体験活動を行った。この地域で仕事を展開されている方に会い、直にお話を聞いたり見学したりする体験を通して、様々な生きかたや考えかたに触れ、これからの自己の探究テーマや進路を考えるきっかけとなった。

実施日時：2024年12月12日(木)、13日(金)、19日(木) 午後5時間目・6時間目

訪問先

びわこ地球市民の森(平塚英史氏)
よってこファーム (川井玲央人氏)
社会福祉法人ゆいの里 (廣田岳尚氏)
佐川美術館 (藤井康憲氏)
キヨシ商会 (南平喜代和氏)
鉄人工房マツヤ (松谷悦男氏)
守山市環境コミュニケーター (武田みゆき氏)
井入農園 (井入吉信氏)
Vita (出口湧己氏)
はすねだこども園 (川田久美子氏)
BIWAKO DAUGHTERS (中川知美氏)
ビワコパール (廣瀬香織氏)



▲活動の様子

○生徒の感想（抜粋）

- ・購入した人が「おいしい」と感じてたくさん買ってもらえるように、様々なことを工夫していて、すごいなと思いました。私たちの暮らしを支えてくれているのが、農業だと思いました。
- ・死と隣り合わせの職業であることを知った。介護の必要性や、高齢者の方と関わるうえでの大切なことなど、たくさん知ることができで、考えが深まった。
- ・やりがいは、人に伝えて楽しいこと。多くの人に美術品の良さを伝えたい、趣味を仕事にできたと話されたことが印象に残った。人と会話するのが好きだから、作品を通していろんな人と話したい、自分の話を聞きに来られるファンを増やしたいと聞いた。
- ・室内でもできる自転車のトレーニングマシンにも試乗車できて、貴重な体験をさせてもらいました。さらには、自分の自転車の不具合のある場所を修理してもらったりして、充実したフィールドワークだったと思います。
- ・琵琶湖に行って、普段見れないところを見て、砂のところにカモの足跡があたり、大きな根っこのある木など、いろんな発見があった。武田さんのお話を聞いて、改めて琵琶湖の大切さや美しさが分かったし、気付けた。普段見ていない所をみたりと新しい発見が多くあり良かったし楽しかった。

V「もりきたフォーラム」

学年全体で成果発表会を行う予定。

1年は3月実施 2年は2月実施

VI「地域探究」

(i)「探究する力」講演会

日 時：2024年7月3日（水）10：00～

場 所：守山北高校 格技場

対 象：1年（124名）

講 師：吉田大作先生（京都芸術大学クロステックデザインコース准教授）

タイトル：『今、なぜ探究か？ このヤバい世界を進むための武器（視野）を持とう！』

目 的：個々の生徒が、現代社会の情勢や課題、今後求められる資質能力について知り、
これからの探究活動の意義を理解する機会とする。

内容

現代の社会情勢（少子化と人口減少、経済状況の変化やAIの台頭など）を、印象的な数値や図を交え、大変分かりやすくお話しいただいた。生徒たちには、自分たちが大人になった時に何が起こるのか、その当事者としていかに関わっていくかを考える機会となった。さらには、その時に必要なものは「好奇心と行動力」であり、思い込みで判断せず、自分自身が集めた情報を大切して「どこの、誰の、何を解決するのか」が問われることや、今からしっかりと点をいくつも打っていくと、それが突然つながる「Connecting Dots」となること、日々の行動や興味関心そのひとつひとつに意味があることを話して頂いた。格技場は暑かったが、その中でも、お話しに聞き入る真剣な表情が、たいへん印象的だった。



▲講演会の様子

生徒の感想（抜粋）

- ・今の世の中で、AI にはない人間特有の「好奇心」と「行動力」が大切だと思う。この2つをしっかりと身に付けていきたい。
- ・今まで、少子高齢化など自分には関係ないと他人事で考えていたけれど、本当に日本が大変なことになると知って驚きました。自分の将来についてどうするか、将来のために何ができるのかをしっかりと考えたいです。
- ・僕たちは常識だと思っている物事も、偏見かもしれない、もう一度見つめなおさないといけない。そのことを「探究」ということを知りました。

(ii) SDGs セミナー

講 師

西田 智美 氏（キャリアコンサルタント / 守山市在住）
田口 真太郎 氏（成安造形大学 講師 / 守山北高等学校 コーディネーター）
廣瀬 香織 氏（一般社団法人ピワコパールサプライズ 代表理事）
杉本 悠太 氏（守山市企業連携室 係長 / 守山北高等学校 キャリア教育推進委員）
麻生 知宏 氏（NPO 法人 Since 理事長）
田中 洋一 氏（NPO 法人クラブアトラクション 理事長）
北井 香 氏（NPO 法人まちづくりスポット大津 マネージャー）
中井 健太 氏（合同会社 andstep 代表 / 守山北高等学校 カリキュラムアドバイザー）
堂ヶ崎 篤 氏（ロゴスピエリ守山店 店長）
佐藤 大知 氏（フォトグラファー / みらい共創科動画制作）

タイトル：『今まさに起きていること、その当事者に会う！』

目 的：生徒がゲスト講師の活動や考え方に直接触れることで、自分たちが進めている探究テーマについて再考する機会とする。（問いを鍛える）

講演内容

5 限目は守山市周辺で活躍されている方をゲスト講師に招き、自身の活動や地域の課題等についてトークセッション型の講座を実施した。クラスによって、トークテーマも異なり、体験を伴う授業を実施していただいたり、映像やスライドを用いて、それぞれのゲスト講師の方の活動やその課題点を講演していただいた。

6 限目には、カテゴリー別（探究用クラス）に分かれて、5 限でそれぞれが聞いた講演をレジュメにまとめてプレゼンを行った。その後、ゲスト講師が各クラスを巡回される中、それぞれの探究テーマに関する相談や意見交換を行った。



▲授業の様子

○生徒の感想（抜粋）

- ・自分自身の体験を生かしてそれを仕事にしていることがすごいと感じたし、自分にもできるかもしれないと考えられるようになった。（2-3）
- ・まちづくりの話を聞いて、“当事者”という言葉が何度も出てきた。自分の生まれ育った場所はどうだろうか、もっと自分も関われないか、考えられる機会になった（2-4）
- ・いろんな活動に参加したり、様々な人と交流したりしながら、自分の将来を広げていけるように感じた。すぐに将来を決めなくても自分のペースで考えようと思った。（2-1）
- ・「失敗を恐れてはいけない」という新しい発見があった（2-2）

Ⅶ「もりきた未来シンポジウム」（もりきた学 特別編）

日 時：2024年7月18日（木）9：20～11：55

場 所：守山市民ホール 大ホール

講 師：世津田スン氏（ゲストスピーカー）

杉本聡氏（パネラー：本校 0B で現守山市役所職員）

伴野友彦氏（パネラー：本校 0B で守山市内で起業）

北脇すみよ氏（パネラー：本校 PTA 会長）

生徒代表（パネラー：生徒会長）

田口真太郎氏（モデレーター：成安造形大学 講師）

参加者：全校生徒、保護者（希望者）、地域の方々

学校外からの参加者はおよそ 30 名であった（保護者・報道関係含む）



○シンポジウムの主な目的

Ⅰ 魅力ある学校づくり

- ・“もりきた学”（総合的な探究の時間）の推進
地域や社会の課題に向き合い、生徒自らが生き方を探究し、一人一人が生きる力を育み、さらには個々に応じた多様な学び、進路実現を可能とする学校づくり
- ・情報発信と PR
新学科“みらい共創科”の開設に向けた学校づくりに関する取り組みを広く発信し、賛同者を増やす

Ⅱ 学校内の生徒に向けて

- ・探究学習“もりきた学”の授業の一環
- ・自己肯定感や学校肯定感向上のきっかけづくり
- ・自らの進路や生き方を考えるキャリア教育の一環

流れ

9：20～ オープニングアクト（守山北高校吹奏楽部による演奏）

9：30～ 開会挨拶（杉原校長、森中市長）

9：45～ 世津田スン様 ゲストトーク（質疑応答含む）

10：45～ 休憩

10：55～ ようこそ先輩 特別編（杉本様、伴野様、北脇様、入江さん、田口さん）

*トークテーマ

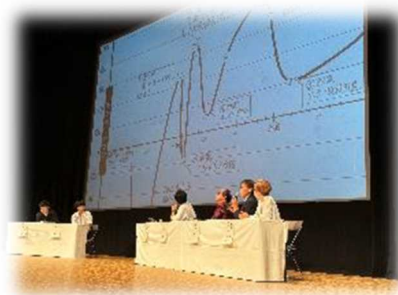
- ・自己紹介（活動紹介）
- ・人生の折れ線グラフ
- ・業界の深堀（社会とは）
- ・高校生へメッセージ

11：45～ 閉会・記念品贈呈・記念写真撮影

○概要

吹奏楽部によるオープニングアクトから始まり、第一部はゲストトークとしてイラストレーター兼メンタルトレーナーとして大活躍の世津田スンさんをお招きして「イラスト・心理学で切り拓く人生」と題してご講演をいただいた。勘違いに気が付くと人生は楽になるという導入から、学校は学びの場ではなく、経験を蓄積する場であることや、やる気がある状態は奇跡的なことで、まずは安心・安全・リラックス状態の環境づくりと、外的な要因ではない、内的な要因から内発するやる気が大事だと生徒に伝えていただいた。夢よりも価値観が大事という、生徒の生き方へのヒントをいただき、失敗は恥ではなく、一生懸命な人が格好悪いのは当たり前で、コントロールできないものを変えようとしなくていいことが大切だと力説していただいた。

第二部では、本校 OB や PTA 会長、生徒代表によるパネルディスカッションを行った。登壇者が人生の折れ線グラフを提示し、その説明や、失敗や挫折にどう向き合ってきたかを中心にお話いただいた。最後に世津田スンさんからイラストを学校に寄贈いただき、そのイラストで作成したクリアファイルを生徒に配布した。今回のシンポジウムを通じて、生徒のキャリア形成や自己肯定感向上のきっかけになった。



▲シンポジウムの様子



▲スンのイラストで作成したクリアファイル

○生徒感想（抜粋）

[スンさん講演]

- ・世津田スンさんの話を聞いて、自分自身も心理学に興味をもつようになった。「人の悩みは、その人の性格に左右される」ことが一番印象に残っている。
- ・最近やる気がでないことが多く悩んでいたが、「やる気は奇跡」と聞いて少し前向きな気持ちになった。
- ・人生は18歳で決まらないと聞いて、すごく安心したし、気持ちが楽になった。

- ・「失敗＝恥ではない」が印象に残っている。自分は失敗する前に逃げようとする部分があるので、恥ずかしいことでないと考えるとチャレンジできそうです。
- ・自分に刺さることばかりだった。他人を変えようとせず、自分が変わるべき。そのために習慣を変えるしかない。逃げるのが習慣になっていないか。

[ようこそ先輩特別編]

- ・がんばれ、がんばろうではなく楽しむというポジティブな考え方が印象に残っている。
- ・杉本さんの話を聞いて、幼いときに余命宣告をされたエピソードが印象に残っている。じぶんだったらそのときにどういう行動をとったかを考えさせられた。
- ・大人になっても高校生時代を覚えているんだなと思って、あとから振り返った時に後悔しないようにしたい。
- ・ほとんどの人のモチベーションが学生時代に大きく変化していて、自分がいまその時点にいるんだと思うと、つらい時も乗り越えていけそうです。恋愛の部分が特に盛り上がった。

○講師感想（抜粋）

- ・なかなか、後輩たちに色々な経験談を伝える機会がないため、大変良い時間であったと感じています。他のみなさんもそうですが、半分も話せていなかったと思います。それだけ高校生活で様々で出来事（嬉しいこと、悲しいこと、悩むことなど）や出会い（友達、先生、地域の方など）があります。その中で、本人がどのように感じ、どのように決断し自分の道を決めていくのかが人生の分岐点かなとも思っています。今回のシンポジウムを通じて、生徒たちに刺激を与えられればと思い参加をさせていただきました。新しい学科ができ、生徒の選択肢も増えて大変良いことだと思います。私自身は高校生活を全力で楽しむこと、生徒と先生方が一体感を持って全力で学校生活を過ごせることが、何よりもその学校の魅力だと思っています。また、我々OBでできることがありましたら、全力でサポートさせていただきますので、その際にはお気軽にお声掛けください。校長先生はじめ、他の先生方にもよろしくお伝えください。（杉本さん）

3-6 守山北高校研究成果報告会

日時：3月19日（水）9：10～11：30

場所：守山市民ホール 小ホール

内容：1年生「総合的な探究の時間」《もりきた学》学年発表会

- ・1年間の活動紹介、本日のゲスト紹介
- ・生徒発表・ゲストからのコメント

1年生の「総合的な探究の時間」《もりきた学》では、「人と会う」ことをテーマとして1年間さまざまな活動を行い、ここでの取組成果を「学年発表会」で報告した。

12月に行った12か所へのフィールドワーク「住人叶色（じゅうにんという）」のクラス発表会を経て選ばれた12班28人が、それぞれ訪問先で学んだことや体験したこと、1年間の活動の振り返りを発表した。

会場にはゲストとして、フィールドワークでお世話になった方々をお招きした。各班の発表についてのコメントや、「失敗を恐れずに、今、挑戦してほしい」といったメッセージを生徒へお話しいただいた。保護者や関係者も参観され、会場は終始あたたかな雰囲気各班の発表が進んだ。

守山北高校の「総合的な探究の時間」は今年度から全面的にリニューアルし、学校がある守山市の北部エリアを中心に、校外との様々な連携を用いて、生徒の主体的な活動と探究的な学びを推進している。来年度から始まる新学科の活動や普通科と共通する授業の中に、さらに展開していく。

今回の研究成果報告会では、将来につながる連携が形となり、皆でその良さや可能性を共有することができた。



○生徒の感想

・各班が訪問先で学んだことや、問題点についてスライドに要点がまとめられていて、見やすく分かりやすかったです。実際に訪問先の方々のコメントも聴くことができ興味深く、貴重な機会だなと思いました。学ぶ姿勢とともに、興味を持とうとする姿勢が大切だと感じました。

・どの仕事でも人との関わりがあり、仕事によって関わり方、理由などが違うということが分かった。今後もいろんな人と出会い、関わるのがたくさんあるから、その1つ1つの出会いを大切にしていきたいと思った。

・今回はほかの班の発表を聞いて、あらたな発見や気づいたことがたくさんあって、とても良かったです。発表を聞いていなかったら、自分の考えが変わらなかったことがたくさんあったと思います。

・どの方もそれぞれの思いや、やりがいをもって今の仕事をされているということが分かりました。仕事をするのは大変なことが多いけど、お客さんに喜んでもらえたり、地域の人との交流を深められることが、やりがいのひとつになっていると思いました。私も、自分の好きなことをつなげたり、やりがいのある仕事につきたいなと思いました。

第4章 参考資料

4-1 キャリアデザインイメージ図



▼キャリアデザインイメージ図

学年	キャリア導入期 1年：多くの選択肢から自己目標をデザイン			キャリア考察期 2年：自己目標実現に向けた学びの実践			キャリア展望期 3年：学びをまとめてキャリア形成へ		
学期	1Q	2Q	3Q	1Q	2Q	3Q	1Q	2Q	3Q
“もりきた学” 総合的な探究の時間	テーマ“人に会う” ～基礎的なソーシャルスキルの獲得～			テーマ“道に会う” ～探究学習の実践と進路意識の醸成～			テーマ“己に会う” ～独自研究プロジェクトによる学びのまとめ～		
	・人を想う心 ・コミュニケーション基礎 「コ・クリエーション」	・文献調査 ・地域探究 「住人十色」	・成果発表会 「もりきた フォーラム」	・自己分析 ・学部学科／ 業種研究	・地域探究 「実践編」	・成果発表会 「もりきた フォーラム」	・自己探求 「志望理由書／ 自己PR文」	・自己探求 「卒業レポート」	・自己探求 「研究集録完成」
“みらい共創” 新学科学校設定教科	“「共創」の基礎理解と技術習得” ～多様な人との共創に必要な探究スキルの習得～			“「共創」の実践 一地域連携プロジェクト” ～地域と協働したインターンやマイプロジェクト～			“「共創」の発信・還元 一社会実装プロジェクト” ～学びの成果を地域や社会に還元する活動～		
	・探究基礎 「ブレインストーミング」 ・探究表現 「グラフィックレコーディング」	・企画提案型 アントレプレナー演習 「地域課題テキスト」	・コンペ大会 ・プロジェクト実施	<アントレ> ・地域探究	・アントレ活動 (フィールドワーク・ボランティア)	・マイプロジェクトⅠ	・社会実装プロジェクト 「学びの言語化」 「地域への発信」	・学校デザイン 「学校魅力化プロジェクト」	・成果報告会 ～後輩のアドバイザー
キャリアデザインプログラム 進路関係行事	・キャリアデザインⅠ 「文理選択ガイダンス」 「進路学習」	・キャリアデザインⅡ 「職業講演会」 ・進学補習開始	・キャリアデザインⅢ 「模擬講義」	・キャリアデザインⅣ 「もりきた学と連動（学部学科／業種研究）」	・キャリアデザインⅤ 「ようこそ先輩」	・キャリアデザインⅥ 「進路別説明会」 ＊保護者含む	・進路別ガイダンス (進学補習、看護対策講座、職場見学、面接指導、公務員勉強会など)		
							進路実現		

4-2 学校改革プラン

滋賀県立守山北高等学校 学校改革プラン

目指す 学校の姿

- ・生徒が主体的に学び、進路実現に向けた確かなステップを踏める学校。
- ・教職員が生徒と共に成長し、教育にやりがいを感じられる環境。
- ・地域と密接に結びつき、社会に開かれた学校づくり。

手段

- ・新学科「みらい共創科」の設置を契機に、学校全体の教育内容を改革する。
- ・生徒の主体性を引き出し、進路実現に向けたサポート体制を強化する。
- ・地域社会との連携を深め、学校の魅力を向上させる。

重点施策



生徒の学び

教育プログラムの充実

探究活動の成果発表の場を充実させ、生徒の学びを可視化。
非認知能力の定量的評価の導入を検討し、個々の成長を反映する評価システムの研究。

生徒のキャリア形成支援

進路指導の強化（キャリアガイダンス・インターンシップの充実）。
地域企業や大学との連携を強化し、実践的な学びの機会を提供。



学校環境・文化

学校環境の整備

スクールバス等の導入を検討し、通学環境を改善。
校内の施設改善（よりきたベース・生徒の居場所づくりなど）。

生徒の主体性と学校文化の強化

生徒が主体的に企画・運営するイベントの促進（学園祭の活用）。
部活動の活性化（外部コーチ導入、入部率向上、地域連携強化）。



教職員の体制

教職員のサポート体制

特別支援教育の充実と、多様な生徒に対応する指導力の向上。
スクールカウンセラーの常駐化を目指し、生徒の心理的サポートを強化。
教職員同士の連携を深め、情報共有を円滑に行う。

各分掌の現状課題とアイデア

1. 教育環境課

現状課題

何らかの課題や特色を持つ生徒が増加
授業担当者の係り方
クラス替えのない新学科（40名）

アイデア

ガイドブック（具体的事例集）の作成
特別支援教育を活かした授業・テスト作成
複数担任制の導入 / 研修の実施
SC（スクールカウンセラー）の増強

3. 生徒指導課

現状課題

スマホのルール
服装指導（気温による制服選択） / 髪型指導
リーダーの養成 / クラスの連帯感

アイデア

スマホの適切な使用について生徒と考える機会を創出
気温に応じた制服の着用を検討
髪型指導のあり方
学園祭でのクラス行事を創設導入
クラス活動の発表（ポスターセッション）
ルールを守る意識づくり
災害時の対応マニュアルの提示

2. 教務課

現状課題

教務規定集の更新 / 新学科の成績の扱い
学年・他分掌との情報共有不足
10段階評価から5段階評価への変更
数学科と普通科の評価の平等性
同一科目の成績のつり合いの統一

アイデア

教務規定集の更新
成績情報の共有の場を創出（毎月or毎学期）
共有のメンバーを明確化
5段階評価のみに統一 / 教科主任会議で決定
非認知能力の評価

4. 進路指導課

現状課題

進路を自分事として考え行動できていない
「Classi」の活用が一部教員に依存

アイデア

進路指導を生徒が主体的に考える工夫
「Classi」の全教員での共通理解を図る
3学年を過ぎた効果的な活用方法の検討と実施

実施ステップ

短期（1年以内）

新学科の規定整備、探究活動の発表機会の設置、教職員研修の実施。

中期（3年以内）

キャリア教育の強化、学校全体の雰囲気改善、地域連携の強化。

長期（5年以内）

通学環境の整備、設備投資、学校の魅力向上施策の完了。